お姉様と弟クン

朝比奈颯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お姉様と弟クン

【Ｎコード】
Ｎ７０７９Ｃ

【作者名】
朝比奈颯

【あらすじ】
家の所有権と生活費を握るゴーイングマイウェイな姉と大学生で物語のツッコミ役な弟の共同生活。なんと地の文も天の声という一つのキャラクターとして喋ります。つっこむし、ボケます。姉や弟と会話もします。そんなキャラクターの濃い面々に弟がひたすらツッコミを入れるホームドラマ。基本的に一話完結物。

第1話　毎朝の出来事なんです

「起きろー」
姉がいつものように弟の部屋に突入してきた。弟がガバッと起きて、姉を見る。
「姉貴(あねき)！！勝手に入ってくるなっていつも言ってるだろ！！」
そうこれはいつもの朝の出来事。
「いつもって言うな！！」
ナレーションに弟がツッコミを入れているが無視しよう。
都会で働いている姉の元に、地元を離れ都会の大学に進学した弟が転がりこんできた奇妙な二人暮らしである。いや稀にある二人暮らしである。
「自分で訂正するなよ！！」
「誰としゃべってるの？」
「天の声と！！」
そろそろ話を進めてもらわないと困るので姉、進めてください。
「まぁまぁ。天の声は無視するもんよ。それに別に姉弟(きょうだい)なんだから部屋入ったっていいじゃない」
「兄弟の間違いだろ…。こんなに男らしい姉は普通いない。とにかくプライバシーは守れ！！」
「この家の家賃出してるのは誰でしょう？」
姉が凶悪と呼べるほどニッコリと笑った。
「…姉貴、です…。でも性別違うんだからもうちょい気にしてくれ」
「姉弟の間に性別なんて隔(へだ)たりはない！！」
いや、あるだろうよ。
弟が深いため息をついた。
「で、朝からなんの用？今日は授業ないって昨日のうちに言ったよな？」
「あれ？そうだっけ？まぁいいや。朝ご飯作って」

姉というのは自分勝手な生き物である。
太陽が高く上っていくのとは反対に弟のテンションは段々下がっていく。
「なんで俺が…」
「お願いしゅーちゃん♪」
「しゅーちゃんて誰だよ！！俺は俊介(しゅんすけ)だ！！」
「対して変わらないじゃん」
「大分変わるだろ！！」
こうして弟は日々ツッコミに磨きをかけていく。
「かけてねぇよ！！」
ツッコミを入れてもどうせ朝食は弟が作ることになるのです。
「はぁ！？」
なるのです。
「俊介…食費をくれない親の代わりに毎日稼いでいるのは誰でしょう？」
「…姉貴です…」
弟が諦めてベッドから出てきた。洗濯物の山から適当に服を引っ張り出して…。
「いつまでいる気だ…」
「いつまでいたっていいじゃない」
あ、弟の額に血管が浮かんできた。
「出てけ！！」
姉は部屋を追い出された。ありがちなパターンである。
「天の声、うるさい！！」
…弟に怒られた。

場面は変わって弟、朝食製作中。
今日のメニューはご飯に味噌汁、玉子焼き、漬物。…伝統的な日本の朝食だ。

「今面白味ねぇ…とか思っただろ！！」
そんなことはありませんよ弟くん。なんたってあの姉に食事を作らされ続けて今では完璧な家庭の味。味の保証はできる。
「まぁな…」
これならいつでも嫁にいける。
「うるせぇ！！いつも一言多いんだ！！」
「ご飯できた？」
身支度を整えて姉参上。
弟が用意した朝食を囲んで手を合わせる。囲むほど人いないって？まぁ気にしない。
「天の声は一体誰と話してるんだ！！」
「うーん…。宇宙人？」
「…真面目に答えなくていいから…」
大して気にした風もなく姉が味噌汁に手をつけた。そして玉子焼きにも手をつける。
「しゅーちゃんやっぱり美味しいわ。いつでもお嫁にいける！！」
姉が親指を立てて笑った。
「天の声と同じこと言うな！！」
「そんなこと知らないよ～。ねぇ？」
その通りです。
「…この天の声やけに姉貴には従順だな」
「天の声すら従える人。そう、それは私！！」
女王様と呼びなさいとでも言うのか？
「お姉様とお呼び！！」
お姉様かよ！！
「…お姉様…」
従うのか弟！！
「もう８時だけど会社行かなくていいのか？お姉様」
「嘘！？マジ！？遅刻だよ！！もっと早く言え！！」
カバンをつかんで姉が走る。玄関のドアを開けながら一言。

「しゅーちゃんのあほ！！」
「だからしゅーちゃんて誰！？」
誰だろうね。
こうして今日も一日がすぎていく。
「すぎるのかよ！！」
すぎるったらすぎる。

第1話　毎朝の出来事なんです（後書き）

えぇ。コメディですね。ある意味天の声すら登場人物。天の声は多分作者自身です。

第2話　食べ物は大切にね

今日も今日とていつものように弟は夕飯の準備をしていた。別に姉のためを思ってやっているわけではない。やらないとお姉様に脅されるからである。

「天の声…本当に一言多い。しかもなんだその説明。俺はいつからシンデレラになったんだ」

姉という人物の弟に生まれてから。

「…言い返せない…」

ちなみにコトコト何か煮込んでいるようだが、本日のメニューは？

「豚バラ肉の塊、甘辛煮とほうれん草と薫製豚肉のバター炒め」

小難しく言っているが要は豚の角煮とほうれん草とベーコンのバター炒め。豚肉だらけだ。

「いいんだよ！！安かったから！！」

弟対ナレーションの奇妙な会話が続く中、会社帰りの姉が帰宅した。

「天の声がそんなこと言ってる時点で会話途切れてるよ！！」

「ただいま～」

姉が帰ってきたのは事実ですよ弟くん。

「何してんの？」

「何って夕飯」

弟が料理をテーブルに運ぶ。会話する余裕があると思ったらもう準備終わってたのか。

「当たり前だろ。天の声のせいで夕飯駄目にしたら意味ないじゃないか」

……。

「なんだその間は！！駄目にしろって言ってんのか！！」

「何もないところに向かって吠えないでよ。天の声にそんなにツッコミ入れてどうするの」

その通りですお姉様。
「だからなんで姉貴には従順なんだよ！！」
気のせいである。
「……」
弟が中空をジッと睨んでいる。そんなところに私はいない。
「どこにいるんだよ！！」
弟には見えないところに。
「はいはい。そんなこと言ってるとご飯冷めるよ。いただきます」
姉が箸を手に夕飯を食べ始めた。仕方なく弟も食べ始める。
「そういえばさ…」
「何？」
「俊介って男なのに私と同じぐらいしか食べないよね」
そういえばそうだ。姉と弟の食事量はほぼ同じ。日本食はひ弱な弟の趣味。
「だから一言…」
「俊介も天の声もうるさい」
いっぺんにザクッと斬られた。
「で、なんでそんなに食べないのよ。お姉ちゃんに話してみなさい」
「姉貴に話すことないから」
まず自分でお姉ちゃんて言ったことをつっこむべきじゃないか弟。
「そんなものは知らん」
「しゅーちゃん…こっちで会話なりたたせて」
「いや、しゅーちゃんじゃないから」
姉は弟に言いたいことがあるらしい。
「なんだよ」
「あのね、駅でチラシ配っててもらってきたんだ」
B5版の紙をテーブルに置く。
「町内大食い大会…我こそは大食い自慢だという人集え…。何だこれ」
「問題はその後よ！！」

「え～…制限時間内により多く食べた人が優勝。優勝賞金１０万円…１０万円！？」
町内なのに大きく出たな。
「どう！？参加してみない！？」
「俺！？今食が細いとか言ってたのに俺が出るのか！？…どうせ賞金全部持ってく気だろ…」
「そんなことないって。賞金は全部俊介の物。ただ…今までの生活費に半分欲しいなぁ」
「結局半分取るんじゃねぇか！！」
「そりゃ、大学生一人やしなってるんだからねぇ」
食費はしっかりとるものですか。
「姉貴の考えてることは大体分かった…。でも俺じゃ優勝できないから。ぼったくられるだけだから」
「ぼったくる？」
弟が紙のある部分を指差した。そこには…「但し参加費１０００円」の文字。
「やめようか…」
「やめておけ」
弟では本当にぼったくられるだけとふんだ姉はあっさり参加させるのを諦めるのだった。
数日後に行われる町内大食い大会は参加者０人で中止になった。参加者０人なら弟が出ればよかったのではないか。
「なんでだよ。誰と競争するんだよ」
一人で大食い。一人で優勝。見物客も姉一人。
「寂しすぎ！！」

第2話　食べ物は大切にね（後書き）

ナレーションであるはずの天の声がナレーションとして働いていない。そんな気がする。

第3話　バイトしようよ

「姉貴、今日友達と飲みに行ってくるから帰り遅くなる」
一応言っておくが弟は今年で二十歳。残念なことに普通に酒が飲める。
「残念てなんだ！！」
「はいはい。で、飲みに行ってくるのは別にいいけど、夕飯は？」
「外で食べてくるよ」
「そうじゃなくて私の分は！？」
「自分で作れよ！！」
弟に同意。
「ちょっと待て天の声、ちゃんとナレーションやれよ！！」
ナレーションにツッコミを入れるから段々ナレーションじゃなくなっているのである。しっかりしていろ弟。
「お前に言われたくねぇ！！」
「で、夕飯は？」
「たまには自分で作れ！！」
「生活費誰が出してると思ってんのよ」
「…姉貴…。でもさすがに今日は無理だから！！」
「え～。誰がこづかいやってんのよ～」
「あ、姉貴です…。でも金についてはこれで解決できる！！」
バンッと弟がテーブルに置いたのは街でよく配っているアルバイト情報誌である。
「俺アルバイトしようと思うんだ！！」
「アルバイトだけで食っていけると思ってんの？」
恐怖を誘う姉の微笑み。
「うっ……」
「ここの高い家賃半分払えるの？」
姉弟（きょうだい）が住んでいるのは駅に近く、セキュリティもばっちりなマン

ションの五階。姉の仕事は給料がいいらしい。
「は、払えるさ…！！」
「払ったとしても最高時給１０００円のバイトじゃそれで精一杯ね。生活費は出せないよ」
姉が立ち上がって腰に手をあて、残りの手で弟を指差した。
「世の中なめんじゃない！！」
「すいませんでした…」
お姉様、つ、強すぎる…！！
「でもバイトはいいだろ！！少しは家計の助けになる」
「残念ながら家計は火の車ではありません。よってバイトは必要ない！！」
家計って姉弟間でも言うものだろうか？むしろ母と息子の構図に見えてきたのである。
「親子じゃねぇよ！！」
「そんなこと言われなくても分かってるって俊介」
ところでなんで姉はそんなにバイトに反対するんだ？
「そうだよな！！で、理由は！？」
「うーん…」
さっきとはうって変わって考える人のポーズになる姉。
「バイトの後、夜遅くなると物騒だし？」
「それは二十歳の男に言うことじゃねぇ！！」
「変な店長に当たると危ないし？」
「何がだ！！そんなに変な店長ならすぐにやめればいいだろ！！」
「うーん…。給料のいい仕事ほど大変だし？」
「それは当たり前だ！！」
「だってしゅーちゃん重労働向かなそうだし…」
姉が弟の腕をつかんで触る。筋肉があまりついていない弟の腕は細い方だ。…それよりもこれ、弟が姉にやるとうるさいんだろうなぁ…。
「だろうな…って天の声に返事してる場合じゃない！！人が気にし

てること言うな！！それと重労働じゃないの選べばいいだろ！！」
弟、しゅーちゃんのところツッコミ入れるの忘れてる。
「しまった…！！」
まだまだだな弟は。
弟が凄い形相で中空を睨んでいる。だからそこにはいないって。
「…で、他にも理由あんの…？」
「……帰ってきた時、しゅーちゃんがいないと寂しいなぁ」
姉、わざとっぽさが全面に現れたぶりっ子演じられても反応に困ります。
「しゅーちゃんじゃねぇ！！それぐらいで寂しいとか姉貴が言うんじゃねぇ！！」
「誰なら言っていいの？」
おーっと！！思わぬ反撃に弟タジタジだ！！
「なんでここだけ実況中継になってんだ！！」
ナレーションにツッコミを入れることで弟、答えることを避けたぞ！！汚い！！弟、実は汚い！！
「…天の声…少し黙ってなさい」
…はい。
「と、とりあえず姉貴は寂しいと死ぬ人種じゃないから問題ない」
「え～」
「…姉貴…俺で遊んでないか…？」
「バレた？」
「バレるわ！！ここまであからさまだと逆にわかりやすい！！」
「でも…一応バイトやって欲しくない理由はあるんだよ？それ言ったら怒りそうだから…」
「とりあえず言ってみろ」
「…俊介にご飯作ってもらわないと困るから」
うわぁ…さっぱり…。
「俺は家政婦じゃねぇ！！」

しかし弟がバイトをすることはなかった。なぜなら姉に説得されたから。え？実は弟シスコンじゃないかって？いや違います。多分。

第４話　美の定義って何！？

いつものように姉が「お腹すいたー」と言いながら帰ってきた。すぐに夕飯がでてくる。姉が帰ってくる時間を考えて夕飯を作ってくれているところは出来た弟である。

「……」

あれ？いつもならすぐにツッコミを入れるのに今日はどうしたんだ弟よ。

「…お前の弟じゃねぇよ…」

覇気がない！！

「しゅーちゃんどうしたの！？悩みがあるならお姉ちゃんに話してごらん」

「俊介な…」

姉に悩みを話しても解決しなさそうだ。なぜなら原因は姉である。

「なんで知ってるんだ！！」

ナレーションなので。

「原因私ってどういうこと！？」

「知らなくていいよ姉貴は！！」

ではその時のことを振り返ってみよう。

「お前が仕切るな！！」

弟が大学の学食でいつものように唐揚げ定食を食べていた時のこと。

「ここいいか？」

「ん？あぁ」

同じ学部の塚田がきつねうどんをトレーに乗せて立っていた。眼鏡に髪はキッパリ七三分け、将来（今？）オタクになる確立大だ。弟とはまぁそれなりに仲がいい。

弟の向かいに座ると、うどんをすすりながら話しかけてきた。

「なぁ」
「食うかしゃべるかどっちかにしろ」
塚田は大人しく箸を置いてからまた口を開いた。
「お前姉ちゃんいるよな？」
「姉貴？いるけどそれがどうした？」
「駅前でお前の姉ちゃんちゃん見かけてよぉ」
会社に行くのに電車を使うからいるだろう。
「で？」
「お前の姉ちゃん美人だよな」

「ここで止めるのか？」
回想は終了です。
「……俊介は一体何を悩んでたのかな？」
「はたして姉貴は美人の定義に入るのか」
かなりどうでもいい悩みだ。
「…迷ったなら入れておきなさい」
遠回しに自分で美人だって言ってる！？
「そこはとりあえず謙虚にしておくべきだから姉貴」
とりあえずとか付けるところが弟らしいところである。
「それは置いておいて、塚本？くんはなんで突然そんなこと言い出したの。見知らぬ大学生に話しかけられたことはないよ」
正しくは塚田である。
「なんで突然そんなこと言い出したのかは明日聞いてくる」
そう答えるのが無難だな。実は回想の後に姉が美人という考えを物凄い否定していた弟くん。
「おま…！！姉貴に聞かれたらどうするんだ！！」
弟がヒソヒソと訴えた。
ちなみに姉に聞かれる心配はない。姉はご飯に夢中でこちらの言うことなど聞いていない。
「なんで天の声が知ってんだ！！」

何故？それはもちろんナレーションだからである。

そして次の日。

いつものように夕方を過ぎた頃、姉帰宅。しかし部屋の電気は消え、人の動く気配が全くしない。ゆっくりとリビングに入って行くと、ソファの上に弟が微動だにせず倒れていた。

「ちょっ…しゅ、俊介！？どうしたの！？」

こういう時は、姉は弟の名前を間違えない。間違えていたら雰囲気ぶち壊しだ。それもそれで面白いが。

弟がゆっくりと首だけを動かして姉を見るとやっとしゃべった。

「…名前間違えられても面白くねぇよ…」

さすがツッコミ！！いつ何時でもその心は忘れちゃいけない！！

「…お願いだから天の声、こういう時ぐらいまともにナレーションやって」

了解しましたお姉様！！

姉はキッチンに入るとコップに水を入れて持ってきた。こういう時は本当に姉らしい。

弟をちゃんと座らせるとコップを渡し、隣に座った。

「俊介、どうしたの？なんで夕飯の準備してないの？」

こんな時でもまず心配するのは夕飯！？

「悪いけど…無理。作る気力が出ない」

弟は本当に末期だな。熱は出てないので大丈夫だろうが。

「きっちりしたことが好きなしゅーちゃんがおかしい！！」

「…俊介だ…」

「いつものツッコミの切れは一体どこに！？何が原因なの！？」

「原因は…」

弟がちらっと姉を見てまた顔をふせる。

「答えようよ！！」

「……」

ではその原因となった出来事を振り返ってみよう。

講義が終わった後、弟は塚田を捕まえることに成功した。
「塚田…昨日のことなんだけど…」
「昨日？あぁ、学食の時か」
弟が激しく首を振る。
「姉貴が美人てどうしてそう言い出したのかと思って」
何故か塚田が怪訝そうな顔をする。
「なんにも言わなかったか？」
「何が！？」
「姉ちゃん美人だなの後に」
「何も言ってない！！」
塚田が不気味な笑い方をした。嫌な予感がする。
「文化祭がもうすぐあるのは知ってるよな？」
「それは知ってる」
「じゃあこの大学の文化祭の目玉は何だか分かるか？」
「プロのミュージシャンによる野外ライブ」
「違う」
「…学生有志のお笑い」
「残念！！」
「……女装美人コンテスト…」
「正解！！」
塚田の笑顔で嫌な予感がさらに強まった。
女装美人コンテストとはその名のとおり男が女装して美しさを競う文化祭恒例のイベントだ。しかし共学でそういうのがあるのはかなり珍しい。
「ここから最初の話につながるわけだ。お前にそっくりな姉ちゃんが美人だったんだから、お前が女装して美人じゃないはずがない！！」
「はぁ！？」
弟の嫌な予感は見事的中した。

「というわけでもうエントリー済みだから」
「ちょっと待て！！なんで許可なくエントリーしてんだ！！取り消せ！！」
「コンテストには推薦という手があるんだよ。そして一度エントリーしたら例え入院していてもコンテストにでなければいけない。残念だったな！！」
塚田がさわやかに言いきった。それにしても入院していても出なきゃいけないってどれだけ過酷なんだ！？

帰ってきてから弟がぶっ倒れているのはこういうわけなのである。
「しゅーちゃん…」
姉が弟の肩を叩いた。
「ファイト」
「何を頑張れと！？」
「じゃあ…ご愁傷様です」
「もういい…」
弟が顔をふせてしまった。
「でも…弟が女装コンテストに出るなんて滅多にないことだよね。当日は何があっても行くから！！」
「来るな！！」
弟が立ち上がり、自分の部屋のドアに手をかける。
「夕飯どうするの？」
「勝手に食え！！」
そう言うと音を立ててドアを閉めてしまった。
「…出前でも取ろう」
姉はこんな時でも自分で作ろうとはしないのだった。

第４話　美の定義って何！？（後書き）

女装美人コンテストの回はもうしばらくしてからになります。

第5話　危険な買い物へ行こう

「今日暇？」
出し抜けに姉が聞いている。
「暇…と言えば暇」
きっと弟は姉が何か頼むと忙しいと言うのだ。絶対に。
「うるせぇ！！なんでそこで毎回一言言うんだ！！」
ナレーションはナレーションでも一つのキャラとして成り立っているので。
「天の声なら天の声らしくしてろ！！」
それだと面白さが半減するのだよ弟くん。
「……！！」
まだ文句を言いたそうだが、ここは流さないと話が進まない。
で、姉、続きは？
「会社も休みだから買物行こうよ、しゅーちゃん」
「しゅーちゃんじゃない！！」
いい加減そこは受け流すべきではないか弟よ。
「いつ俺が天の声の弟になった！？」
何を言う。ある意味私も家族の一員である。
「見えない家族なんかいるか！！」
本当に話を進めてくれないとナレーションとして困るのである。
「ね？買物行こう？しゅーちゃんと一緒に行くことほとんどなくなっちゃったからさぁ」
そうそう。弟は軽い反抗期。
「反抗期じゃねぇよ！！そろそろ自分で進行止めてることに気づけ天の声！！」
いちいちツッコミを入れるから進行が止まるということに気づけ。
「はいはい。そこらへんで止めてくれないとこの買物の回、次まで引っ張ることになるよ」

「買物なんて行かねぇよ」
「あらそう？」
姉が目を細めた。
「ここの家賃と生活費…」
「はい！すいません！！行きますよ！！行きますから！！」
弟の立場はとことん弱い。
「分かったならお姉様とお呼び」
弟が物凄く何か言いたそうだが、姉がどうかした？と聞くと口を開い重々しく言った。
「…わかりました、お姉様…」
さすがの私も弟が可哀想に思えてきた。

そして現在、半ば引きずるようにして姉が弟とともにデパートにいた。ちなみに弟は姉に髪をいじられ、いつもと違う雰囲気の服を着（させられ）ている。…姉の権力万歳…。
「一度やってみたかったんだよね。弟を彼氏と偽るの」
「なんでだよ！！」
そもそも似てるから偽れないってことを誰か教えてあげて。
「あのお店可愛い！！見てこうよしゅーちゃん！！」
「俊介だ！！」
こんな風に姉の勝手気ままな買物に付き合ってる間、弟はこう唱え続けた。
「知り合いに会いませんように…。知り合いに会いませんように…。知り合いに会いませんように…」
そんなことを言っている時に限って偶然知り合いに会ってしまうものである。
「あれ？お前…」
弟は思わず頭を抱えた。よりによって目の前にいるのは…。
「塚田…」
弟と同じ大学で同じ学部の七三眼鏡、塚田だった。

「やっぱりお前か！！最初気付かなかったよ！！どうした！？イメチェンか！？」
イメチェンだけならよかったのに…と弟は思ったに違いない。
「勝手に人の思考を読むな！！」
「何が？一体何に言ってるんだよお前は」
ツッコミがくる前に言っておくが、私の声は脇役には聞こえない。
「マジで…」
「お前、俺の質問に答える気ないだろ」
塚田が不満げに言ったところにタイミング悪く姉が現れてしまった。
「しゅーちゃん、これい…。……誰？」
「…姉貴…」
「お姉さん！？」
塚田が一歩前に出て敬礼。…敬礼って塚田は一体何者？
「はじめましてお姉さん！！お…私は俊介君と同じ学部の塚田です！！前に駅で一目見た時からお知り合いになりたいと」
「塚地君…だっけ？弟がいつもお世話になってます」
見事だ姉。暴走しかけた塚田を途中で遮って、なおかつ名前を間違えるとは！！実はわざとですか！？
「お姉さん、塚田です。今後とも長い付き合い…」
「塚田、誰か待ってるんだろ？俺たちに遠慮せずに早く行けよ」
弟が塚田の口をふさいで黒く笑った。黒く。そしてそのまま塚田を引っ張って行く。面白そうだから追いかけよう。
「塚田、俺が何を言いたいか分かるか？」
「なんだよ…しゅーちゃん♪」
「忘れろ！！それは幻聴だ！！」
必死だな弟。
「忘れてもいいけど…お姉さんのメアド…」
「それは無理だ！！殺される！！姉貴関係じゃないのならなんでも聞くから言いふらすな！！」

あ～あ…。
「言ったな？なら、女装美人コンテストの用紙にサインを！！」
ズボンのポケットから紙を取り出す。なんて用意周到なんだ…。
「…これはなんだよ」
「コンテスト参加者の応募用紙。実は推薦だけだと駄目だったんだよねぇ」
塚田が笑った。脇役なのになんて黒いんだ。
「サイン、くれるよね。しゅーちゃん♪」
「……」
結局その場で弟はサインさせられたのだった。自分で女装美人コンテスト出場を決めてしまったのである。
次回に続く。
「結局！？」
続くのである。

第5話　危険な買い物へ行こう（後書き）

出すつもりではなかった塚田を出したために長くなり過ぎた…。
姉の言うとおりになってしまったよ…。

第6話　続・危険な買物へ行こう

「これどう？」
前回に続き姉弟でデパートに来ている。デパートというよりショッピングモールだが。
「いいんじゃん」
「こっちとどっちがいいと思う？」
「好きにしなよ」
「つれないなぁ」
姉がピンクと赤の服を手にふくれている。
姉の買物に付き合わされた弟はやはり荷物持ちなのであった。前回のこともありテンションも少し低め。面白味も低めだ。
「面白味はなくていいから！！」
ツッコミ入れる元気があるなら姉にちゃんと付き合ってやれよ弟。
「だったら天の声が付き合えよ！！」
天の声はナレーションなので荷物は持てないのである。
「ああ言えばこう言う…。その口閉じられないのか！？」
ナレーションが一切なくなっていいのならば。
「…それは困る」
分かればよし。
「なんで高飛車！？」
この物語りは私の手にかかっていると言っても過言ではない。
「そうですか…」
「よし！これに決めた！」
「まだ買うの！？」
買物は姉のストレス解消法だから。
「ストレスなんて無縁そうな姉貴の！？」
「やだなぁ、しゅーちゃん。会社に行ってればストレスも溜まるよ」
むしろ上司すら影で操っていそうだが。

「操るのか！？」
「操らないって」
笑顔で否定されると本気か嘘かわからないんですがお姉様。
「それは天の声に同意」
「どういう意味よ」
「気にするな姉貴」
会話を一旦中断して姉が服を買ってきた。
二人が歩いていると姉がまた店の前で止まった。しかしそこは女物の店ではない。
「どうした姉貴。ここは男物だ。実は姉貴じゃなくて兄貴だったってオチはいらないからな」
…ちっ…。
「何舌打ちしてんだよ！！やろうとしてたのか！？やめてくれよ！！」
先にバレたネタは使いません。
「…本当に使おうとしてたのか！？姉貴も黙ってないでなんか言えよ！！」
「え～。別に私が着るのに見てたわけじゃなくて、しゅーちゃんに似合いそうだなぁと思って」
姉が珍しいこと言ってる！？たまに見せる優しさはいいが、弟の趣味ではないから。
「なんで俺の趣味を知ってんだ！！…何も言わなくていい。どうせナレーションだからとか返すんだろ」
分かってるじゃないか。
「お前の考えてることはお見通しだ！！」
「でもしゅーちゃん、たまにはこういう服もいいんじゃない？似合うって」
「いいよ。イメチェンしてどうするんだ」
「髪だって今日みたいに立てた方が似合うのにー。絶対モテるのにー」

「人が悩んでることにつっこむな」
「だったらこれ買おうよ！！」
弟は姉に無理矢理店に入らされ、姉が強制的にその服を買わせたのだった。結論、姉はどこまでも我が道を行く人である。

ここは食料品売り場。今日の夕飯のために弟が姉を連れてやってきた。
弟は魚とにらめっこしている。
「サンマにするかサバにするか…」
完全に主夫にしか見えない。もしくは家政婦。
「家政婦言うな天の声」
「ねぇ、これ！！これ！！」
無邪気な姉が何か指差している指差す先は…。
「カツオの目玉！？」
「しゅーちゃん！！これで新しい料理にチャレンジ！！」
「なんでこれ！？」
「魚の目玉にはコラーゲンがたっぷりなのよ！！ＤＨＣも入ってるよ！！」
どうして化粧品会社が入ってるんだ！！
「それを言うならＤＨＡ！！」
「大して変わらないじゃん。コラーゲンだよ！！コラーゲン！！」
姉のコラーゲンコールによって弟は渋々魚の目玉をかごに入れた。
さて、どういう料理に変身するのだろうか。
弟は散々悩んでサンマをかごに入れると会計を済ませ、二人は家に帰った。

夕食。
姉がウキウキしながら食卓を見る。白米、サンマの塩焼き、大根とニンジンの和え物、キュウリの漬物、豆腐の味噌汁。これは弟のメニュー。姉の方には焼いた魚の目玉がサンマの皿に乗せてある。

「これは…何！？」
「目玉だよ。姉貴リクエストの目玉」
「なんで私の方にだけ…」
「俺いらないから」
でも焼いただけですか弟くん。
「その通り。そうだ姉貴、自分で買えって言ったんだから責任持って全部食べろよ」
弟が笑った。姉が涙ぐみながらも果敢に挑戦していた。
実はこの話、一番黒いのは弟なのではないだろうか…。

第6話　続・危険な買物へ行こう（後書き）

二回に渡ってお送りしたこの買物、やっと終わりましたね。
ちなみに裏タイトルは「弟の逆襲」です。いつも犠牲になってるので。

第7話　台風上陸する、かも

金曜日の夕方である。
弟が一人、家でごろごろしている。それにしてもこの弟はいつ大学に行っているのだろうか。
「行ってるよ。夕方に授業がないだけでちゃんと行ってるから、ニートだと誤解されそうなこと言うのやめろ」
すでに夕方ですが、今日の夕飯は作らないのですか？
「今日は姉貴が早く帰って来れるから外食だ」
だそうだ。
「何！？俺はお前の代弁させられてたのか！？」
気のせいだ。
雑談をしていたところに呼び鈴が鳴り響いた。弟が出ていくのである。…ほら行け弟。
「なんで命令すんだよ！！」
文句を言いながらも弟は渋々出ていく。
「どちら様ですか？」
ドアを開ける前に一応確かめる。
「宅急便でーす」
覗き穴の死角になっているところにいるらしく、人の姿が見えないが大して気にもせず弟はドアを開けた。…何もいない。少しずつ視線を下にずらしていくと…いた。
「やっほー」
「やっほー…って、鈴（すず）！？なんでいんの！？」
いたのは宅急便ではなく、十歳ぐらいの少女だった。声で気づけよ。
「なんでお前につっこまれなきゃいけないんだ！！」
「この声何？」
どうもこんにちわ。ナレーションこと天の声です。ちなみに「天

の」が苗字で「声」が名前。
「天の声で一つの名前だったのか！？」
嘘である。
「嘘つくんじゃねぇよ！！」
それはいいけれど弟クン、鈴の説明しないと幼女と戯れる変な大学生だと思われるよ。
「天の声だろ！！自分でやれよ」
むしろ変な大学生の設定でいいと思う。
「俺がしないとその設定のままなんだな！？分かったよ！！これは妹の鈴！！見知らぬ幼女じゃねぇ！！」
そういえばどことなく姉に似ている。
「遅い！！」
「ねぇ、お兄ちゃん」
妹が弟の袖を引く。
「鈴じゃなくて、りんちゃんて呼んで♪」
どこかで聞いたフレーズだ。
「…姉貴に似てきたな…」
弟がため息をついた。ところで弟、妹出てきたけど兄じゃなく弟のままでいいですか？
「どうせ直す気ないだろう…」
分かってるじゃないか。
「お前はどうして俺に対してはあくまで高飛車！？」
気のせいである。
「二回目だから…」
それも気の…。
「分かった！！分かったから鈴とまともに会話させろ！！」
ご自由にどうぞ。
弟が深々とため息をついてから、妹を見た。
「鈴、一人で来たのか？」
「そうだよ。小学四年になったらこれぐらいはかる～く」

「軽くないから！！新幹線乗らないと来れない距離だから！！」
「え～。…じゃあお兄ちゃんに会いたいあまりに！！勢いのままに！！」
「鈴ならマジでやりそうなところが怖いから。母さんとかに言ってきたのか？というか、学校は？」
「学校終わってから速攻で来てみた。学校は創立記念日とかで火曜日までお休み。その間よろしくお兄ちゃん」
見ると妹の足元にドラムバッグが無造作に置かれていた。なんて用意のいい…。
「ちょっと待て！！親にちゃんと言ってきたか！？これで家出でしたとか、笑えないからな！！」
「大丈夫だって。ほらこれ」
ドラムバッグから紙を取り出す。妹が声に出して読みあげた。
「火曜日まで鈴、よろしくBY母」
「母さん！？なんてテキトーなんだ！！迷ったりしたらどうするんだよ！！」
「それも大丈夫。いざとなったら交番に行けばなんとかなるって。お兄ちゃんの名前と電話番号教えればちゃんと迎えに来てくれるって言ってたよ。お母さんが」
「何してんのあの人！？」
あの姉がどうやって育ったか手にとるように分かってしまったのだった。

姉が帰宅すると当たり前のように妹が座ってプリンを食べていた。
「え！？鈴！？ていうか私のプリン！！」
姉は食べ物命である。
「諦めろ姉貴」
「そうだよ。なくなったものは仕方ないって」
「なくなったって今まさにあんたの胃の中に消えてるの！！」
姉のプリンをペロリと食べて、妹は二人を交互に見た。

「あたしはどこで寝ればいいの？」
「あ…」
何も考えてなかったな弟。
「姉貴のところ占領しろ」
「え～」
「俺のところ来たら勝手に布団に入るんだろ」
「…朝起きた時に驚くお兄ちゃんを楽しみにしてたのに」
「姉貴のところでやれ。それならいくらやってもいい」
「ちょっと待って。あんた達私のこと嫌いなの！？」
「そんなことないって」
「考えすぎだ」
弟と妹の厳しさはツッコミ体質ゆえだ。嫌ってはいないと思う。
「慰めなのどっちなの！？」
自分で判断して頂きたい。
姉がオーバーリアクションで床に泣き崩れた。弟と妹は完全無視をきめこんでいる。
「今日はそこらへんのファミレスで済ますか」
「わーい♪」
弟と妹が出て行こうとすると姉がついて来て弟だけに聞こえるように言った。
「…俊介、今日は一晩中愚痴に付き合ってもらうわよ」
「……」
弟、今日は徹夜決定だ。
「マジ！？」

第7話　台風上陸する、かも（後書き）

台風上陸…しましたね。その名も妹。鈴という名前はりんちゃんて呼んで♪って言わせたいためだけに採用。

しばらくは妹編です。

第8話　普通なんてこの家にはない

土曜日の朝である。
ここは弟の部屋。弟はベッドの上で死んだように眠っていて、起きる気配がない。早朝5時まで姉の愚痴に付き合わされていたのだから無理もないが。
「そーっと…」
静かにドアを開けるのはいいが、自分で口に出していたらあまり意味がないのである。
そんなわけで、妹登場。一体何をするつもりなんだ？
「しー！！静かにして天ちゃん！！お兄ちゃん起きちゃったらどうするの！！」
ナレーションの声は寝ている時には聞こえない周波で出しています。それよりいつの間に私は天ちゃんになったんだ。
「天の声って長いから天ちゃんでいいじゃない」
直しそうにないから天ちゃんでいいが、妹の声が一番大きいのである。
「うーん…」
弟が動いた！！妹、視界に入らないところに素早く身を隠す！！弟、まぶたを開かない！！これは…まだ寝てるのか。
「…あ」
あ？
「……姉貴の馬鹿野郎…」
本当に寝てるのか！？なんて現実味を持った寝言を言うんだ弟くん！！いっそのことお姉ちゃん大好きとか言ったらそれはそれでウケるのに！！
妹が出てきた。弟の横に立つとしばらく考えてから、ドアの近くまで後退する。
「とう！！」

助走をつけて弟の上に飛び乗った！！
「ぐほっ！！なんだ！？」
弟が起きた。妹はこれがしたかったのか。
「重い！！出る！！内蔵出るからそこをどけ！！」
「え～」
妹、その辺でやめないと放送できなくなる。
「は～い」
「…なんで天の声の言うことは聞くんだ」
私が猛獣使いだからである。
「猛獣じゃないよ。可愛い小動物だよ」
動物の部分は認めるのか。
「どけ…。マジで中身出てくるから」
「は～い」
妹がやっとどいた。弟が頭を押さえて起き上がる。二日酔いですか？
「そのとおり。あの姉貴人間じゃねぇ…。ざるだ、ざる」
そんなに凄い呑みっぷりだったのか。
「一般人ならアル中で倒れるぐらい」
……。
「で、鈴はなんで俺の部屋に来て、寝てる俺の背中に大ジャンプしてんの？」
「心地よく起こしてあげようと思って」
「心地よくねぇよ！！なんで大ジャンプ！？普通の起こし方しろよ！！」
「普通って何？」
妹、よくぞ気がついた。普通って何？普通って言う人に限って変なのが多い…。
「うるせぇ！！何語り出してんだ！！普通っていうのはなぁ」
弟が立ち上がった。妹を抱えて今まで自分が寝ていたベッドに寝かせると、弟は枕元に立った。

「おい、鈴、起きろ」
妹を使って実演するのか。
「え～、もう朝なの？」
ノリいいな妹。
「もう起きないと遅刻するぞ」
「あともう少し…」
妹がこう言ったところで弟が揺さぶった。
「起きろ。遅刻する気か」
「いいよ。遅刻したらお兄ちゃんがひき止めるから家出るのが遅れたって言うもん」
「やめろ！！教師からいらん誤解を受けそうなことを言うのは！！」
「言った時の先生の反応が面白いのに」
「おま…マジでやってるんじゃないだろうなぁ？」
「えへ♪」
「何てことしてくれんだ！！」
で、普通って何？途中から演技忘れてただろお二人さん。
「…気のせいだ。それよりもこれだけ騒いでたら来そうな姉貴が来ないな」
「もう会社行ったよ」
道理で静かだと思った。
「…姉貴今日会社だっけ？」
「急遽会議が入ったとか言って7時頃」
「…今何時？」
「9時すぎ」
「ヤベ！！講義遅刻する！！」
二日酔いの酒臭い状態で行くつもりか弟。
「…行かなくてもいいか」
「え！？じゃあ今日はあたしに付き合ってくれるの！？」
妹が服の端をしっかり握って、目をキラキラさせて弟を見上げる。
弟の顔が渋くなってきた。

「…ちなみにどこに付き合わせる気だ？」
「竹下通り！！」
妹の嬉しそうな顔で悟ってしまった。これは絶対に弟に買わせる気だ。
「うんよし！！」
「行ってくれるの！？」
「講義に出よう！！」
弟は金がないんだな。
「俺は一言もそんなこと言ってないからな！！さぁ着替えから出ていけ！！」
「…図星？」
妹は部屋から放り出されたのだった。

第8話　普通なんてこの家にはない（後書き）

姉が出てきませんね。ざるな姉が。多分次は出てくるのでは？

第9話　暴風域はいります

土曜日の夕方。
二日酔いの弟が帰ってきて、部屋のドアを開けるとベッドの上に妹が寝転がっていた。念のため言っておくが転がりこんでいる姉の部屋ではなく弟の部屋だ。
「なんでお前はそこにいるんだ」
「うーん…そこにベッドがあったから？」
さすがあのお姉様の妹。将来が危ぶまれる。
「そんなことないよ、天ちゃん。あたしはあんなに堕落してないもん」
堕落とか言いましたよ。どうですか弟クン。
「仮にも、一応姉貴なんだからそんなこと言うなよ」
「…シスコン？」
おっと！！妹の思わぬ攻撃に弟、ムスッとした！！これはちょっと怒ってるぞ！！
「シスコンじゃねぇよ！！怒ってねぇよ！！あと、天の声！！実況かお前は！！面白がってる時だけ実況になってるぞ！！」
気のせいである。
「この連載始まってから気のせいって何回言ってんだ！！」
この前3回ほど言ってその前は…。
「数えろって言ってねぇ！！」
「大変だね。多方面にツッコミ入れなきゃいけなくて」
「…鈴、誰のせいだと思ってんだ…」
「あたし」
分かってやっているということが判明したのである。
「あとお姉ちゃん」
よく分かってるな妹。
「…その中に天の声も含めておけ」

「天ちゃんはツッコミとボケを両立してるからダメ」
「なんで！？両立するのはいけないのか！？」
「お兄ちゃんがいないところでは天ちゃんがツッコミだから」
「…本当に、似てきたな…」
誰にとは言わないところがポイントである。
「ただいまー」
噂のお姉様が帰宅しましたよ弟クン。お出迎えしてこいよ。
「なんで命令！？」
「しゅーちゃん、ただいま」
姉がドアを開けて、ベッドの上の妹を見た。
「そうだった。鈴もいたんだっけ」
「忘れてたな」
「酷いよお姉ちゃん！！お姉ちゃんに会うためにわざわざ新幹線に乗ってきたのに！！」
「さっきと態度違うだろ！！」
さすが妹。
「何がさすがだ！！鈴まで姉貴化したら家が壊れるだろうが！！」
いっそのこと姉化してしまえ。
「天ちゃん、お姉ちゃん化はしないよ。だって…お姉ちゃんの上を行くから」
お姉様越え宣言が出ました。
「鈴、私を越したら人生苦労するわよ」
「大丈夫。堕落せずに人を操って見せるから」
凄い発言が出たな…。
「怖っ！！」
「行きつく先はどの辺の予定なの！？」
「…お姉ちゃんを越すから、お母さん！！」
「やめろ鈴！！あんなんになったら家が壊れるとかのレベルじゃなくて、人間じゃなくなるから！！」
それは凄いな。ところでそんな凄い母はまだ出てきてないが、ど

んな人なのか教えてくれないか三兄弟。
「お母さんはゴーイングマイウェイ」
その辺は確実に姉が継いでるな。
「うーん…唯我独尊？」
…まぁ姉の上をいくならば…。
「魔王」
はい？なんて言った弟。
「あれは魔王だ！！人間じゃねぇ！！」
自分の母親だろうよ。
とりあえず、色々凄い人なんだということは分かったのであった。
「しゅーちゃん、夕飯」
弟＝夕飯か？
「はいはい。で、リクエストは？」
そういうところは従順な弟である。
「そういうところはって何！？いつもはなんなんだ！！」
…ツッコミ？
「他に言うことないのか天の声！！」
「夕飯はいつもお兄ちゃんが作ってるの？」
妹の素直な質問だ。
「そう」
「お姉ちゃんは？」
「姉貴に作らせちゃいけない！！キッチンが戦場になる！！」
「ちょっと…そこまで酷くないって」
「あれの後片付け誰がやってると思ってるんだ！！」
珍しく弟が攻撃に転じている。
「…今日はポトフがいい」
姉が話をそらしたぞ。
「和食のリクエストしか受け付けません」
厳しいな弟よ。
「いつお前の弟になった！！」

昔から。
「ああ言えばこう言いやがって…」
「お兄ちゃん」
「…なんだ鈴」
「衣がカリカリな海老の天ぷらが食べたい」
「分かった。今から買い物行くけどついてくるか？」
「うん。お手伝いするね」
「鈴はいい子だな」
妹がはにかんだ。
弟が先に出て行ったのを確認してから妹が姉の方を振り返った。
「料理もできないの？」
「少しは出来るって」
「でもお兄ちゃん任せなんでしょ？」
「う…」
妹が冷たく笑って一言。
「駄目人間」
弟を追いかけて出て行った。
姉は突っ伏したまま動かない。多分弟は今日も姉の愚痴に付き合わされることだろう。二日連続徹夜が決定した。

第9話　暴風域はいります（後書き）

妹が着実に最強キャラと化していきます。ツッコミを発展させて切り捨てにしたらこんなことに。

とりあえず妹がいると姉があんまりボケないんですよね。次はその辺をどうにか。

第１０話　第０回談笑会

「どうもこんにちわ。最近出番と存在感が減った気がする姉です」
「それは俺のせいじゃねぇ。弟です」
そして裏の支配者、天の声こと作者です。
「え～。これは読者を巻き込んで質問や、様々なチャレンジをしていくコーナー、略して談笑会です」
「略じゃねぇよ！！」
簡単に言えば、読者の皆様からいただいた疑問質問をまとめて片付けてしまおうというお手軽コーナーです。
「チャレンジは一体どこに消えたんだ！！それにしても天の声にしては丁寧だな」
このコーナーの時は天の声ではなく作者なのでいつもよりボケとツッコミは少なめなんですね。
「ところで、疑問質問がきてないけどどうするの？」
「それより、第０回って始まってなくないか？」
姉弟そろっていい質問するな。疑問質問は…面倒だから姉、これ読んで。
「ぞんざいになってきてねぇ！？」
「はいはい。疑問質問はまだ届いていません。第０回っていうのはこれからそういうコーナーを立ち上げるという予告です。だって」
「なんで今予告するんだ」
それはですねぇ弟くん。これが実は「お姉様と弟クン」の第１０話に当たるんですよ。
「要は記念に何かしたかったんだな」
そうですそうです。
「じゃあコーナーの流れの説明になります」
「姉貴が進行役！？普通天の…じゃなくて、作者がやるんじゃねぇの！？」

一応作者なんで主役より目立っちゃまずいでしょ？
「充分目立ってるから！！」
「俊介、話進めるからね。まずメインの質問は具体例を上げてみましょう」
ペンネーム「お姉様みたいな姉が欲しい」さんから、「弟はハタチだと書いてありましたが姉っていくつですか？」という質問です。
「そういえば書いてなかった…っけ？今年で２４歳だよ。年相応に見えるかは知らないけど」
「見た目は年相応だけど、問題は性格だ。…それよりも一つツッコミ入れていいか？」
「どうぞ」
「お姉様みたいな姉が欲しいさんって何！？むしろやる！！菓子折付きで送ってやる！！」
このように妙なペンネームにすると弟がもれなくツッコミを入れます。
「いつ特典になったんだ！？いらねぇよ！！」
弟、談笑会の時ぐらいはツッコミ少なめにしてくれないと作者が困るんです。
「つまりお前が困るんだな。よし、分かった。先行け、先」
「質問コーナーはこんな感じで毎回進んでいきます。その他募集事項は、姉弟に挑戦して欲しいことなど。例えば…サーカスでよく見る空中ブランコ…？」
「無茶言うな！！コメディだけど、どっかの小説と違って死んだらそれっきりなんだよこれは！！」
「後は弟に本編で挑戦してほしい和食。ご当地名物料理もあり」
「明らかにネタ切れ対策だな」
「和食以外は冒頭に談笑会宛とでも書いてくれると助かりますって」
本当にその方が助かります。
「で、他何も書いてないんだけど」
「ここで終わり！？いつもより短すぎねぇ！？」

ここからは本編よりのお話を。
「どんな？」
例えば、前回弟くんが一切姉のしゅーちゃん発言にツッコミを入れなかったことについて。
「…！！あれは…ほかにツッコミを入れるところが多すぎただけで…」
ツッコミ担当なのに本職を忘れちゃ駄目だろ。
「いや、むしろツッコミしか入れてないぐらいの勢いだぞ」
まぁ次回から気をつけて。
「何を偉そうに…。というかお前も、いや天の声もナレーションとしての本職忘れてるぞ」
忘れてません。ナレーション挟む隙間がなかっただけで。
「無理にでも入れろよ。ナレーションなんだろ。物語の描写するのはお前しかいないだろうが」
へいへい。それは失礼いたしました。以後気をつけさせていただきます。はい。
「何だその言い方は！！何だその態度は！！今すぐ謝れ！！読者の皆様に！！」
え、あ、え～…さっきの発言は皆様を馬鹿にしたとかそういうことではなく弟をからかったと言いますか……すいませんでした。
「よし。…て、よくねぇ！！俺をからかったってなんだよ！！」
弟はノリツッコミを覚えた。
「なんだそのどっかのゲームのナレーションみたいなのは！！覚えたつもりはねぇよ！！」
「ねぇ、あんたら何か忘れてない？」
「…何を？」
思い当たりませんよ。
「私のこと、忘れてない？」
気温が一気に氷点下まで下がった。
「姉貴、ごめん」

すいません姉。
「お姉様とお呼び」
「本当にすいませんでしたお姉様！！」
弟が土下座している。私も身体があったら土下座したい。ごめんなさいお姉様。
「分かればよろしい。これで、第０回談笑会を終わります」
「え？終わ…」
弟が顔をあげようとした。
「俊介はしばらく、そのまま土下座してなさい！！」

第１０話　第０回談笑会（後書き）

今回は趣向を変えて談笑会です。質問や和食は本当に受け付けていますよ。チャレンジは…もう少し現実的なのが来たら。不可能なやつも話のネタにはなるんですけどね。

途中から作者が天の声に戻ってる気がした方、気のせいではありません。確実に天の声になってます。

第１１話　こういうことたまにあるよね

「ねぇ、どういうことか説明してくれない？しゅーちゃん、いいえ俊介」
「あたしにも教えてくれるよね俊介お兄ちゃん？」
姉と妹の怒りを弟は一身に受けていた。二人とも顔は笑っているが、目が恐ろしいほど笑っていない。
弟がこんな状況に陥っている理由は一時間前にさかのぼる。

「は？遊園地？」
弟の聖域、キッチンに妹が入ってきていた。時間は朝食前、弟は目玉焼きが綺麗に焼けて上機嫌な時だった。
「うん♪この近くに最近新しく遊園地出来たでしょ？今日日曜日だし行こうよ」
「姉貴に交渉してこいよ」
「もう交渉した」
弟が振り返るとキッチンの入口に姉が顔を出して笑っていた。
「よろしくしゅーちゃん」
「しゅーちゃんて誰だよ！！」
「お兄ちゃんは俊介だもんね。どこをどうしたらそうなるのか教えてほしいぐらいだよ」
徐々に妹の毒舌が進化していく。
「と、とにかくよろしく！！道わかんないから連れてってね！！」
逃げたな。
「なんで俺が連れてかなきゃいけないんだ。今朝飯作ってるからその間に姉貴が調べろよ」
「この家の家賃は誰が払ってるでしょうか？」
「…姉貴です」

このやりとり久しぶりに見た。
「久しぶりでもやりたくなかった俺は」
姉のお世話になってる限り無理な問題だ弟。
「頼りにしてるよしゅーちゃん」
「しゅーちゃんじゃねぇよ…」
「影から応援してるよお兄ちゃん」
「影から応援しなくていいから手伝ってくれ、鈴」
姉と妹が笑いながらキッチンから出て行った。手伝う気ないな、あれは。…ところで弟、なんか焦げ臭い。
「あー！！」
綺麗に焼けていた目玉焼きは綺麗に黒こげになりました。

そして三人が遊園地に着くと、遊園地に人影はなく、虚しく風が吹き荒れていた。台風が上陸したわけではない。
「本日…お休み！？」
弟がすっとんきょうな声を出した。入場口のところに貼ってある文字を読み上げたのだ。
それにしても、不幸なこともあるもんだ。
「なんてのんきな！！」
私は関係ないからだよ。
「どうして休みの日も調べてないのか説明してくれない？しゅーちゃん、いいえ俊介」
「あたしにも教えてほしいな俊介お兄ちゃん？」
こうして冒頭につながるのである。
「いえ…あの…」
「調べるなら休みの日も調べようよ。ね？」
「なんのためにわざわざここまで来たと思ってるのお兄ちゃん？」
「いや…」
「俊介」

「お兄ちゃん」
素直に謝っておけよ弟。
「…すいませんでした」
弟、平謝り。姉と妹はなんだか満足げだ。
「ここまで来て何もせずに帰るのは交通費がもったいないから、美味しい物食べて帰ろっか」
「賛成ー！！」
この話は本当に食べ物が絡む確率が高いな。
「どこ行く気だ？」
「近くにハンバーグの美味しい洋食屋さんがあるのよね」
「あぁ。あの高い老舗の。よく金あるな」
弟がそう言うと姉がニッコリと笑った。
「何言ってるの」
「そうだよ。何寝ぼけたこと言ってるのお兄ちゃん」
弟がまさかという顔をした。正にそのまさかである。
「俊介のおごりに決まってるでしょ」
「ねぇ」
運命とは定まっているものなのだよ弟くん。
「なんで俺が！？」
「休みの日調べなかったのは誰の責任？」
「…そんなに金ねぇよ！！」
「大丈夫。今は立て替えてあげる。今は」
あとになってからたっぷり利子をつけて返すことになりそうだ。
「本当に天の声は他人事だな！！」
当たり前である。
「私、ハンバーグ定食！！」
「じゃああたしはデミグラスハンバーグで！！」
「それもいいなぁ。あー、でも和風も捨てがたい！！」
わいわいとはしゃぐ女二人の後を、平べったい財布を抱えて弟がトボトボとついて行った。今月はもう金がないんだろうな。頑張れ

弟。
「どう頑張れっていうんだよ！！」
なせばなる。
「ならねぇよ！！金はほっといて湧いてくるもんじゃねぇんだよ！！」

第１１話　こういうことたまにあるよね（後書き）

姉と妹のコンビは最強でした。

第１２話　二度あることは三度ある

「なんだ…？」
コンビニから帰ってきた弟が絶句した。
家の中は十数分前とは一辺していた。靴箱から靴が飛び出し、たたんだ洗濯物の山は無惨に崩され、ありとあらゆる引出しは開けっぱなしの散らかり放題だった。弟が絶句するのも無理はない。
「泥棒でも入ったのか…？」
今日は姉と妹が家にいるからそれはないだろうよ。
「だよな…」
玄関に呆然と立っている弟に気がついて姉が顔を出した。
「しゅーちゃん、おかえり」
「しゅーちゃんじゃないけどただいま。で、なんでこんなに家の中が散らかってんだ？」
弟がリビングに入っていく。妹がソファに座ってテレビを見ていた。
「おかえり。家が散らかってる理由は言わずもがな」
「…姉貴だな」
「言わずもがなって何よ！！確かに私だけど！！」
やっぱり姉なんだ。
「一体お姉様は何をしやがってるんですかねぇ？」
弟はキレていた。笑顔だが、口調に怒りが現れている。
姉、夕食抜きにされる前に謝ったほうがいい。
「ごめんね。印鑑を探してて…」
「それで洗濯物の山を崩して、靴箱までめちゃくちゃに？」
「うん…。もしかしたらあるかなぁって」
「ねぇよ！！靴箱とかはありえねぇよ！！」
あったらすごいな。
「どこにあるか知らない？」

「姉貴のだろ？部屋じゃねぇの？」
「ないから探してるんじゃない」
そんなこと威張られても困りますよお姉様。
「はぁ…」
「ため息つくと幸せが逃げるよ」
弟がお前が言うかと言うように目を細めて姉を見た。
「…鈴、なんで手伝ってやらなかったんだ？そしたらもう少し部屋が綺麗だったかもしれないのに」
あ、無視した。
「だってここの住人じゃないのに印鑑の場所なんか知るわけないよ。それに、あたしが手伝ったら汚さ二倍になってるよ今頃」
さすが姉の妹。言うことが一味違う。
「…まともな人種をくれ」
毎度のことだが苦労してるね。
「とりあえず、この惨状どうにかするぞ。鈴は玄関。姉貴は洗濯物」
「はーい」
「え～」
この状態にした元凶が文句を言いますか。
「姉貴、手伝わないなら飯」
「ご飯抜きにしたらこの家から追い出すから」
姉が最後？の切札を使った。
「すいません…。けど、手伝ってくれ」
「はいはい」
こうして三人は掃除を始めた。
妹は靴箱に靴を入れ、あるいは突っ込み、弟は飛び出した物を拾い集めて引出しの中に。もちろん開いている引出しは全て閉めて。
姉は…多分洗濯物を畳み直している。多分。
「姉貴！！余計ぐちゃぐちゃだから！！」
「失敬な！！ちゃんと畳んでるのよ、これでも！！」
洗濯物は崩れていた時よりさらに、弟が畳んだ原型を保たない程

度にぐちゃぐちゃだった。例えるならば、脱ぎ捨てた状態そのまま。
もしかすると、姉は家事全般が不器用なのではないだろうか。
「もしかしなくても！！そうじゃないと俺が家事なんかやるか！？」
いや、家事が趣味でもおかしくないだろう。弟ならば。
「俺ならってなんだよ！！分かったから姉貴は洗濯物運ぶだけにしてくれ！！」
そう言うと弟は靴をしまい終わった妹を呼んで、洗濯物を畳ませた。…姉よりはましである。
満足したのか弟は自分の分担の方に戻って行った。
テキパキと掃除を終わらせた頃には夕飯の買い出しに行かなければいけない時間だった。
「もうそんな時間か！？」
そんなに無駄な嘘は言いませんて。
弟が冷蔵庫の中身を見にいく。買い物の前に見ておかないとたまにあるはずの物がなくなっているのだ。誰が犯人とは言わないが。
「キャベツ、ニンジン、こっちは…バターと牛乳と…なんだこれ」
卵が並んでいるところに小さくて長細い箱が入っていた。弟が恐る恐る箱を開ける。
「……姉貴！！」
弟が珍しく怒鳴った。今にも血管が切れそうだ。
「何？」
姉がキッチンに顔を出す。
「これはなんだ？」
「……」
「何？どうしたの？」
妹も顔を出したが、弟の怒りの形相にすぐに顔を引っ込めた。
「天ちゃん、一体何がおきたの？」
自分の目で確かめてきた方がいい。
妹は弟の八つ当たりが来ないように、静かに近づいて弟が持っている箱を覗いた。中身は白くて長細い姉の印鑑だった。

「なんで冷蔵庫…？」
「俺も是非聞きたいな。さぁ、説明していただきましょうか、お姉様」
「……それは…うん…あれだよね…」
姉がしどろもどろに言いわけをし出した。要約すると、通帳を冷蔵庫に隠す人もいるから印鑑もいいだろうと考えて冷蔵庫に入れたはいいが頻繁に使う物じゃなかったのですっかりどこにしまったか忘れていたらしい。
「普通忘れる？」
「印鑑を冷蔵庫に入れるな。入れたことを忘れるな。忘れて家中ぐちゃぐちゃにするな」
弟が淡々とツッコミを入れた。ここまでいくと説教だ。
「天の声は黙ってろ」
…はい。
弟が長々と説教をしていると電話が鳴り響いた。不機嫌丸出しの弟が舌打ちして受話器を取る。正座になっていた姉が安堵のため息をもらした。
「もしもし？」
電話でさえも不機嫌丸出しである。
「もしもし？俊介か？」
「父さんか。何か用？」
「鈴、まだそっちにいるか？」
怪訝そうに弟が妹の方を見る。妹はテレビの前に座っている。
「いるけど？どうかした？」
「…鈴がそっち行った時、いつまでいるって言った？」
「火曜日。明日」
「…明日から学校なんだ」
「……は？」
「明日学校あるから強制的に帰らせてくれ」
「火曜休みっていうのは…」

「嘘だな」
「…了解。駅まで送っていく」
「頼んだ」
弟がゆっくりと受話器を置いた。そして妹の方を見る。妹も電話の内容で大体何が起きるか分かったらしく縮こまっている。
「……鈴」
「えへ」
「さっさと荷物まとめろ！！」
「ごめんなさーい」
妹がドラムバッグの置いてある姉の部屋に駆け込んで行った。
「まったく…鈴は何やってるんだか」
「……姉貴、帰ってきたらさっきの続きがあるから、逃げるなよ」
「……」
こうして妹はしっかり駅まで送られ、姉は夜中まで弟に怒られるのであった。

第１２話　二度あることは三度ある（後書き）

弟がキレてますね。あんな姉と妹を持つと苦労するんでしょうね。

第13話　イメチェンてイメージチェンジの略なんだぜ

弟が机に突っ伏して寝ている。寝やすいのか？
「黙れ」
弟は眠すぎて不機嫌なようである。それならば答えなければいいのに。
弟が顔を上げ、小声で言った。
「なんか言わないとお前また言うだろうよ」
何か言っても何かしら言わずにはいられないのがナレーションである。
ちなみにここは自宅ではなく大学のキャンパス内。講義と講義の合間の時間。弟も今日は講義があるので仕方なく来ているのだ。
こんな話をしている間に弟は深い夢の世界へ入っていってしまった。寝ているのか？
「……」
寝ているのか狸寝入りか知らないが、弟が行動をおこさないならこの合間に弟の幼い頃の話でも。
妹が生まれる前に家族で川原に来ていた時のこと。姉が弟に…。
「やめろ！！」
その後母が…。
「やめろって言ってんだろ！！」
父はその後始末に追われ…。
「何度言わせる気だ！！」
弟よ。人に物を頼む時にその口調は駄目だろう？
「言いなりになってたまるか！！」
姉が弟に石をたくさん…。
「すいませんでした！！やめてください！！その残酷な昔話！！」
分かればよろしい。
ちなみに次はなんの講義？

「は？そんなこと聞いてどうすんだよ。大体、天の声は…」
「よぉ！！」
乱入者登場である。
「よぉ…て、お前誰？」
背は弟より高く、顔立ちにこれといった特徴のない真ん中分けの茶髪の男が弟に声をかけてきた。果たしてこんな人物はいただろうか？
「何言ってんだよ」
男は笑いながら弟に断らず、隣に腰かけた。
「本気でどちら様ですか？」
弟が疑るような目を向ける。
「ちょっ、マジで傷つくわ。ほら同じ学科の…」
「ここにいるやつら大体同じ学科だし」
「入学式で声かけた…」
男が焦り始めた。弟の人相が段々悪くなっていく。
「そんなもん覚えてねぇよ」
「……女装美人コンテスト…」
男は早くも半泣きだ。
「出場者？それはおめでとう」
誰だか分かってて嘘ついてるのかは知らないが弟の口調は段々と冷めていく。
「……キミの友達、七三眼鏡…」
「俺に七三眼鏡の友達はいないな」
「全否定！？ひでぇよ！！友達だろ！！俺は少なくともそう信じてる！！」
「暑苦しい。失せろ塚田」
いつの間に弟はこんなに冷めたキャラに…？
とりあえず、名前を呼んでもらえた方はよっぽど嬉しかったのか、目をうるうるさせて弟に手を伸ばした。
「やっぱり分かってたんじゃん！！眠くて不機嫌でも俺はそんなお

前が」
「大好きとかぬかしたら、この世に生まれてきたことを後悔させてやる」
今日の弟は不機嫌で口が凄く悪いが、読者のみなさんはご勘弁を。
塚田が泣き崩れた。多分わざと。
「酷いわ！！私の愛を受け取ってくれないなんて！！」
「キショイ」
同感。
「と、まぁ冗談は抜きにして、どうよ？似合う？」
塚田が茶髪になった髪を指差した。
「……。眼鏡は？」
弟はコメントを避けた。私から言わせれば、それなりに似合ってはいるが、やっぱり日本人だなぁ…といった感じ。
「コンタクト。七三眼鏡っていうレッテルを払拭しようと」
「七三眼鏡の塚本くんの方が語呂がいいけどな」
「お姉さんと同じような間違いするなよ」
「間違えてるように見えるか？」
わざとか。
「見えない」
あの姉の弟だからな。
「で、なんで突然髪染めたり、コンタクト入れたりしてんだ？」
「イメチェン」
「……」
「ほら、夏休みがあけて学校きた時に七三眼鏡の人が海の似合う茶髪のナイスガイになってたら驚くだろ。驚きがときめきに変わるかもしれないだろ」
要はモテたいのか。
「だったら夏にやれよ」
正当なツッコミだな。
「あえて夏にやらないところがポイントだろ」

「…パーマもかかってんの？」
さらに話をずらした。
「そうそう。パーマかかってる方がセットしやすいから」
「目指せワカメ頭？」
「…それはやたら海の幸が出てくるアニメの妹か？」
「頭の中まで海藻なんだな」
ここまでくると弟がボケてるのかツッコミを入れてるのかわからない。
「…そろそろ学祭だな」
塚田も話をそらした。
「だから？」
「そろそろ衣装用意しないとな」
「なんの？」
「女装美人コンテストの」
弟が固まった。最近妹が来てたりしたから忘れていたかもしれないが、女装美人コンテストは本当にやりますよ。
「頑張ってお前を美人に仕立て上げてみせるから」
「頑張らんでいい！！」
「さぁてどんな衣装にしようかなぁ。今から楽しみだなぁ」
「…お前がやんの？」
「もちろん♪」
塚田が笑顔を浮かべて言った。
「ちょっと待った！！」
今日は乱入が多いな。しかも今度は女三人だ。
「当日の衣装とメイクは是非私達に！！」
「マジで？やってくれんの？ラッキー。じゃあ俺は普通に推薦者としていくわ」
「は？」
「こんな面白そうなことないからね」
弟を使って遊びたい三人の女が現れた。

「マジで！？」

第１３話　イメチェンてイメージチェンジの略なんだぜ（後書き）

弟に女装で着てほしい衣装を一応募集中。あまり少ないようです
と作者が考えたもので通します。

第１４話　頑張る時と頑張らなくていい時がある

「なーにしてんの？」
塚田が弟に話しかけた。弟は肘をついてぼーっとしている。
「……」
「おーい」
「夕飯のメニュー考えてんだよ…」
「…主夫ですか？」
「お前、ツッコミになれるよ」
弟はいつもツッコミですから。
「お前はもう立派なツッコミだよ」
「誰に言ってんの？」
塚田が周りをキョロキョロと見回す。弟がしまったという顔で塚田をとりなす。
「いや、なんでもない！気のせいだ！！幻聴だ！！」
「明らかに自分で言ったくせに…。まぁいいか」
塚田が物事に頓着（とんちゃく）しない正確で良かったな弟よ。
弟が中空を睨んだ。だから、そっちに私はいません。
弟が悔しそうに机を叩いた。乗っていたペンケースが跳ねあがる。
「今度は何だ！？」
弟よ、奇っ怪な行動が多くなったな。
誰のせいだ！！と弟が顔で語っている。
「どうかしたのか！？大丈夫か！？特に頭！！」
「気にするな。どうもしないから。頭も正常だよ」
弟がため息をついた。ため息が増えた気がするのは気のせいではきっとない。
「…で、何の用？」
「用があるのは俺じゃなくてあっち」
塚田が指差す方を見ると女三人がにっこり笑ってこちらに手を振

っている。いずれも女装コンテストで塚田に協力すると言った人だ。
弟は塚田の肩をガシッと掴んで、低音で問う。
「何の用だって？」
「さぁ？わからないなら聞けばいい。さぁ、レッツゴー」
塚田が弟の手を外して、勢いよく背中を押した。弟はつんのめるようにして彼女らの前に出た。
「おはよー斎藤君」
「…どうも」
弟が無愛想に答えると塚田がいい音を響かせて弟の頭を叩いた。ちなみに斎藤というのは弟の名字。弟は本名を斎藤俊介（さいとうしゅんすけ）というのである。
「悪いね。こいつ無愛想で。女の子とあんまし喋ったことないらしくてさ」
塚田が言う『女の子』に姉と妹は入っていない。あれを含めるなら、弟は塚田よりも女の子と話していることになる。
弟が叩かれた頭をおさえて塚田を睨む。塚田はそれを意にも介さず話し続けた。
「多分、名前も覚えてないから自己紹介してくんない？」
カールのかかったロングヘアーの人が弟の方を向く。三人の中では一番背が高い。
「教育科の柿崎美紗（かきざきみさ）でーす。ヘアメイク担当なんでよろしくね」
「ヘアメイク！？」
弟がすっとんきょうな声を出す。
「女装美人コンテストの役割分担したらしい。決めた方が後が楽だしな」
塚田が暢気に言った。
「考古学科2年の葉賀耀子（はがようこ）です。一応、メイク担当よ」
一番元気のよさそうなセミロングで茶色というよりは栗色に近い髪の人が言った。可愛いかもしれないが、それにしても化粧が濃い。
「えっと…心理学科の山村未姫（みき）です。衣装担当です」

ストレートのロングヘアーの人が言った。薄い化粧が元々の美しさを際立たせるのに一役買っている。
「塚田孝司。歳は二十歳。趣味は」
「お前は自己紹介する必要ねぇだろ！！」
弟の肘が脇腹にヒットして塚田が黙った。というか見事にヒットしたため痛みで悶絶している。加減してやれよ。
「で、俺に用って何？」
「それは私たちじゃなくて…山村、ほら早く言いなよ」
見るからに大人しそうな山村が柿崎と葉賀に押されて前に出る。
…塚田が弟の後ろで親指を立てて笑っている。弟がまともに会話したことに対する喜びだ。
「塚田、親指立てるな」
弟が振り返らずに言った。
「な、なんで分かった！？お前エスパーか！？エスパー伊藤なのか！？」
「そんなわけあるか」
弟が振り返らないで塚田の行動に気づいた理由は全て私にある。
「あ、あの…」
「何？」
「あー、こいつが怖く見えるかもしれないけど、無愛想なだけだから大丈夫」
復活した塚田が弟を指差す。よい子の皆さんはくれぐれも塚田の真似をしてはいけません。
「い、衣装用に肩幅とかはからせてほしいんだけど…」
「オッケー。ここじゃあなんだから別のとこ移動しようか」
「ちょっと待て。何でお前が仕切るんだよ！！つーか、もう次始まるぞ！！」
弟の言い分に塚田が爽やかに笑った。
「サボれ」
「お前も同じだろうが！！ノート誰に借りるんだよ！！」

「ツテならいくらでもある」
塚田は凄くいい笑顔で言いきった。
ここまでくると弟も反論する気力を失い、大人しく彼らについていくのだった。

数日後。
塚田と弟は衣装担当の山村に呼び出された。衣装が出来たらしい。
言われた場所に行くと柿崎と葉賀もいた。問題の衣装を囲んで何やら話しこんでいる。
「どーも。それが衣装？」
「はい。そうです」
山村が笑った。しかし、幾分疲れた顔で目の下にうっすらクマも出来ている。
「…もしかして、徹夜？」
この衣装のために？
「頑張りました！」
「徹夜してまで頑張らなくていいから！！」
弟がツッコミを入れる。しかしそれは完全に無視された。
「丈とか合ってるか着てみてもらった方がいいんじゃない？」
「そうですね」
「よし！手伝ってやるから着ろ！！」
塚田に強引に衣装を着せられた。描写は文化祭の楽しみにとっておこう。
「寸法ばっちり。直さなくてよさそうですね」
「やっぱりウィッグ用意した方がいいわね」
「口紅は赤い方が似合いそう」
「似合ってるぞ、斎藤」
皆好き勝手に感想を言っている。
「似合ってるって言われても嬉しくねぇよ！！」

弟のツッコミはことごとく無視されるのであった。

第15話　理由なんてこんなもの

「しゅーちゃん、今日の夕飯は何がいい？」
弟がレポートを作っていた手を止め、口を開けて呆然としている。
それぐらい姉の言葉は意表をつくものなのである。
「…俊介な」
あまりの衝撃に弟のツッコミがずれている。駄目だろう弟よ。
「姉貴、もう一回言って」
無視ですか。
姉が笑顔でもう一度繰り返した。
「夕飯、何が食べたい？」
弟は開いた口がふさがらない。
正直、ナレーションに身体があったら弟と同じ行動をするだろう。
「…夕飯が何なのか聞いてるわけでは…？」
「何が食べたいのか聞いてるの」
「…それは作ってくれるという意味で間違いない…？」
「他に何があるのよ」
「……」
……。
「えっ！？ちょっと、天の声まで黙らないでよ！！ナレーションがいなくなるから！！」
本当に驚きです、お姉様。
弟は開いた口がふさがらないという状態を越して、茫然自失。さっきからぴくりとも動かない。
「え～！！なんで！？作っちゃ駄目なの！？」
いや、作っちゃいけないわけではなく…意外と言いますか…。前に弟が炊事を放棄した時も、出前だった気がするのですよ…。
「そう？まぁいいや。さぁ、何がいい！！」
凄く気合いの入った姉が聞く。その声で茫然自失だった弟がまば

たきをした。
「じゃ、じゃあカレーで」
初心者向けだからね。
「しゅーちゃんが来る前は自炊してたんだよ。もうちょっと凝った物も作れるって」
どんな物を作っていたんだろうか…。
「あんまり凝った物頼むと後が恐ろし」
「俊介、何がいいたいのかな？」
呼び方が俊介になっている上に、手にしたシャープペンの芯がボキッと折れた。弟の額に汗が浮かんだ。
「いえ、今カレーが食べたい気分で！！辛口のカレーが食べたいんですよ！！凄く食べたい！！今すぐ食べたい！！」
「そう？じゃあ買ってくるね」
「こだわらなくていいから！！ルーは市販のやつ買ってきていいから！！」
「分かった」
姉が立ち上がり玄関に向かった。その間、弟の額からは汗が流れっぱなし。
ドアを静かに閉める音がしてから弟が大きくため息をついた。
頑張れ。責任持って食えよ。私は身体ないから食べられないのである。
「そんな無責任な！！」
そう言うなら止めればよかったのに。
「あんなにノリノリな姉貴を止められ自信はない。大体止めたって」
ガチャッとドアが開いて姉が駆け込んでくる。
「お財布忘れたー」
弟の汗の量が二倍になった。
料理がどうなるのか不安である。

姉が帰ってきた。手にはスーパーのビニール袋。とりあえず、無事に買ってきたようだ。
キッチンで姉が食材を出すと弟が心配そうにやってきた。姉が帰ってくるまで何を買ってくるのか心配しすぎてレポートが手につかなかったのである。
「何買ってきた？」
「しゅーちゃんが辛口って言ったからルーは辛口のやつ」
言いながらルーを取り出す。まともなやつだ。
「あとはじゃがいも、にんじん、玉ねぎ」
ゴロゴロとそれらが出てくる。
「そしてほうれん草」
袋に手を入れて出てきたのは確かにほうれん草である。…なんで？
「野菜カレーにでもしようかなぁと」
「野菜カレーですか…」
弟がなんとも言えない顔をする。心配すぎるのは分かるが、姉の機嫌を損ねてはいけないのである。
「後は豚肉」
ポークカレーなので…！？確かに豚肉ですが、それは…。
「豚の角煮でも作る気か！？」
バラ肉である。ブロック肉である。…カレーにそれは普通入れない。
「え～！！お肉は大きい方がいいと思ったのに！！」
「牛なら分かるけど、豚は薄切りの方がいいから！！」
牛肉もそんなに入っていたらカレーじゃなくてカレー風味の肉煮込みである。
「え～。買い直して来る？」
「いい！！もう余計なことするな！！やっぱり俺が作るから！！」
「私がやるって言ったじゃん」
「姉貴にやらせたら、夕飯が出前になりそうだ！！ここは任せてくれ。そのバラ肉薄く切って代用するから」

残りは？
「角煮で片付ける」
弟は腕まくりをして豚肉に手を伸ばした。
着々と料理が完成する中、姉が小動物のような目で弟を見ている。
見られているよ弟。
「はぁ……なんで作るって突然言い出したんだよ」
「日頃の苦労を労おうかと」
労おうとして完全に仕事を増やしているが…。
「それはどうも」
「だって明日、コンテストでしょ？」
「…コンテスト？」
「学祭の女装美人コンテスト。見に行くから！！」
姉が満面の笑みを浮かべた。
「忘れてた…」
当事者が忘れるな。

第１５話　理由なんてこんなもの（後書き）

というわけで次回から学祭編です。果たして弟の女装はどうなっているんでしょうか。

第１６話　面白すぎる学祭　その一

翌朝、弟が色々と言い訳をして家を出ないでいた。このままだと学祭に間に合わない。

「本当に腹痛いんだよ！！言い訳じゃねぇ！！」

言い訳にしか聞こえない。

その時、お姉様が降臨なさった。ノックなしで部屋に入ってきたとも言う。

「しゅーちゃん、そろそろ出ないと間に合わないよ」

「今日は行かない」

だんだんと弟が駄々っ子に見えてきた。

姉が笑うのではなく微笑んだ。嫌な予感がする。

「しゅーちゃん、行きなさい」

「だから、行かな…」

「俊介、行け」

姉が命令形で、しかも背後にドロドロとしたオーラを引き連れて言った。弟が息を飲む。記憶の扉が開いたらしい。

「い、イエッサー…」

玄関まで自主的に弟が歩いていく。姉がその後ろを表情を崩さずについていく。今日は一段と姉が怖い。

弟が靴を履いたところで姉が弟を押し出し、扉に鍵をかけた。ハッとして弟が扉をガンガン叩く。

「鍵ー！！鍵忘れた！！」

「ケータイと財布は？」

「それはある」

「それなら問題ないから行きなさい。心配しないで。私も後でちゃんと行くから」

「心配してねぇよ！！むしろ来なくていい！！」

間髪いれずに返事をしていた姉の声が止まる。弟は不思議に思っ

たが、少し間を置いただけで返事が帰ってきた。
「写真もちゃんと撮るからね！！」
「撮るな！！撮らないでくださいお姉様！！」

「ホントいいキャラしてるよ、お前の姉ちゃん」
塚田は弟に今朝の話を聞いた後、勢いよく吹き出すとそう言った。
それに対して弟は不機嫌丸出しで答える。
「そんなにいいなら、お前にやるよ…」
「いただけるならいただきたいね。あぁいう人はタイプだから」
姉がタイプという奇特な人、塚田孝司。でもその願いは多分実らない。
「お前…マゾか…」
妙に納得する弟。
「いや」
「は？あんなのがタイプって時点でそうだろ」
「いやいや」
塚田が首を振ってから笑った。
「マゾの皮を被ったサディストさ」
それは言いきっていいのか塚田！！しかもなんでそんな満足そうに言う！！
「さって…面倒だからもういい」
おーとっ！！ここで弟があっさり匙を投げた！！いいのか弟！！
それでいいのかツッコミ！！
ピキッと額に筋が浮かんだが、ギリギリで弟は怒りを堪えた。
「じゃあ、時間まで回りますか」
「……？すぐ用意じゃねぇの？」
「用意は午後からで問題ない！！」
むしろその自信が不安を煽っているのである。
「安心しろ！！男二人の寂しすぎるメンツにならないようにちゃん

と誘ったから！！」
「…誰を？」
「やっほー」
弟が振り返るとそこにいたのは、コンテストのヘアメイク担当柿崎美紗とメイク担当の葉賀耀子だった。ちなみに背が高いのが柿崎で、化粧が濃いのが葉賀である。
「もう一人いたよな？」
「あぁ、未姫ならサークルで喫茶やるから回れないって」
「衣装担当だから当日いなくてもなんとかなるしね」
「喫茶！？行こう！！様子見に！！」
塚田がノリノリで歩き出す。そんな塚田を誰も止めることが出来ずに後を追う。
「サークルって何やってんの？」
「あー…うん。行けば分かる」
柿崎が塚田の質問に言いよどんだ。葉賀に至っては目をそらしている。
男二人が怪訝な顔をしていたが、そんなことに構わず、すぐに目的の場所についた。
「どこ入口？」
「こっち」
四人が入っていく。
「ようこそ喫茶パラダイスへ！！」
中で注文を取っていた人全員が大きな声で言った。学祭にありがちな喫茶にも思えるが…。
「なんで全員コスプレ！？」
ナースから侍までよりどりみどり…。ほとんど接客は女だが、男がミニスカートの警察官はどうなのか…。しかもなんでそんな堂々としているんだ！！
「こちらへどうぞ」
ごく普通に空いていた席に案内される。でもその接客の格好は巫

女さん。
「あの…」
弟が恐る恐る声をかけた。接客係はニッコリと微笑む。
「なんでしょうか」
「これなんのサークル…？」
「手芸サークルです」
それだけ言うと巫女姿の接客係は去って行った。
「手芸サークルがなんでコスプレ喫茶！？」
「手芸サークルって小物とか服とか作るしかないじゃない。展示だけだと人があんまり集まんないから作った服着て喫茶やろうとしたんだけど、何年も続いてるうちに全部コスプレになっちゃったんだって」
葉賀が事も無げに言った。
四人が注文する物を決めて接客係を呼ぶ。
「ところで未姫ちゃんは何着てるんだろうね」
「そんな風に呼ばないでくれませんか」
四人が声のした方を向く。コンテストの衣装担当、山村未姫だ。髪を二つにまとめてヘッドレスをつけ、レースをふんだんに使った白と黒の上下。ゴスロリ風、メイド服だった。
「未姫ちゃんナイ」
塚田がすべて言う前に弟が山村の持っていた注文票で頭を叩く。小気味いい音が響いた。
「そこの女好き、お前は少し黙ってろ」
「男なら女好きは当たり前だろ！！」
「分かった。言い直す。お前が喋るとセクハラ発言に聞こえるから黙れ、女たらし」
「斎藤君、そこまで言わなくても…」
山村が仲裁に入った。
「これぐらい言わないと塚田は止まらないだろうよ」
そう言う横で塚田は親指を立てて笑う。弟の言葉に同意してどう

するんだ。
弟がまた注文票で塚田の頭を叩く。
「少しは学習しろ」
「あ、斎藤君、そろそろ注文票いい？」
「あぁ、ごめん」
弟が山村に注文票を返した。そして思い出したように笑う。
「そういえば、その服可愛いね。よく似合ってるよ」
山村は顔を真っ赤にすると、声を小さくして注文を取りはじめた。

第１６話　面白すぎる学祭　その一（後書き）

弟に恋の予感！？あの姉のもとで弟に春はくるのだろうか…。
学祭でコスプレ喫茶ってありそうな気がして書いてみました。
この後の展開が気になるところですが次回は珍しく弟が出てきません。女装は次の次ですよ。

第17話　面白すぎる学祭　その二

「大学来たの二年ぶりー。懐かしー」
「お姉ちゃん、この大学だったっけ？」
「違うけど」
「だったら懐かしいはずないじゃん」
「いや、ほら、雰囲気とかさ！！学生のノリとかさ！！」
妹の冷たいツッコミ、というより切り捨てに今日も姉はしどろもどろである。
「あれ？天の声来たんだ。今日はずっとしゅーちゃんの方にいるのかと思ってたのに」
コンテストが始まるちょっと前まではこっちにいるのである。ところで何故実家にいるはずの妹がいるんだ？
「一人で回るの寂しいし、鈴にもぜひしゅーちゃんの晴れ姿を見てもらおうと」
「お姉ちゃんが無理矢理呼び出した」
妹は姉に厳しい気がする。
「気のせいである♪」
「なんでそんな口調なの！？」
「天ちゃんの真似」
天ちゃんと呼ばないでほしい。
「え～！！この前はいいって言ったのにー！！」
過去は振り返ってはいけないんだ、妹。
「…天ちゃんて何歳なの！？」
ナレーションに年齢はいらないのだよ。
「なんか…偉そう…」
この物語はナレーションなしでは成り立たないのである。
「どんな物語でもそうだと思うけど」
妹から容赦という言葉が完全に消えていく。

「それは少なくとも私に対してはいつものことよ…」
まあまあ。姉、そんなに落ち込むな。
ところでどこへ行くつもり？さっきから移動していないのだけれど。
「わかんない」
いや、決めろよ、姉。
姉と妹は大学の門を通り抜けてすぐのところに立っていた。
「天ちゃん、なんか面白そうなところなかった？」
特にオススメはない。
「天の声はしょーちゃんと回ってたんだからどこか知ってるわよね」
姉がにっこりと笑う。しかしかなり歪んだ笑い方だ。
…何故ナレーションなのに私は脅されてるんだろうか…？

校庭の方に出店が沢山出ていたと言った（言わされた）ため、二人は校庭の出店を冷やかしに来ていた。一応言っておくが、二人とは姉と妹のことである。
「ねぇ、焼きそばがいい匂いだよ」
「駄目。値段のわりに量が少ない。焼きそばならしゅーちゃんに作ってもらった方が安いし、美味しいわ」
今日の姉は妙に現実的であった。
「そこの綺麗なお姉さん、わたあめなんてど」
「わたあめなんかただ甘いだけじゃない。どこが美味しいのよ。それとあんたなんかの姉になった覚えはない」
姉はこうして話しかけてくる売り子たちを一刀両断していった。妹のさらに凶悪化したものを見ている気分である。
「お姉ちゃん…どうしたの？いつものお姉ちゃんなら『あら美味しそう。一個買ってあげるからもう一個おまけしてね』ぐらいにするのに」
それもどうだろう…。

「ちょっと学生時代を思い出してね…」
姉が哀愁を漂わせた。というか、学生の時はそんな性格だったんですか！？
「教授に対してだけよ」
それはまずいでしょうが。
「よくここまで性格変わったよね…」
「ありがと」
「誉めてないから。自惚れないでよ、お姉ちゃん」
妹の毒舌に姉がダメージを受けた！！立ち上がれ姉！！
「自惚れじゃないわよ！！事実よ！！」
おっと！！自ら墓穴を掘ったぞ姉！！頑張れ姉！！立ち上がればその先にはきっと、多分、希望では弟が！！
妹が哀れみをこめた目で姉を見ている。いや、呆れか？
「…なんか疲れた…」
そうでしょうね、お姉様。一人で勝手に墓穴掘ってましたからね。
「ところで…何しに来たんだっけ？」
いや、あの…妹さん？弟のコンテスト見にきたんでしょう…？
「あぁ、そうそう。女装美人コンテストだよね。そこにさ…」
妹が掲示板を指差した。掲示板にはカフェテリアなど、学祭の宣伝がところせましと貼られている。妹はその中央に貼ってある物を指差している。
「大学祭恒例！！第２４回男のための男による女装美人は誰だコンテスト！！野外ステージにて二日目午後一時半から！！」
そんな正式名称だったのか。
「鈴、これがどうかした？」
「今、２５分だよ」
「…何時…？」
「１時」
「後５分しかないじゃない！！急ぐのよ、鈴！！」
姉と妹は野外ステージを目指して、人をかき分けながら走って行

った。
野外ステージはここから１０分近くかかるが、果たして間に合うのだろうか。

第１７話　面白すぎる学祭　その二（後書き）

学祭のネタなのに今１２月です…。すいません。次で終わりますから許して下さい。

第１８話　担当ですから（前書き）

季節優先で大学祭の最後の回より先に、斎藤家の大晦日をお届けします。

大学祭はもう少しお待ちください。

第１８話　担当ですから

「やっぱりこたつにミカンが冬の醍醐味よね」
姉がミカンを頬張りながら言った。
「こたつはねぇよ」
いつものように弟が容赦ないツッコミをいれる。
「いいじゃない。今日は大晦日よ！！今年もあと何時間かで終わっちゃうのよ！！買ってきてよ、　こたつ！！お金は私が出すから！！」
「だったら姉貴が買ってこい！！もしくはこれ、代われ！！」
今日は大晦日。大晦日と言えば、そう年越しそば。弟は腕をふってそばを用意しているのだ。そば粉から始めるなんてことはないが。
「当たり前だ！！そこまで出来るか！！むしろ大晦日ぐらい料理代われよ！！」
「えー。だってねぇ？」
ねぇ？
「しゅーちゃんが担当ですから！！」
「そのポジションを代えろって言ってんだよ！！」
年末なので弟のツッコミの勢いも二倍である。
因みに、今さらな気もするが、現状を説明すると、年末恒例の大掃除（ほとんど弟がやる）が終わり、弟はそばを茹でていて、姉はミカン片手にソファに座り、テレビを見ながら笑っている。それで必死に働いている弟にこたつを買ってこいと言うのだから、この姉も無情である。まぁ、いつものことだが。
「だからたまには代われって言ってんだよ！！」
「無理無理」
のほほんとミカンの皮を剥きながら姉が答えた。
というか弟よ。食べられる物を求めるなら弟が作った方が無難で

ある。
「作れるわよ。そばぐらい。茹でるだけでしょ？でもやらないからね。食費全部払ってるの誰だと思ってるのよ」
「…姉貴です」
「分かってるならキリキリ働きなさい」
段々と弟がシンデレラに見えてきた。
沸騰した湯の中に市販のそばを入れて、弟が大きくため息をつく。そばつゆを作っている方の鍋がことことと音を立てた。
「大晦日ぐらい休みをくれ…」
「何言ってるのよ。今まさに冬休みでしょ？大学生。私より休み長いんだから文句言わないでよ」
「訂正。俺がやってる家事の休みをくれ」
そんなことをすればあっという間に家から食べられる物が消えるのである。
「一日家政婦、誰かやってくれー…」
切実だ…。
そんなことをしている間にそばが茹であがる。弟は水を切って二つの器にそれを入れ、温かいつゆを加えた。湯気が立ち上る。
「美味しそう」
姉がキッチンの入口から顔を出していた。
「いつの間に！？」
「しゅーちゃんと天の声が喋ってる間に」
姉はそう答えるとそばをテーブルに運んだ。…珍しく姉が働いてるのを見た気がする。
「ほら、しゅーちゃん、早く食べないとおそばのびちゃうよー」
笑顔で姉が言う。それを見て弟が複雑な顔をしている。
「…俺が作ったんですけど」
「つべこべ言わずに早く食べる！！」
「はいはい。わかりましたよ、お姉様」
弟が苦笑しながらキッチンを出て椅子に座った。そばが美味しそ

うな香りを漂わせる。
こうして今年も終わるのだろう。何か大きな変化はなくとも、日常が一番いいのである。
「姉貴、今年最後に一つ言っていいか？」
姉がそばをすするのをやめて弟の方を見る。
「俺は俊介だから。断じてしゅーちゃんではないから」
姉がキョトンとしている。それは理解していると思うぞ。
ところで私も最後に一句詠んでいいか？
「どうぞ」
姉が笑ってこちらに手を振る。
では一句。
年越しも　最後はつっこむ　弟だ
「お前がツッコミ入れさせてるじゃねぇか！！」
弟のツッコミに姉が吹き出した。
除夜の鐘とともに斎藤家からは愉快な笑い声が聞こえるのであった。

第１８話　担当ですから（後書き）

今日だからこそ書ける年越しバージョン。
今回は笑いより、日常っぽさを優先させてみました。

第１９話　お約束ですから！？（前書き）

大学祭編を書いている間に正月が来てしまったので、斉藤家の正月を楽しんでください。

第１９話　お約束ですから！？

「新年、あけましておめでとうございます」
おめでとうございます。
今年もナレーションこと天の声をよろしくおねがいします。
「斎藤家のお姉ちゃんをよろしくね。しゅーちゃんも新年の挨拶しないと駄目でしょ」
「あけおめ。ことよろ」
「そんなに略さないでよ。それよりおせち出来た？」
挨拶よりも食ですか。
「俺におせち作らせておいて、挨拶略すなとか言うな！！」
「挨拶は大切なのよ。新年の挨拶がしっかり出来ない人は新な気持で…」
「去年最後の昨日も、今年最初の今日も弟に飯を作らせる姉貴に言われたくないね！！」
そう、今日も弟はキッチンでおせちの準備に勤しんでいる。エプロンを着て。
「エプロン着てちゃいけねぇのかよ」
珍しい現象がおきているなぁと。
「そうですか」
今日は雪かなぁと。
「そんなに珍しいのかよ！！」
おたまを空中に振り上げている。弟程度に捕まらないし、私には実体がないのでぶつかったりもしないのである。
「……」
「しゅーちゃん、お雑煮は？」
暢気な姉の声がキッチンに届く。
弟は諦めて、鍋を手にダイニングへ行った。姉が机に座って弟が運んで来る鍋を凝視している。

「なんだよ。そんなに腹減ってんの？」
鍋から目をはなさずに黙ってうなずく姉。
弟は深くため息をついてから鍋のふたを取った。味噌の香りが漂う。
「お味噌汁？」
怪訝そうに姉が聞いた。正月に食べるのは普通味噌汁ではなく雑煮である。
「雑煮だ。ほら」
弟が味噌汁もどき？をよそって姉に出す。姉ははじめて見るかのように恐る恐る箸をつけて中の具をかき回す。
「お餅が入ってる」
姉がかき回すと餅が表面にプカプカ浮いてきた。焼き目のついた丸餅だ。
「なんで丸餅？ていうかなんで味噌仕立て？」
「関西風なんだよ。知らないのか？関西は四角じゃなくて丸い餅が一般的で、すまし汁じゃなくて味噌なんだよ。因みに俺の趣味で今日のやつは白味噌」
というか弟よ。
「しゅーちゃんは静岡出身でしょうが！！」
静岡ならすまし汁だろう。
「関西は味噌っていうから試してみただけだ。いつも同じだと飽きるだろう？それより、早く食べないと餅が硬くなるぞ」
姉が雑煮に口をつける。弟も自分の分をよそって食べてみた。
「お味はいかがでしょうか、お姉様」
「うん…お味噌汁」
「普通は美味しいとか答えるもんだろう！！」
今年も姉は一味も二味も違うようで。
「ねぇ、しゅーちゃん。初詣行かない？」

姉弟は連れだって近所の神社に来ていた。弟は新年の始めぐらいは素直に従う気になったようで、それほど抵抗せずについて来た。雪が降らないことを願おう。

「そんなに珍しいか、天の声…」

怒りを抑えた小声で弟が言う。寒そうにダウンのポケットに手を突っ込んでいる。

「まぁまぁ。それぐらいで怒らないでよ」

姉がなだめる。こちらもコート着用だ。新年だが、振袖を着たりはしないらしい。

「誰が着付けすんだよ」

姉は不器用だから着付けは出来ないらしい。

「はいはい。ほら、もう順番よ」

初詣の客の流れに乗ってやっと賽銭のところまで来た。五円玉を投げ込み、手を合わせる。

「みんなが今年一年、健康で過ごせますように」

これは姉のお願いだ。

「今年こそは家事から解放されますように」

それは無理なのではないだろうか、弟。姉が弟の姉として生まれた時からその運命は変わらないだろうよ。

「……せめて一日だけでも家事を休めますように」

いっそどこかで家政婦を雇えばいいんじゃないか？

願い事が終わり、二人は参道から離れて行った。いつもそんなに賑わってはいない神社が正月ばかりは活気を取り戻し、御守りや絵馬などを売っている。おみくじが枝に結びつけられて白い花が咲いているようだ。

弟が他人が書いた絵馬を何気なく見ている。

「あー、今年もあるなぁ。大学に合格しますように。受験の時は大変だったな。こっちは…幸せな結婚生活が送れますように。その幸せを分けてほしい」

弟…何してるんだ。

「意外と面白いんだよ、こういうの。こっちは？彼女ができますように？いるなこういうやつ……塚田孝司…？」
どこかで聞いたことのある名前だな。
「あ、姉貴は？」
そこで甘酒もらってる。
弟が姉を探して辺りを見回す。
「よ！！」
弟に手を振りながら男が近づいてきた。当たり前というか案の定というか…七三眼鏡から茶髪コンタクトになった塚田である。
「なんだよ。お前も来てたのかよ。声かけてくれれば一緒に行ったのに」
弟の肩を叩きながら上機嫌で笑う。
「お前…何飲んでんの？」
塚田は紙コップを持っていた。わずかに湯気がたっている。
「これ？甘酒。配ってたからもらったんだ」
「そんなに酒弱かったか？」
「いや。酒飲んだらテンション上げないと失礼だろう？」
誰にだ。
「あら塚地くん」
紙コップを二個持って姉が駆けてきた。
「いえ…あの……塚田です」
「そうだったね、塚原くん」
言っておくが姉は酒豪である。ざるである。甘酒程度で酔ったりはしない。
「（弟が）おせち作ったんだけど、食べに来ない？」
「（お姉さんの）おせちですか！？是非！！塚原でも塚地でも構いません！！」
「いいでしょう？」
姉が弟に聞く。弟が凄く嫌そうな顔をしていたが、やがて何かに気づいて微笑んだ。

「塚田、食べにくるなら礼儀は守ってくれるよな？」
「？あぁ」
「食器とか洗うのは頼んだぞ」
「客にやら…」
「うちでおせち…食べたいよな？」
「いいともー」
弟は塚田の肩をつかんで、逃がさないようにした。姉は弟に甘酒を渡しながら弟に友達が出来て良かったと喜んでいる。
塚田は今日、シンデレラの気分を味わうことになるのであった。

第１９話　お約束ですから！？（後書き）

季節外れですいません。元旦に載せようとしていたのですが間に合わず…。

美味しいか尋ねられているのに姉が「味噌汁」と答えているところは俺が実際に昔、やったことです。お雑煮ではなかったのですがね。

第２０話　面白すぎる学祭　その三（前書き）

お待たせいたしました！！
大学祭編の第三話になります！！

第２０話　面白すぎる学祭　その三

「完成～！！」
ヘアアレンジ担当の柿崎が手を上げた。弟のセットが終わったらしい。
「こっちも終わったわよ」
葉賀が顔を上げて、チークをしまった。
弟の着替えも済んでいるのでこれで準備は完了である。が…。
「おーい、生きてるかー？」
間延びした口調で塚田が手を振る。弟は顔をあげようとしない。
大丈夫か？
「死にたい…。大丈夫じゃない…」
「主役が何言ってんだ！！テンション上げろよ！！」
いや…その恰好じゃあ無理だろう…。
弟が首を縦に振った。一応こちらの声は聞こえているらしい。
「大丈夫だって。お姉さんそっくりで、綺麗だよ」
マジ顔で塚田に言われても…。
「それは男に言うセリフじゃない…。てか、キショイ」
「キショイって言うなよ。それに今のお前なら女にしか見えないから問題ない」
それは問題なくはないだろう。
塚田はなおも弟を励まそうと声をかけ続けるが、弟のテンションは段々と落ちていく。
「こんな時しかやることないんだからさぁ。ねぇ？」
「うん。そうそう。どうせ一回なんだから全力でやろうよ！！」
「そうですよ！！」
柿崎、葉賀、山村の女子3人も弟を必死で励ます。弟は背を丸めてうつ向いたままだ。
「失礼しまーす」

返事も待たずに女装美人コンテスト控え室の扉が開いた。
「あ、ちょっと…」
柿崎が止めようと立ち上がると塚田がそれを押し留めた。
「まぁまぁ。あの人は俺が呼んだんだからいいんだよ」
あの人と言いつつ、入ってきたのは二人。もちろん弟の姉と妹である。…こう言うと複雑になる。
「だったら言い方変えろ…」
うつ向いたまま弟が反論した。弟が独り言を言っても皆、姉と妹に気を取られていて気づかない。
姉と妹がうつ向き加減の弟を発見した。姉が目を輝かせて駆け寄る。
「しゅーちゃん、綺麗！！」
「やめろ！！言うな！！今からすぐに帰ってこのことは忘れろ！！」
無理な注文である。
弟が微かに顔を上げて目を細めた。そんなことをしても私の姿は見えない。というか人相が悪いぞ、弟。
「帰らないわよー。こんな貴重な物を見逃すわけにはいかないって」
「そうだよ、お兄ちゃん。お姉ちゃんと似てるけど性格の分お兄ちゃんの方がモテるって」
「…鈴、どういう意味？」
妹の言葉に姉が目を細める。それに対して妹はからりと笑った。
「ばかだなぁ。そのままの意味だよ、お姉ちゃん」
「そんなこと誉められても嬉しくねぇよ」
弟がガックリと肩を落とした。
「斎藤くんのお姉さんと妹さん？」
葉賀が割り込んできた。そうでもしないと弟いじめ…可愛がりが止まることはなかっただろう。
「あ、しゅー…じゃない、俊介のお友達？いつも弟がお世話になってます」
姉が一見しっかりしたお姉さんと間違うような態度で軽く頭を下

げた。妹もそれにならう。なんと表面だけ作り出す姉妹だろう。そんな表面だけで姉に惚れた塚田が口を開く。
「見たことなかったけど妹もいたのか」
「普段は実家。たまに遊びに来るんだ。で…」
弟が目線を塚田から妹に動かした。
「なんで鈴がここにいるんだよ…」
「お姉ちゃんに面白いことがあるから来なさいって呼び出されたからだよ。ね？」
妹が笑顔で姉に話を振った。弟の顔がひきつる。
「やっぱり姉貴か…。来るなって言ったのにな…」
姉が慌てて弟のご機嫌取りをはかる。無駄だとは思うが…。
「ほらぁ、そんな顔しないの。せっかく綺麗にして貰ったのに台無しでしょう？」
ブツンと何かがキレる音がした。
「好きでやってねぇんだよ！！」
姉が弟の機嫌をとろうとしても無駄だということが実証されたのであった。
塚田が弟と姉の間に割って入る。
「お姉さんも妹さんも観客席の方に移動して待っててください。そろそろ始まると思いますから」
「あ、もうそんな時間？」
パタパタと足音を立てて姉と妹が出ていった。
それを笑顔で見送る塚田の背中に冷たい目線が刺さる。視線に気づいて塚田が振り返って弟に弁解を試みる。
「お前のお姉さんなら何言っても見にくるんだからしょうがないだろう。諦めろよ。機嫌直せって」
塚田がいくら言っても弟の眉間のしわは取れない。
塚田が弟に機嫌を直すように言っているところへ、大学祭運営委員会が扉を開けて移動するように促した。
「行くぞ。このままだと棄権になるからさ」

「棄権になればいい…」
不機嫌な弟を塚田が宥めながら会場まで引っ張って行く。
女子が笑顔で見送っている。
たった一人だけ皆と違い、弟の背中を心配そうに見つめていたのはきっと私以外誰も気づいていないだろう。

第２０話　面白すぎる学祭　その三（後書き）

大変お待たせした上に学祭編完結してなくてすいません。
しかも最後、天の声が天の声じゃなくなってますし…。学祭編だと天の声と弟の会話とかがまともにできなくて調子が狂ってるんですよ、彼？も。
記念すべき２０話目なのにこんなんでいいんでしょうか。予定では３０羽目に「談笑会」をお送りする予定なので疑問質問を送ってください。

さすがに次で終わるはずなのでもう一話だけ学祭編という名の女装コンテスト編にお付き合いください。

第２１話　面白すぎる学祭　その四（前書き）

女装コンテストをお送りするにあたり、客観的に話を進めるために天の声が弟に話しかけたりしませんが、ご了承ください。

第２１話　面白すぎる学祭　その四

「ついにやってきました！！大学祭恒例！！大学祭の目玉！！第２４回男のための男による女装美人は誰だコンテスト！！只今から開始です！！」

マイク片手に男がテンション高く叫んだ。観客からも興奮の声が聞こえる。

「私、今回このコンテストの司会進行をさせていただきます当大学三年の芒野（すすきの）と申します。このコンテストを仕切らせてもらうにあたりいくつかの抱負を…」

芒野の説明が長引きそうだと判断した観客からブーイングが聞こえてくる。このまま抱負を述べていると観客全員によるブーイングの嵐が起きそうだと思った芒野が片手を肩まで上げた。

「オーケー、オーケー。俺の抱負なんか聞きたくないって言うんでしょう？みなさんの非難が爆発する前にコンテスト出場者を呼んでしまいましょう」

芒野のこの言葉で音楽が流れ出し、出場者が入場してきた。それぞれ色鮮やかな服を身に纏い、たった一人を除いて全員が観客に、にこやかに手を振っている。

「では自己紹介していただきましょう。チャイナ服な一番の方どうぞー」

次々に番号を呼ばれ、自己紹介していった。皆個性的な自己紹介で観客にアピールしている。

そして出場者の中でただ一人、にこりともせずにうつ向いている人の番になった。

「はーい。ではお次は九番の方自己紹介どーぞ」

「……」

九番はうつ向いたまま顔を上げようともしない。

「浴衣がとってもお似合いの九番の方ー？」

「……」
「九番の方お名前をどうぞー」
「……いと……」
ボソボソと九番が喋り出した。しかし声が小さすぎて観客にも司会者にも聞き取れない。
「いと？あぁ、伊藤さん？」
「違うから！！斎藤です！！」
もちろん、この九番がこの物語の主役、弟である。
弟は紺の地に朝顔の柄が入った浴衣を着こなしていた。髪を束ねてエクステンションをつけている姿は姉そっくりだ。
「斎藤さんね。特技は？」
「絶対わざとだろ…。どっかに出場者の名前ぐらい書いてあるだろうが」
「はいはい。特技はツッコミね。どんなボケも見逃さないツッコミね」
弟のツッコミを無視して司会が進行を進める。こうでもしないとコンテストの司会は勤まらないからだろう。
「で、趣味は？」
「なんか投げやりだな…。趣味は…あれ？俺って趣味あったっけ？」
「日常的によくやることってないの？」
「必要に迫られて家事…」
「趣味は家事！なんと家庭的な人なんでしょうか斎藤さん。そんな斎藤さんに拍手」
観客から割れんばかりの拍手が響いた。その拍手の合間に黄色い声が…聞いたことのある黄色い声が…。
「しゅーちゃん可愛い！」
弟は思わず両手で顔を覆った。うん。その気持、分からないでもない。
「さあ次は十番の方」
司会は観客の中から聞こえる黄色い声を完全に無視して進行を進

める。ここまでくると誉めてやりたくなる。
無事、十五番までの自己紹介が終わり（結構な人数が参加していたものだ）、観客による投票が行われている。相当の人数がいたため、自己紹介だけで時間をくってしまったようだ。
このコンテストには大学側も金をかけているため、投票の集計にはハイテク機器が使われる。簡単に言ってしまえばマーク式集計の超高速版。投票数が多くても二分足らずで集計が終了する…はずだった。
あと少し待っていれば集計結果が出るという時になって集計所が騒がしくなった。
「集計所でトラブルが発生したようですが、皆さんしばらくお待ちください」
そう言うと司会者の芒野は裏方に何が起きたのか聞いている。その声は舞台上にいる弟の耳にも届いた。
「集計の機械が古くなってきていたから、高速集計に追いつかなくなったらしい。モーターから発火して、集計所のテントが今燃えてる」
「じゃあ集計は無理だな…。観客に知らせてくるか…」
「そんなことしたらパニックになるぞ」
いてもたってもいられなくなった弟は浴衣のまま舞台を駆け降りて、司会と裏方に聞いた。
「被害は！？」
「テント一つ」
「人は全員逃げたのか！？」
「さあ、そこまでは…」
弟は裏方を押し退けて走り出した。
「ちょっ…斎藤さん！！」
司会が驚いて弟を止めるが、弟はそれも押しのけた。
走る走る。弟は浴衣だということを忘れさせるほど全力疾走した。
走り続けて、集計所にたどり着いた。テントは炎上して、集計の

スタッフはテントを囲んで呆然としている。火の勢いは留まるところを知らず、少しずつ広がっていく。
呆然としているスタッフの一人を捕まえて弟は聞いた。
「全員逃げたか！？」
「え、えぇ。なんとか…」
「良かった…」
その言葉を聞いて弟がやっと緊張をほどいた。そして辺りを見回す。皆呆然としていて動こうとしていない。
「消防車は？電話した？」
「あ、はい。一応。でもすぐには来ないらしいです」
「消火器は？」
「へ？」
スタッフは弟の言葉にキョトンとしている。消火器ってなんだっけというような表情だ。
弟は使えないスタッフをほっといて、また走り出した。
今度はすぐに帰ってくる。左手に消火器を持って。
弟は未だに燃えている集計所のテントを消火し始めた。弟に触発されてスタッフもやっと消火器を持ち出す。
テントを覆っていた火は小さくなり、やがて消えた。テントは炭になったが、奇跡的に怪我人は一人として出なかった。
「はあ…はあ…」
弟はすっかり息を切らして、浴衣だということも忘れて、地面に転がった。
そんな弟にスタッフが寄ってくる。
「あなたのおかげで助かりました。ありがとうございます」
「…いえ…」
「消火器を持って現れたときは救いの女神が降りてきたのかと」
ん？女神？
「男です！！」
「え？だって浴衣…」

「男ですから！！」
弟のキレる寸前の言葉にスタッフはやっと気づいたようだ。
「あ…コンテスト出場者ですか？いやぁ、浴衣がとてもお似合いなので本気で女の方かと…」
「どうして女に見えるんだー！！」
「どこからどう見ても」
スタッフは即答した。周りにいる人も頷いている。私も身体があれば頷いている。
「今こんな格好も男です…」
「大丈夫かー」
間延びした声が響いた。司会の芒野が走ってくる。
「火は？」
「この人のおかげで鎮火しました」
スタッフが地面にぶっ倒れている弟を指差す。指されている弟がなんとか立ち上がり、芒野の方を向いた。
「それはどうも。観客の方はトラブルが起きたから集計が出来ないってことで帰したから」
「ですよねー」
スタッフが相づちを打つ。
「で、今年の優勝者だけど…」
芒野が弟の方を見た。嫌な予感がして、弟は一歩後退する。
「消火してくれた斎藤さんということでいい人ー」
スタッフのほとんどが手を挙げる。
「じゃあ、優勝は斎藤さんてことで」
「はぁ！？」
「まあ集計の途中経過もこの人が一番だったんでいいんじゃないでしょうかね」
弟が嫌そうな顔をした。そんな弟の顔など無視でスタッフは勝手に決めていく。
「じゃあ、優勝者の報告流しますか？」

「それはいいだろ。毎年やってないし」
「表彰式は？」
「観客もういないから」
一人この場から置いていかれている弟の肩を芒野が叩いた。
「じゃ、来年はよろしく」
「は？」
「前年の優勝者は次のコンテストで優勝者に表彰状とか渡すことになってるから。女装で」
「ということは来年も…？」
「そう。来年も女装でコンテスト」
弟が音も立てずに倒れた。芒野やスタッフが呼びかけても返事をしない。

まあ、何はともあれ優勝おめでとう、弟。

第２１話　面白すぎる学祭　その四（後書き）

長い…。長かった…。

いつもの二倍でお届けのお姉様と弟クン。ようやくコンテスト終了です。

弟が優勝するところまでは予想出来たでしょうが、まさかこんな形で優勝するとは思わなかったでしょう。実は作者も予想してませんでした（笑）

次の予定は…タイトル未定ですね。お楽しみに。

第２２話　祭りの後はやっぱりこれ！？

「乾杯！！」
「「かんぱーい！！」」
大学近くの飲み屋で塚田やコンテストを手伝った面々が飲んでいる。
で、何を乾杯しているんだ。
「塚田、どうして俺たちは飲んでるわけ？」
ナレーションは塚田には聞こえないから弟が代わりに聞いてくれた。
「ん？なんでって、もちろん、学祭の打ち上げ。集計は出なかったけど、コンテスト俺たち頑張ったから」
弟はまだ優勝したということを塚田に言ってないのか。
「……」
来年には分かることなのだから、今言ってしまった方が楽だぞ。
「…あのさ…」
「あー、気にするな、斎藤！！集計の機械が壊れたりしなかったら、絶対お前が優勝だったって」
塚田が弟の背中をバンバン叩いた。いい感じに酔いがまわっているようだ。
「いや、だからな…」
「気にするなって！ほら今日は飲むぞ！」
弟の手にビールを持たせて、塚田はひたすら飲めと急かした。
人の話を聞いちゃいない。
仕方なく弟がビールをあおった。イッキ飲みをしようが酔わないのが斎藤家の特徴である。ちなみに弟と父親は強い程度だが、姉と母親はザルである。
「そんなに一気に飲んだら…」
心配そうに弟を見ているのが山村未姫（やまむらみき）。弟の隣でガンガン飲ませ

ている塚田は弟が酒に強いことは知っているので心配しない。
弟に酒が入るとテンションが上がってきた…塚田の。
「王様ゲームやらねぇ？」
上機嫌で塚田が声をかけるが、女子からブーイングが出る。
「塚田…お前…」
「なんだよ♪」
音符までつけたくなるほど上機嫌。
「合コンしたかっただけなんじゃねぇの？」
弟の鋭いツッコミに塚田が慌てて否定する。
「そ、そんなわけないだろ！！俺はコンテストが終わった打ち上げをだな…」
「合コンしたかっただけだろう？」
「だからそんな…」
「白状しろ」
「…すいませんでした」
姉も転がす弟の鮮やかな手並みに女子三人が拍手している。弟は両手を肩まで挙げて拍手を止めた。キザだ…。
「何か言ったか…？」
「え！？私たち何も言ってないよね？」
「そうだよ！！」
「そうそう！！」
三人が必死で機嫌を損ねたと思われる弟の誤解を解こうとする。弟もはっきり口に出してしまったことに気づき慌て出した。
「あ、いや…そ、空耳！！空耳だから！！」
そうそう、空耳。ナレーションが聞こえるなんて所詮は空耳。
弟が床を睨んでいる。そんな所に私はいないと何度言えば学習するのだろう。
気をとり直そうと弟が一度咳をした。
「とにかく、ここは塚田の奢りだから遠慮なく飲んでいいよ」
「は！？」

沈んでいた塚田が一気に浮上する。
「すいませーん！！ビール追加で！！」
「あたしもー」
「もし支払い足りなかったら、こいつに付けておいてくださーい！！もしくはここでこき使ってやってくださーい」
「承りましたー♪」
ノリのいい店員もいたものだ。
「お、お前、どんだけ飲む気だよ！？」
「気が済むまで」
塚田が再び撃沈した。
もう一度言うが弟はかなり酒に強い。なかなか酔わない。
「ねぇ、斎藤くんさぁ、ケー番教えてよ」
女子組のリーダー的存在、柿崎が弟に言った。もちろん皆、塚田は無視。ちなみにケー番とは携帯電話の番号のことである。
「俺…」
「あたしも教えてー」
「お…」
「赤外線で送っちゃえばいいよねぇ？」
「それが一番早いだろ」
ことごとく言葉を遮られる塚田であった。
「送信♪行った？」
「来た来た」
サクサクと女子組（だんだんとこの名前が定着してきた）二人と弟が番号を交換する。
「ね、ねぇ、私もいい…？」
遠慮がちに山村が弟に聞いた。弟はいつも通り軽く答える。
「いいよ。ほらケータイ」
赤外線で弟と山村も番号を交換した。
「俺は…俺には教えてくれない…」
「あー、もう分かったよ。教えればいいんでしょ？もし変なメール

送ってくるようならソッコーで番号変えるからね」
「う…分かった…」
こうしてやっと塚田も番号を教えてもらったのだった。

「そういえば、支払いよろしくね塚田くん」
「よろしくー」
塚田はしばらくこの飲み屋でタダ働きすることになるのだった。

第２２話　祭りの後はやっぱりこれ！？（後書き）

主役は弟のはずです。どんなに塚田が目立っていても。
次は通常の物語に戻って姉と弟だけでお送りする予定です。お楽しみに。

第２３話　こんな呼び方してはいけません

軽快な音がキッチンから聞こえてくる。いつものように弟が夕飯の仕度中である。いつも作っているのだから弟の趣味の欄は料理でいいと思う。そして将来立派な料理人になればいい。

「人の将来を勝手に決めるな、天の声」

姉はきっとその方が喜ぶぞ、弟。

「……」

うちのご飯はいつも出張料理人が作ってくれるの、とでも言いながら。

「恐ろしいことを言うな！！あり得そうで恐すぎる！！」

弟が包丁をまな板に叩きつけた。

そんなことばかりしているからまな板と包丁がすぐに駄目になるのである。

「八割がたお前のせいだろうが！！」

あとの二割は？

「姉貴のせい！！」

正論である。

そんなことを言っている間に姉が帰ってきた。

姉は鞄を部屋に投げ入れると、バタンという音を立ててソファに倒れこんだ。埃がたって弟が顔をしかめる。

「おい、姉貴。埃たてるなよ！！」

「……」

姉はうんともすんとも言わない上に、微動だにしない。姉らしくない。

「ちなみに天の声、姉らしい時はどう答えるんだよ」

しゅーちゃんがちゃんと掃除すれば埃のほの字も出ないわよ！！か、ところでしゅーちゃん、夕飯まだ？というところだろう。両方というのもありだ。

「よく観察しておいでで…」
観察と描写が出来なければ、ナレーションなど勤まらない。
弟がため息をつきながら夕飯を運んできた。リビングの方まで美味しそうな匂いが漂う。匂いを嗅ぎ付けて、姉がのそのそと移動してきた。
「しっかりしろよ」
「うー…」
唸っただけで、だらけた状態のまま箸を掴む。かなり疲れているのか？
「姉貴、疲れてるんだったらそのまま部屋行って寝れば？」
「うー…」
弟が姉の茶碗をどかそうとした。…動かない。よく見ると姉が茶碗をしっかり掴んでいて放そうとしない。今日のお姉様は一段と食い意地をはっていた。
「姉貴？」
どうした姉よ。夕飯は逃げていったりはしないぞ。
「なぁ、毎回思ってるんだけどさぁ。なんでナレーションなのに俺よりセリフが長いんだよ」
ナレーションの特権である。
「なんでもありだな…」
「心配してんの！？してないの！？」
確実に脱線し始めたところに姉がたまらずツッコミを入れた。
「ツッコミいれられるならもう大丈夫だ」
通常のツッコミ担当、弟が冷静に返した。姉が泣き崩れる（ふり）をする。
「ひどい！！ひどいわ、しゅーちゃん！！あの可愛かった頃のしゅーちゃんよ、戻ってきて！！」
「戻らねぇよ。てかいつまでも弟を間違ったあだ名で呼ぶ姉貴の方がひどいね」
弟は冷静なツッコミを手にいれていた。

演技派に疲れたのか姉がいつも通りに戻った。
「ちょっと聞いてくれない？」
「聞かないって言っても聞かすんだろ？」
「そうとも言う」
姉が夕飯を食べながら喋り始めた。
「うちの課のクソジジイがね……さば美味い…ムカつくんだけどね…さばもう一個ない？」
「喋るか食べるかどっちかにしろ」
「あら。この家の家賃を払ってるのは誰かしら」
「姉貴です…」
「この家では私が法律だから」
そう言いつつも、さすがに行儀が悪いと思ったのか姉が箸を置く。
「で、マジでありえないんだけど。あのクソジジイね、出先で自分がやった失敗を私のせいにするんだよ！？最低でしょ！？」
「へー」
弟は一言で済ませたが、きっと頭の中では姉を怒らせるなんて勇気あるなとか思ってるに違いない。ちなみに『クソジジイ』と姉が呼んでいるのは姉の上司である課長だ。ちなみにちなみに、課長は３０歳半ばである。
「で、姉貴はそのままほっといたわけ？」
ほっとくわけがないと言いたげな口調で弟が聞く。
「まさかぁ」
「やっぱりか…。仕返ししたのか？会議の書類を抜いたりとか？」
弟はさらっと黒いことを言った。
「そんなことしないわよ。それやったらまた部下の責任にするだけよ、あのクソジジイは」
大分怒りがたまっているらしい。
「で、具体的にはどのような…」
「苦いコーヒーをいれて愛想良く出す」
「それ、コーヒーの分量わざといれすぎたってバレバレなんじゃ…」

「甘いわね。うちの会社、コーヒーはインスタントじゃなくてコーヒーメーカーなのよ。コーヒーメーカーなら機械のせいに出来るじゃない。文句言われたら『コーヒーメーカーの調子が悪いんでしょうかね。修理に出してはどうですか？』って言えばそれ以上向こうは何も言えないわよ」

黒い。姉が非常に黒い。

「ちなみに…どうやって苦いコーヒーをコーヒーメーカーで…」

「一度出来上がったコーヒーを、本来お湯をいれるべきところに入れれば終わりよ」

黒い。どす黒い。今回の腹黒チャンピオンは姉で決定である。

ちなみにそんな方法で苦いコーヒーを作っていたら他の人が気づくのではと思うかもしれないが、断言しておこう。このお姉様に勝てる人間などそうそういないのである。

第２３話　こんな呼び方してはいけません（後書き）

予想外です。予想外なほど長いです。原因は弟と天の声の漫才ですけどね。書いてるうちに調子にのってしまうんでしょうね。

批評、感想、誤字訂正はいつでも受け付けています。あ、それと談笑会へのメールも。

第２４話　イタ電は大概に

弟は今日もソファに寝そべっていた。昼間は面白いテレビもなくかなり暇そうだ。
夕飯の準備でもしたらどうだ？
「姉貴が給料日だから外に食いに行こうってさ」
夕飯の準備すら出来ないわけか。
暇な弟がいるリビングの電話が鳴り出した。億劫そうに弟が立ち上がり受話器を取る。
「もしもし？」
「俺だよ」
「誰だよ」
「俺だって。お前の親友の…」
「俺の親友に『俺』っていう名前のやつはいない」
「ちょっ……」
ツーツー…。
弟は容赦なく電話を切った。
再び電話が鳴り出す。弟がため息混じりに受話器を取った。
「もしもし…」
「先ほどは申し訳ありませんでした、斎藤様。オレオレ電話風にかけたらどういう反応示すか知りたかっただけなんだよ」
「へー。で、どちら様？」
「え？気づいてるだろ？お前なら気づくって信じてる」
「そんなキショイことを言うのはもしかして苗字に『つ』が付く人？」
「そんな思い出し方はしないでほしいけど…俺が塚…」
「塚地？」
「誰だよ！！誰塚地！！」
「うるせぇよ。元七三眼鏡」

「その呼び名はやめ…」
ツーツーツー…。
さっきよりも容赦なく弟が電話を切った。
畳み掛けるようにまた電話が鳴り出した。弟がまた受話器を取る。
「今度はなんだよ！！」
「こちら、住宅販売の仕事をしております〇〇ですが、夢のマイホームはいかがですか？」
「セールスか…」
「は？」
「いえ、間に合ってます」
ガチャッ…。
弟はいっそのこと電話線を抜いてしまおうかという考えに取りつかれた。しかしそれでは姉からの電話に出られないので、結局ほっとくのであった。
弟がソファに戻ったタイミングで再び電話が鳴り出す。
「はい…もしもし…」
「もしもし？俊介か？」
聞き覚えのある低音が耳に届く。
「あぁ…なんだ父さんか…」
「どうした？随分疲れてるな」
「さっきからイタ電とかセールスとかかかってきてて…」
「お前も大変だな」
久しぶりにまともな人と喋った弟であった。
「何の用？」
「大学ももう春休み入るだろ？」
「ああ」
「帰ってこないのか？」
「春休みは短いからいいよ。帰るのも金かかるし。それに帰るって言ったら姉貴がうるさそうだし…」
「…すまんな」

「母さんは？元気？」
「……」
電話ごしにドタバタと駆け回る音が響いた。そして「鈴ー！！」
「違うよ。りんちゃんて呼んでー♪」という声も聞こえてくる。
「元気そうだな…」
「あぁ…」
「母さんに一応よろしく言っておいて。後、鈴にも」
「電話に出さなくていいのか？」
「……今、あの人に対処出来るだけの体力がない」
「そうだな…」

第２４話　イタ電は大概に（後書き）

短め！！比較的短く仕上げてみました。久々の常識人、父ネタです。今回は微妙に母も出演。でも、しばらく母を出すつもりはありません。弟と同じ理由で…。

感想お待ちしています！！

第２５話　大雨洪水警報が発令されました

「しゅーちゃん、迎えに来て♪」
「姉貴…今外大雨なの知ってるか…？」
外は生憎の大雨。台風が来たのではというほどの大雨。
「だから、傘ないから迎えに来てって言ってるの」
「うちには車とかないんですけど。ていうか俺、免許持ってないし」
「だ・か・ら、傘持って駅まで歩いて来て♪」
弟が深くため息をついた。
「バスとか乗ってくれば？」
「バス停から家まで遠いからその間にびしょ濡れよ」
「こんな天気で駅まで歩いて行ったら、俺の方がびしょ濡れなんですけど」
「育ち盛りの弟の食費は誰が」
「分かったよ！！分かりました！！迎えに行けばいいんだろ！？」
ガチャンと音を立てて弟が受話器を置いた。上着と携帯電話、自宅の鍵を持って玄関へと向かう。
姉を迎えに行くのだろうか。
「後でうるさいからな」
なるほど。弟というのは立場が弱いものだな。
「なんか言ったか…？」
もう一度言えというのか？それならば遠慮なくもう一度言うが。
「言わんでいい！！」
弟はふて腐れながら玄関の扉をバタンと閉めた。
「ふて腐れたっていうな！！」
弟に怒られた…。

大雨の中、弟は姉を迎えに駅へと向かった。ちなみに駅まで徒歩

２０分。いつもなら自転車で行く距離だが、こんな大雨ではそういうわけにもいかない。
「寒っ…」
傘一本でこの雨の中を歩いている弟の身体は徐々に熱を奪われていた。コンビニで一度休憩してはどうだろうか？
「天の声にしては名案」
私はいつも名案を提示しているつもりだが？
「そうですねー」
弟は軽く流してコンビニに入っていく。コンビニの店員はこんな雨で来る人はいないだろうと思っていたのか椅子に座って雑誌を読んでいた。
「あ…らっしゃい」
「八百屋か！？八百屋なのか！？」
そう言いたくなる気持は分かるが八百屋ではない。
八百屋的な挨拶をするコンビニの店員をほっといて、弟が雑誌をめくる。
「どんなご用でしょうか？」
店員の言葉に、弟が雑誌を元の場所に戻して振り返る。
「ちょっと待て店員。コンビニは普通そんなこと聞かねぇだろ」
「すいません。暇だったもので。何せこの台風の中、コンビニに足を運ぶ奇特な客はほとんどいないもので」
「…暗に俺が奇特な客だって言ってるよな。見ず知らずの店員さんは」
「いや、そんなことは…ないとは思います」
「その微妙すぎる否定はなんだ！！俺につっこむポイントを作ってるようにしか思えない！！」
作者の意図を感じるな。
「作者は誰だよ…」
言っておくが弟よ、私は天の声であって作者とは似ているが別人である。

「そうですか…」
「何一人で喋ってるんですか、お客さん。宇宙と交信でも？それとも禁止薬物中毒者じゃないですよね？」
「深入りするな、ただの店員。俺はお前には聞こえない声が聞こえてるだけだ」
間違ってはいない。
「え…？もしかして…幽…」
「深入りするな」
「了解しました。深入りせずに見守ってます」
店員は深入りせずに弟を見守っていた。雑誌をめくる弟をひたすら見ていた。弟の額に血管が浮かび上がる。
「何見てんだ…？」
「深入りせずに見守ってるんです」
「ウザイ」
雑誌をバサッと置いて弟はコンビニを出ていく。
「またのおこしをお待ちいたしましております！！」
「待つな！！」
自動ドアなのでバタンとはいかないが、弟としてはそうしたかったことだろう。
居心地の悪いコンビニを飛び出して、弟は再び大雨に熱を奪われながら駅へと歩き出した。手にはしっかりと傘が二本。一本は今さしている自分の傘で、もう一本は姉の傘である。強風に自分自身が飛ばされそうになっても傘は手放さなかった。
健気な弟だ。
「天の声、俺はいつでも健気だ」
その『いつでも』は一体いつのこと？
「……お前に付き合ってると駅まで着かなくなる」
弟はサクサクと歩き出した。
そしてサクサクと駅に着いた。
辺りを見回すと姉らしき姿はない。姉がいそうな喫茶店も覗くが、

姉はいない。
「どこにいんだよ…」
弟が何軒目かの喫茶店を覗いて舌打ちした時に、携帯電話のバイブレーションが鳴り響いた。弟が携帯電話を取り出す。
メールが一件届いていた。
ｆｒｏｍ：姉貴
Ｓｕｂ：しゅーちゃんへ♪
弟がメールを開いた。
しゅーちゃんがなかなか来ないから、タクシーに乗って帰りますｖ
（＾－＾）ｖ
……なんとお姉様らしい文章だろうか。
「あのクソ姉貴め…」
弟が悪態をついて携帯電話をしまった。
「なんのために俺がここまで来たんだと……ゴホッ…ゴホゴホッ…う……」
弟！？どうして弟！？
うめき声を上げて、弟が雨で濡れた冷たいアスファルトの上に倒れこんだ。二本の傘が弟の手を離れて地面に転がっていく。
倒れた弟にも雨は容赦なく降りそそいだ。
次回へ続く。

第２５話　大雨洪水警報が発令されました（後書き）

若干のシリアス的展開に俺もドッキドキ☆

すいません。コメディに書き飽きてシリアス的展開にした真犯人の朝比奈です。コメディよりもシリアス的な物が好きだったりするので許してください。

でもご安心ください。「お姉様と弟クン」はあくまでコメディですから、この後弟が入院して天国にさようならなんて展開には一切なりません。保証します。一切なりません。

さてさて次回はこの続きなようなあんまり関係ないような話をお届けします。次回はいつもと同じコメディ仕様ですよ。

第２６話　風邪はひきはじめが肝心です

静かだ。いつもうるさい斎藤家に似合わず、かなり静かだ。
「ゴホッ…ゴホッ…」
いや、そうでもないか。
本日は、姉は仕事でいないが、弟がいた。もうすでに春休みなのでいるのは問題ないのだが、遊びに行くのをキャンセルしてでも家にいた。その理由は…。
「ゴホッ…ゲホッゲホッ……」
もうお分かりいただけたであろう。弟は風邪をひいたのである。なんとも情けない。
「黙れ…頭に響く…」
黙れと言われても物語からナレーションが消えたら、ただの会話文である。
「……ゴホッ…」
弟が哀れなので、仕方がないから弟に聞こえない音声で話してやろう。
「…それはどうも…」
どういたしまして。と言っても、もう聞こえていないのだろうが。
さて、暇なのでどうして弟が風邪をひいたのか説明でもしよう。昨日、物語的には前回、大雨の中、姉にせがまれて傘を片手に迎えに行ったわけだが、駅の周りで姉を探してずぶ濡れになった弟の元に姉から無情なメールが届いたわけだ。その雨の中、疲労困憊の弟は倒れたが、なんとか自力でタクシーを拾った。そしてずぶ濡れで帰った弟は次の日、つまり今日熱を出して寝込んでいる。
まあ、自分のせいで弟が熱を出したということにさすがに気づいている姉は責任を感じて仕事を休むと言い出したが、弟が大丈夫だからと言って仕事に行かせた。もちろん、この時の弟は「心配をかけてはいけない」などと考えたわけではなく、「姉貴に看病された

ら余計ひどくなる！」と思っていたわけだが。
一人で延々と喋っているのは疲れるので弟に聞こえるように話してもいいだろうか？
「…出来るだけ声のトーンを落として話してくれるなら…」
承知した。
ところで弟よ。階段を誰かが上ってくる音がしないか？
「階段、どれだけ遠いと思ってるんだよ…」
その足音がこの家に近づいてきた。3歩、2歩、1歩。弟よ、呼び鈴が鳴るぞ。
「は？」
ピンポーン。
「マジかよ…」
ピンポーン。ピンポーン。
「誰かいませんかー？」
弟、出て行かないのか？
「無理。動けない」
弟が動かなくても、鍵は独りでに開くのだが。
「なんだよ。ドア開いてんじゃん」
不法侵入者らしき者が入ってくる音がした。
「閉めておいたはずなのに…」
ナレーション・マジックである。
「んな、馬鹿な…」
「お邪魔ー」
いつものように軽いノリであの人、いやあれが不法侵入した。
「この声はまさか……！！」
そのまさかである。
「えー…うー……雰囲気的にこっちかな？あ、大当たり」
「マジかよ…」
嘘でも冗談でもなく、塚田孝司（たかし）本人である。ちなみに弟の『マジかよ…』は本日二回目である。

「なんだよ、その反応は。もっと喜べよ」
「どうしてお前が…」
「風邪ひいたって遊びに行く予定をドタキャンしたから見舞いに来たの！！」
弟は塚田と一緒に遊ぶ予定だったらしい。まあ、塚田でよかったな。
「で？風邪はどうよ？」
「お前がいると余計ひどくなる」
「…わざわざ見舞いに来てやった友人にそれはひどくないか…？」
「そう思うならさっさと帰れ。風邪うつったら面倒だろう…ゴホッ…」
いつになく優しい言葉をかけた。
「…風邪うつったら『斎藤にうつされた』って騒いで同情票を集めようとするんだから俺が面倒だろ？」
塚田に対してそんなに優しい言葉をかけたくなかったのか。
「…さすがに俺、そこまではやんないよ…」
塚田が寂しそうに呟いた。哀愁が漂っている。
「まあ、ともあれ来たんだから飯ぐらいは作ってやろう！」
たった一行で立ち直る辺りが塚田だと思う。
「別にいい…」
「遠慮するなって！これでも一人暮らししてんだからそこそこ自信があるんだ！」
「い…」
「あー！！お前は寝てろって！大丈夫！『ここは戦場か？』って状態にはしないから」
そう言うと塚田は弟を残してさっさとキッチンへ向かった。
普通ならばここから塚田の料理風景などを書くところだろうが、そんなものに無駄な行を使うのはもったいないので、塚田がキッチンから戻ってきたところから書こう。

「じゃじゃーん！たーまーごーがーゆー！！」
鍋の蓋を取ると出てきたのは普通の病人食だった。姉の料理のような悲惨さはない。かといって特別美味しそうなわけでもない。
「なんで…２１世紀から来た耳がない猫型ロボット風？」
「あの青いやつな。そんなこと気にするなよ。さぁ食ってみろ」
粥をすくったれんげを塚田は弟の方に差し出した。弟が露骨に嫌な顔をする。分からないでもない。
「…自分で食うから」
「いや、自分で食うって言って鍋ひっくり返したら大変だろ？ほれ口開ける」
弟は頑なに口を閉ざしたまま塚田を睨んだ。塚田はにこにこと笑いながられんげを構えている。
そこへ…。
「しゅーちゃん、まだ生きてる！？」
会社から真っ直ぐ帰宅したと思われる姉が弟の部屋に飛び込んできた。
驚いた塚田の手かられんげが滑り落ちる。そして熱々の粥が入ったままのれんげは床に落ちた…りはせずに布団から出ていた弟の手に粥を掛けた。
「熱っ！！」
「わ、悪い！！」
「キャー！！水！氷！？それともアロエ！？」
姉が現れただけで大惨事である。ちなみに火傷には流水が正しい。
「…お前らこの部屋から出ていけ！！」
塚田と姉は部屋から追い出された。
そして弟は、自分で火傷の治療をし、自分で溢れた粥を拭き取っている。結局はいつもと同じぐらい働いてしまうのであった。
「…天の声も出ていけ…」
私もなのか！？

第２６話　風邪はひきはじめが肝心です（後書き）

風邪をひいても弟は働かないといけないんですよね。そんな弟がさすがに哀れになってきました。

この回は天の声が色々と…すごいことをしてくれましたね。ナレーション・マジックって何！？って作者も思いました。

第３０話で、『第一回談笑会』をやる予定なので、疑問質問など何でも送ってください。もちろん面白いペンネームを書いて（笑）

第２７話　人間て生物学上何に分類されるんだろうね

「シンデレラってさぁ…本当にあった話なのかな？」
「は？」
姉の謎の発言に弟が呆れた顔をしている。姉が不思議なのはいつものことであるが。
「姉貴、頭大丈夫か？」
弟が本気か馬鹿にしてるのか姉の額に手を当てる。
姉が読んでいた本をソファの前にあるコーヒーテーブルに置いた。そして弟の手を叩き落とす。
「別に熱があるわけじゃなくて、シンデレラの話って本当にあったら素敵だと思わない？」
「どこらへんが？」
継母が子供を苛めるという意味なら今あるかもしれないが、素敵ではないだろう。
「文句も言わずに従ってれば、魔法使いが出てきて王子様と結婚出来るんだよ！？中世の玉の輿だよ！？」
「姉貴には無理だ」
会話を無視して弟が吐き捨てた。
「まず、絶対に継母に従わないだろ？」
弟が指を一本立てる。
「魔法使い来ても１２時までってところに文句を言うだろ？」
弟が中指も立てた。
「王子と会っても馬鹿にして終わりだな」
弟が三本指を立てて姉に突き出した。
「一番重要なのはそこじゃなくて、魔法使いが出てくることよ！！」
「ほお」
弟が腕を組んで仁王立ち。
「現代に魔法使いがいたらすごいじゃない！！いいことじゃない！

！欲しい物があったら出してくれるのよ！？」
「いねぇよ」
「そんな夢のないこと言わないの、しゅーちゃん！！もしもの話だから！！しゅーちゃんも家事しなくて良くなるのよ！！」
弟がフンと鼻を鳴らした。完全に馬鹿なする姿勢だ。
「もしもこの家に魔法使いがいたとしたらな、俺が家事とか頼む前に姉の頼み事で魔法使いがヘバってるんだよ！！」
ありうるな。姉だから。
「二人ともひどくない！？それに魔法使い的な人なら現に存在してるじゃない！！」
「どこに？」
「ここに！！」
姉が空中を指差した。
「…誰もいねぇよ」
仁王立ちのまま弟がツッコミを入れた。
「いるじゃない！！天の声が！！」
私か！？
「人間かは知らないけど、魔法使いじゃないだろ」
「前回とか、色々不思議現象起こしてたじゃない！！」
あー…ナレーション・マジックか…。
「けど魔法使いじゃないだろ」
「じゃあ天の声は何者なのよ！！」
「地球外生命体だろ？」
地球外ならここにまずいないから。一応人間には属してるのである。
「どこが！？」
人間科ナレーション目という生物である。
「あるかぁ！！そんな変なもん！！」
そんな事は横においといてだな、シンデレラなら弟だろう？
「なんで俺？」

姉にこき使われて家事全てを受け持ってるところが。
「あー…だったら姉は…」
義姉だな。
「やっぱり姉貴は姉のままか…」
だろうな。
「もー。そんなこと言わないでよ！！私もヒロインになりたいの！！中心にいたいの！！義姉なんて意地の悪い脇役じゃなくて！！」
姉はいつでも中心にいると思う。弟を巻き込んで。
「天の声うまい！！」
弟が親指を立てて同意した。
「うまくなーい！！」
姉が怒鳴った。
ところで姉よ。突然シンデレラという話題を振ったからには、さっき読んでいた本がシンデレラだったりするのか？
「ううん。これは金太郎」
「関係なくねぇ！？」
♪まーさかり担いだ金太郎ー♪
「天の声、歌わなくていいから…」
今日も今日とて弟はどっと疲れているのだった。

第２７話　人間て生物学上何に分類されるんだろうね（後書き）

果たして俺は何が書きたかったのか…。謎です…。

第２８話　腹黒いのは治りません（前書き）

前回の話を反映したシンデレラパロディになっています…（多分）

第２８話　腹黒いのは治りません

「シンデレラー！シンデレラー！」
義姉役弟が布を片手にシンデレラを呼んでいる。本来弟は男だが義姉役なので今は女ということにしておいてほしい。
「はぁい。何かご用ですか、お義姉様？」
シンデレラ役の姉が走ってきた。明らかに姉弟でいつもと立場が逆だがそれは目を瞑っていただきたい。
「シンデレラ、この服を繕っておきなさいって言ったじゃない…の。今日舞踏会に来て行く服がないだ…じゃない」
弟の必死の女言葉は若干無理があった。
「申し訳ございません、お義姉様。でも…いっそ買い直した方が確実なんじゃない？」
義姉に従う気のない姉…ではなくシンデレラはすでに化けの皮が剥がれかけていた。ボロボロな服を着ていても、頭にそれらしく頭巾をかぶっていても姉は姉だった。
「…シンデレラ、お…私はこの服で舞踏会に行きたいの。今すぐ繕って…ちょうだい」
義姉役の弟が心底嫌そうな顔をしながら女言葉を使う。
「今からやっても舞踏会には間に合いません。他の服を着て行ってください」
どこまでも反抗的なシンデレラだった。
「…しょうがないわね…。私が帰って来るまでに掃除洗濯炊事全て…やっておいてね…」
ごり押しの出来ない義姉だった。

そして義姉が舞踏会に行った後。
「家事が全部出来たら奇跡よ。そんな素直にやるわけないじゃない」
シンデレラの化けの皮は完全に剥がれいた。

「しかもなんで連れ子の言うことを聞かなきゃいかないわけ？この家はもともと私の家なの。ひょっこり家に来て威張り散らしてんじゃねぇよバーカ」
シンデレラの腹黒面があらわになっていた。
「もしもし、そこのお嬢さん」
窓を誰かが叩いている。姉シンデレラは完全に無視している。
「そこの綺麗なお嬢さん」
やっとシンデレラが立ち上がり、窓を開けた。窓の外には塚…魔法塚いが立っていた。漢字は間違っていない。
「誰？」
「ホホホ、私は心優しい魔法塚い。シンデレラ、あなたの願いを叶えて差し上げましょう」
胡散臭さで言えばハマり役だが、ワザワザ女言葉にする必要はないのではないだろうか。というか自分で心優しいとか言っては台無しだと思う。
「願い？なんでもいいの？」
姉シンデレラは願いという言葉に反応した。
「もちろんよ、ホホホ」
笑うところがおかしい魔法塚いは長い杖を引っ張り出した。
「さぁあなたの願いは何？お城の舞踏会に行きたいのよね？」
「馬鹿親子を追い出して」
「はい？」
「聴こえなかった？うちに住み着いた害虫をどうにかして。魔法塚いなら出来るでしょ？」
「いや…人間には住居に住むという権利がですね…」
「出来ないの？」
「人間の権利は侵害してはいけないわけで…。簡単に言うと追い出すのは無理です」
「じゃあ追い出す以外は？私と立場を逆転するとか」
「…出来ないわけじゃないですが…本当にあなたシンデレラ？」

「私以外のどこにそんな可哀想な名前を付けられた女の子がいるのよ？」
「…わかりました。立場を逆転して差し上げましょう」
魔法塚いでも姉…ではなくシンデレラには勝てなかった。
「それと…」
「まだ何か？」
健気な少女だと聞いていたに違いない魔法塚いは早くも帰りたそうな顔をしている。
「あなたの魔法は便利ね」
「…え？」
「雑用としてこの家に居座りなさい」
「マジで！？」
こうして魔法塚いもシンデレラの魔の手から逃げられなくなるのであった。

「っていう夢を見たの」
のんびりと姉が言った。
「夢の中でも俺は姉貴に勝てないわけ！？」
というか姉がシンデレラだと腹黒すぎないか？

第２８話　腹黒いのは治りません（後書き）

前回のやつを書いていてですね、これはお姉様と弟クンのシンデレラパロディを読んでみたいと思いまして、このような書き方に。

しかもあえてハマり役な弟と姉を逆にして。天の声はそのままですけどね。名前を完全に出さなかった魔法塚いはもう誰だかお分かりでしょう。

あり得ないことはしないというのがモットーな小説ですから、夢オチということで。

第２９話　友達っていうのの枠が分からないよね

今日も弟が夕飯を作り、弟が食器を片付けていた。姉はソファに座り、クッションを抱えてテレビを見ている。
弟よ、かなり突然だが、質問してもいいか？
「なんだよ」
塚田以外に友人はいないのか？
「……」
「そういえばそうよ！！友達いないの！？」
ソファでくつろいでいた姉も会話に参加してくる。
「いるよ。健とかよくうちに遊びに来てただろ？」
「そうじゃなくて、こっち来てからの友達！！本当に塚…塚……なんだっけ？」
姉は弟の友人Ａの名前を忘れていた。
「とにかく！！一人しか友達いないの！？」
「いるって。大学に何人か…」
女子はカウントするなよ？
「……」
図星か？
「女友達しかいないって…このモテモテ！！」
罵倒の言葉がおかしい気がする。
「図星じゃない。モテモテでもない。そんなにモテるなら毎日、夕飯の仕度は出来ないから」
「じゃあ、友達いないの？」
「いるって。男の友達もちゃんと。ただ塚田のインパクトがありすぎるだけだ」
それは…納得である。
「えー…本当に？」
「本当」

「嘘じゃない？」
「…姉貴、なんでそんなに疑うんだ」
「友達いるならもっと遊びに行ったりするもんじゃないの？」
姉の痛恨の一撃が決まったー！！弟、スポンジを持ったまま絶句！！と思ったら口を開いたぞー！！
「天の声、うるさい。てか、なんで実況なんかやってんだ」
ノリで。
「ノリで実況するなよ、ナレーションが」
一応人間に属しているので許してほしい。
「天の声がナレーションを放棄するのはよくあることだからほっといてあげて。それより本当に友達いるっていうなら証拠を見せてよ」
姉が立ち上がって弟と向かいあった。何故かクッションを抱えたまま。
「証拠？」
弟は姉がクッションを抱えたままということにツッコミをいれない。
「そう、証拠。裁判官！！証人を召喚する許可をください！」
「証人！？」
許可しよう。
「天の声が裁判官かよ！」
この物語の中では私が法律だ。
「……」
「ほら、しゅーちゃん、早く塚林くん呼んで」
「……」
弟はケータイを出して、塚田の電話番号を出す。そして本当に呼ぶのかと言いたげな目で姉を見た。姉ははっきりと頷く。
発信してケータイを耳に当てると、数回のコール音の後に塚田が出た。
「……もしもし、塚林？…塚林じゃないって？そんなの知らねぇよ。姉貴が呼んでるんだけど……レポートはちゃんとやれよ。じゃあな」

弟が電話を切ったところを見計らって姉が聞いた。
「来るって？」
「『お姉様のお呼びとあらば明日提出のレポートが終わらなくても行きます』ってよ」
さすが塚田だ…。

ということでどうしたらそんなに早く来れるんだという早さで塚田がやってきた。
「遅い」
「えー！？どんだけチャリ飛ばしてきたと思ってんの！？」
「知らん」
弟は塚田に対してどこまでも冷たかった。姉といる時とはノリが違う。
「突然呼び出しごめんね、塚林くん」
「塚林じゃなくて塚田です、お姉さん」
「あっ、そうだっけ？塚原くん、早速質問があるんだけどいいかな？」
「塚原でもなくて塚…」
「塚原、名前のことなんか気にしてたら朝になるから。姉貴、質問するならさっさとしてくれ」
弟はどう見てもわざと間違えているのであった。
「しゅーちゃんに友達がいるのかってことが議題になって」
塚田が自分を指して弟の方を見た。弟は右手を振って否定する。
塚田は落ち込んだ。
「それで、大学が一緒な塚原くんなら知ってるかと思って」
「俺に友達がいるってことを証言してくれよ」
「え？いないだろ？」
塚田の逆襲かのような返事に弟は言葉を失った。
「俺をカウントしないならいないよな」

「仕返しか…？」
「違う違う！！」
塚田が慌てて首を振った。
姉はソファにもたれて、事の成り行きを見学している。
「だってお前、まともに喋らないから」
「友達はいるだろ」
「『うん』とか『別に』しか言わないで友達が出来るか！？友達だと思ってるのはお前だけだから！！」
「……」
姉がクッションを抱えて、暇そうに話しかけてきた。
「結局結論は？」
弟には塚田以外にまともに喋る友人はいない、ということだろうな。
「そっか。しょうがないね、しゅーちゃんだし」
弟だからな。

第２９話　友達っていうのの枠が分からないよね（後書き）

弟って友達いなかったんですね…。寂しい人だ…。

次回はなんと第３０話！！ということで「第１回談笑会」をお届けします。

第３０話　第１回談笑会（前書き）

今回は談笑会なので、ゆるゆると。天の声の代わりに地の文は作者でお届けします。

第３０話　第１回談笑会

「…ら姉貴はだめなんだよ。もっと…」
弟クン！！もう談笑会始まってますよ！！
「うぇ！？」
「こんにちは！もしくはこんばんは！第１回談笑会へようこそ！司会進行兼ボケ役のお姉ちゃんです」
「始まってることに気づかなかった弟です。てか姉貴、自分でお姉ちゃんて言ってることが痛い」
「だって呼んでくれないんだもん」
すいませーん。私に挨拶させないつもりですか？
「どうぞどうぞ」
天の声なようで天の声とは別人な作者です。
今回も早速、届いた質問に答えて行きましょうか。
「はーい」
「司会進行って姉貴じゃなかったっけ？」
気にしちゃいけないよ、弟クン。
まずはこちらから。
「ペンネーム『一家に一台弟クン』さんから」
「俺は家電製品か！？」
「まぁまぁ。『塚田って本当にあんなに変なんですか？１６話の時みたいに』だって」
１６話っていうとコンテスト前の大学でのひとこまですね。どう思いますか、弟クン。
「塚田はもとから変だ。初回から変人オーラ出まくりだった」
「そうだっけ？どうなの、作者」
えー…うー……塚田は…初回の時の変さが通常です…。回を重ねるごとに変さが増してきまして…。エスカレートして行って…現在に至る。

「１６話は作者が塚田の暴走を止められなかっただけらしい。以上！次！」
「ペンネーム『家政婦に弟が欲しい』さんから」
「だからなんでみんなで家政婦とか電化製品とか便利な道具的な扱いなんだよ！！」
「しゅーちゃんだからでしょ？」
そんなこと言ってないでさっさと質問に行ってください。
「はいはい。『弟は大学で何を習ってるんですか？栄養学？』」
「俺が家事ばっかりやらされてるからって誤解しないでください。正解は経済学。栄養学じゃありません」
なんで経済学なんですかー？
「それは経済を勉強して会社でも上になるため……って作者は知ってるだろうが！！」
読者様から聞かれそうな質問を代弁しただけですよ。
「経済学じゃなくて栄養学にすればよかったのに」
「なんでだよ」
「そうしたら栄養も完璧で美味しいご飯が毎日食べられるじゃない！！」
「…じゃあもう明日から俺、作らなくてもいいよな？経済学だから」
「待ってー！！ごめんね、しゅーちゃん！！」
姉弟コントしなくていいからさっさと次に行きましょうや。
「…作者…丁寧語が保てなくなってるぞ」
丁寧語に飽きたんです。
「作者ぁ…」
しょうがないじゃないですか。いつもざっくばらんに生きてる人ですよ？
「作者の化けの皮が完全に剥がれる前に次に行きましょう。ペンネーム『一輪車で世界一周』さん。…一輪車でどうやって海越えるんだろうね」
「がんばれ。影から応援してる。あくまでも影から」

海超える時は普通に船とかに乗るんじゃないですか？
「そっかぁ。そうだよね」
「今の問題はどうやって海を越えるかじゃねぇから。さっさと質問も読めよ、姉貴」
「俊介…なんで命令口調なのかな？」
「口が滑っただけです。読んでください、お姉様」
「『弟に彼女はいないんですか？いないのなら出来る可能性はあるんですか？』」
「この質問は俺に対するイジメか！？ここの読者はみんなそんなやつばっかりなのか！？」
プチ乱心中の弟に代わり、私がその質問に答えましょう。現在彼女はいません。いたこともあるんですけどね。ですよね、お姉様？
「そうそう。前にいたんだけど、いつの間にか別れてたんだよね」
「あーねーきー…！！それ以上喋ったら、その口縫い止める！」
別れた過去は思い出したくないようですね。ではいつか弟が別れた時の話でもしましょうか。
「やめろ！！天の声！！」
残念。今は作者です。
さあ次に行きましょうか。
「作者の反省部屋」
へ？そんなコーナーありましたっけ？
「色々謝罪しないといけない作者のための反省部屋」
お、弟クン！？仕返しですか？
「謝罪することがないとは言わせない」
弟クン…笑顔が黒い…。
「はいはい。まず、前々回のシンデレラ編については？」
…ネタが思い浮かばず…勢いで書きました…。
「へー。そう。じゃあなんでここ最近、動きっていうのがないのかな？」
動きとは…？

「毎回家の中。部屋を移動することもなくずっとリビングにいるんですけどね、俺達」
…ちょっと壁にぶつかりまして…。
「壁があったらぶっ壊せ」
いやあのね…せめてどんな壁か聞いてくれませんか？
「しゅーちゃん、天の…じゃなくて作者イジメちゃダメだよ。さらに哀れな扱いになってくよ？」
「天の声が？」
「しゅーちゃんが」
「……」
「さあ、どんな壁か言ってみて」
お姉様の方が怖…なんでもないです。
名前の壁に阻まれまして。
「名前？塚…なんとかの？」
いや、そいつは眼中にもないんですけどね……問題はお姉様の名前でして…。
「何故か作者が出し惜しみしてる姉貴の名前？姉貴の名前は…」
それ以上言ってはいけません！あとの楽しみがなくなる！
「だから壁にぶつかるんだろうが」
出し惜しみしてたらいつ出せばいいんだか分からなくなりまして…。そうしたら、お姉様の名前が分かるようなネタを避けるあまり壁にぶつかりました。
「アホ作者…」
ひどくないですか！？
「私の名前ならすぐに出せばいいのに。よし、次回私の名前発表ってことで！」
え？そんな急に言われても…。
「文句ある？」
いえ、ございません、お姉様。
「ということで次回、お姉様と弟クン第３１話でついに姉貴の名前

を発表」
斎藤家の命名裏話は（忘れなかったら）第２回談笑会でします。
「次回の談笑会は５０話でやろうと思います。作品に関する疑問質問を談笑会宛てに送ってください」
「ペンネームも忘れずに」
「それじゃあ、次回、第２回談笑会でまたお会いしましょう！！」

第３０話　第１回談笑会（後書き）

ということで次回、ついに姉の名前を発表。
それにしても今回は随分すっきり談笑会がしまりましたね。

第３１話　よく考えるとこの家は電話かかってきすぎ

プルルルル…。

自宅の電話が鳴りだし、大学から帰ってきたばかりの弟が受話器を取った。夕飯の準備中だったので薄茶で無地のエプロンをしたままだ。いっそ可愛い花柄のエプロンとかしてしまえばいいと私は思う。

「……」

無言で弟が肘を軸にして手を横に振った。『なんでやねん』と言いたいのだろう。しかし、ツッコミを入れる相手が実体がないので意味不明である。

「もしもし、どちら様ですか？」

私のことは無視をして弟が電話の相手に言った。

「……ぁ…だ……ど……」

電波の状況が悪いのかまともな言葉が聞き取れない。

弟は聞き取るのを諦めて次のように言った。

「おかけになった電話番号は現在使われておりません。またおかけ直しください」

電話が通じない時の文句が色々混ざっていた。現在使われていないのなら、かけ直しても無駄である。

カチャッと受話器を置いて弟が呟いた。

「…珍しく正論だ」

珍しくとはなんだ。ナレーションはいつも正論になるように喋るものである。

プルルルル…。

弟がツッコミを入れる前にまた電話が鳴りだした。このままでは夕飯が作れない。

「もしもし？用件は手短にお願いします」

相手の名前聞くよりも先に言うことではない。

「さっきは悪かったな、俊介。電波が悪かったんだ」
「なんだ、父さんか。なんの用？俺、夕飯作らないといけないんだけど」
父親に対してもそれを言うのか。
「……お前が作らされてるのか…」
妙に悟ったような口調で父が言った。
「……あの姉貴だから…」
「そうか…」
「で、なんか用？」
「実は一週間後にそっちの方に出張が入っててだな、ホテルとか取るのも面倒だからそこに泊めてくれないか？」
「俺は別にいいけど、姉貴に聞いてくれよ。家の所有権とか全部姉貴にあるから」
よく姉が主張しているな。
「それと父さん、姉貴がいいって言ったらの話だけど、めしは？」
少し考えてから父が答えた。
「事業所の連中に連れ回されるだろうから朝だけあればいい」
「りょーかい。どうせ俺が作るんだろうから」
「少しは手伝うさ」
はっきりと、きっぱりと父が言った。姉や妹ではこうはならない。弟は確実に父親似だ。
「…父さんの損な性分を受け継いだんだろうな…俺」
「……」
母も姉も知っているからこそ、父は黙った。父もきっと弟と同じような目にあっていることだろう。
「…紗弥加は？」
「さ、やか？誰？」
「おいおい。俊介、お姉ちゃんの名前を忘れたのか？」
呆れたように父が言った。
弟にすら忘れられているが、姉は本名を斎藤紗弥加という。今現

在、姉を名前で呼ぶのは父と母だけである。
「あぁ…誰も呼ばないから忘れてた」
「…まぁいい。紗弥加に代わってくれ」
「姉貴ならまだ…」
「たっだいまー！」
「…今帰ってきた」
凄くいいタイミングで帰ってくるものだ。さすが姉。
「何がさすがなの？」
ソファの上に鞄を投げて姉が聞いた。弟は受話器を姉に突き出した。
「父さんから」
「電話？」
わけも分からぬまま姉は受話器を受け取った。
「もしもし？…うん。紗弥加だけど」
姉は立っているのが面倒になったのか、椅子を持ってきて座った。
「天の声」
なんだ、弟。
「なんで姉貴の時はこっち側の会話しか出さないんだ？俺の時は父さんの声も入ってただろ？」
その方が面白いと判断したからである。
「そうですか…」
そうですよ。
「えー…じゃあ３５００。…うーん、お父さんだから３０００でいいや。じゃあね」
ガチャッ。
姉は受話器を置いて、椅子を元の位置に戻した。そしてソファにどっかりと座って、弟に一言。
「お茶」
「お茶ぐらい自分でいれろ」
「しゅーちゃん、お茶をいれてくれないかなぁ」

「しゅーちゃんじゃないし、姉貴の召し使いでもないから拒否する」
「えー。しゅーちゃんのイジワル」
「俊介だから。ところでさっき３５００とか言ってたのは何？」
一瞬考える素振りを見せてから姉が満面の笑みを浮かべた。
「二泊三日の宿泊代の交渉！」
父に対して！？
「道徳的に問題あるだろ！！」
「大丈夫！親料金で３０００円まで値下げしたから！！」
「どこが大丈夫！？」
姉は父に対して容赦というものを持ち合わせていなかった。
「失礼ね。ちゃんと値下げしたじゃない」
「親から金取るなよ！！」

第３１話　よく考えるとこの家は電話かかってきすぎ（後書き）

やっと姉の名前が公開されましたね。紗弥加というのですよ。
１、２回別の話を挟んだら、父、ようやくの初登場となります。
のんびりと作中で唯一のまともな人物と言っても過言ではない父の登場を待っていてください。

第３２話　季節外れの鍋パーティー

サバとアジのパックを持って弟はものすごく吟味していた。今日の夕飯の買い物中である。

「サバとアジどっち食べたい？」

弟よ、私は節食行動は出来ないのだ。聞いても無駄である。強いて言うなら刺身が食べたい。

「却下」

…なんのために聞いたんだ…？

「今日はサバとアジが安いから選択肢は二つしかない」

…それなら両方買って、片方明日食べては？

私の言葉に頷いて、弟は買い物カゴに両方ほうり込んだ。…ナレーションの役割は助言することだっただろうか。

「別にいいだろ。ナレーションだろうが、人間じゃなかろうが、天の声は話しかけすぎなんだから」

弟に言われるのが一番不服である。

ブー…ブー…。

何かが鳴っている。決してブタの鳴き声ではないと主張しておこう。

「もしもし？」

何かと思ったら弟のケータイだった。

「あー…お前かよ…」

『名前見てから出ろよ』

相手はしょっちゅう名前を間違えられるあの人だった。私もあえて名前は出さない。

「何か用？」

『今日暇？』

質問に質問で返されて弟が不機嫌になった。

「今、夕飯の買い物中」

『鍋パーティーしようぜ』
「…季節を考えろ。夏だから。鍋は冬に食え」
『じゃあチゲ鍋』
「辛くしてどうする！！なんの解決にもなってない！！」
『えー。斎藤は何なら許せるわけ？』
「…そうめん？」
『……それでパーティーは無理』
弟がカゴに入れたサバとアジを戻した。夕飯を作るのはやめたようだ。
「じゃあ鍋でいいよ。買い物中だから材料買ってく」
『サンキュー』
「…割り勘だからな。ところで材料何人分買えばいい？」
『二人？』
「……」
『お前のお姉さん呼んで三人？』
電話の相手はまだ誰も誘っていないようだ。しかも姉を呼ぶところを見ると呼ぶ気もないようだ。
「…姉貴は今日飲み会だ」
『男二人で寂しく鍋つつくか』
「…二人じゃパーティーじゃねぇよ。他誰もいないのか？」
『んー…じゃあ三人組呼ぶか』
「学祭の時の？」
『そうそう。あの女子三人組』
「連絡先知ってるか？」
『なんとか聞いた』
「じゃあ連絡よろしく塚本」
『塚本じゃなくて塚…』
ツー…ツー…。
弟はジーンズのポケットにケータイをしまうと買い物を再開した。
今度は自分の分の夕飯の材料ではなく鍋の材料をカゴに入れていく。

タラをカゴに入れてから野菜を入れてないことに気づき、もと来た道を戻ろうと振り返ると女性が思いきりぶつかってきた。お互いにしりもちをついく。
弟は素早く立ち上がり、しりもちをついた女性に手を差し出す。
「すいません。大丈夫ですか？」
「ごめんなさい。こっちがよそ見してたから」
素直に謝りながら女性が弟の手を借りて立ち上がった。そして弟の顔を見て「あっ」と呟く。そういえばこの人…。
「…どっかで見た気がするけど、誰だっけ？」
おいおい…。覚えておいてやれよ…。
「山村です。学祭の時の…」
数少ない弟の友人だった。しかも弟が忘れても何も言わないあたりが弟の友人である。
「あぁ！！三人組の一人か！！そういえば塚田から連絡いった？」
「連絡？いえ…何も」
「塚田の家で鍋パーティーするけど、参加する？」
「え？それは私なんか行っていいんでしょうか？」
山村がそう言った時に彼女のケータイが鳴り響いた。山村が慌ててケータイを出して画面を見る。
「あ、塚田くんだ…」
「貸して」
明らかに何か企んでいる笑顔で弟が山村からケータイを受け取る。そして通話ボタンを押した。
『あ、もしもし？山村さん？俺、塚田だけど…』
「……」
弟は笑顔のまま、何も答えない。弟が何を考えているのか分からない山村がオロオロしだした。
『聞いてる？山村…美姫さんですよ、ね？もしかして俺間違い電話！？知らない人のとこにつながってます！？もし間違えてたらごめんなさい！！ていうか、もう誰でもいいからなんか答えてください

！！』

プチパニックに陥った塚田の声を聞きながら、弟はまだ笑っている。さすがに私も弟が何をしたいのか分からなくなってきた。

「さ、斎藤くん？あの…塚田くんパニックになってませんか？」

意外と耳のいい塚田が山村の声を聞きとった。

『山村さん！？よかった！間違ってなかった！ていうか、随分と声が遠い気が…』

「Ｈａｌｌｏ！Ｍｒ．Ｔｓｕｋａｄａ．Ｗｈａｔ　ａｒｅ　ｙｏｕ　ｄｏｉｎｇ　ｎｏｗ？」

流暢な英語が聞こえた。もちろん、弟の口から。

『え、英語！？山村さんじゃないし！！誰！？あー……フー！いや、ワット！？なんか声に聞き覚えある気がするけど…英語なんか喋れるかー！！』

キレた塚田が勝手に電話を切った。弟がニヤリと笑う。英語が分からない塚田をパニックにさせて、自分から電話を切らせるのが目的だったようだ。

ケータイをオロオロしている山村に返し、弟は食材を全て棚に戻した。鍋の材料はどうするんだ…。

「さてと。電話の声が誰だか、塚田が気づいて俺に電話かメールしてくるまでそこらへんでお茶して待ってるか。山村もどう？」

「え！？…塚田くんに悪いんじゃ…」

「問題ない。塚田だから」

「でも、気づかなかったら…」

「気づく」

何故なら塚田だから。

オロオロしっぱなしの山村を引っ張って弟はスーパーを出ていった。

そしてやっと声の主に気づいた塚田が慌てて電話をしてくるのは

1時間後の話。
そしてそして、そのネタで女子三人組の残りの二人、柿崎と葉賀から塚田が散々からかわれ、ぐれた塚田が自分の家なのに『出てってやるー！！』と言いながら飛び出していくのはさらに数時間後の話である。

第３２話　季節外れの鍋パーティー（後書き）

ほぼ二ヶ月ぶりです。すいません、サボり続けてみた作者です。
実はこの話…最初は買い物に行った弟が家に帰ると父が玄関先にちょこんと座って待っているという設定だったのですが、途中で鍋の話に…。本来なら弟が鍋奉行って話になる話だったのに、それるそれる（笑）それまくった結果がこの話です。
次回は今度こそ、父の話を。それたりしなければ父の話を（笑）

第３３話　人間サイズのいも虫は怖いよ…

ある朝、グレゴール＝ザムザがなにか胸騒ぎのする夢からさめると、ベッドのなかの自分が１匹のばかでかい毒虫に変わってしまっているのに気がついた。

私はふとカフカの『変身』という物語のこんな冒頭を思い出した。弟も同じようなことを考えているに違いない。前を見たまま口を開けて唖然としている。まさに開いた口がふさがらないという心境だろう。

何故なら、弟の目の前には実際に虫が横たわっていたのだから。もっとも毒虫というよりはいも虫だが。

姉の侵入によってではなく、珍しくまともに自分で目覚めた弟が着替えを済ませ、朝食を作ろうと自室を出た。

まっすぐキッチンに向かおうとするが、ふとリビングを見るとソファの上に何かある。姉が投げ出したカバンの類いかと思い近づくと…いも虫だった。しかも人間サイズ。リアルな黄緑色の肌。目がどこにあるのか分からないが、もともと普通のサイズのいも虫でも目の位置など分からないので問題はない。…この家に何がおきているんだ。

さっきまで目の前のいも虫を唖然と見ていた弟が玄関の方に向かった。すぐに戻ってきたと思ったら、片手にモップを握っている。この巨大いも虫を外に出すつもりだろうか。

「天の声、静かにしてろよ」

そう言うと弟はモップの根元ギリギリをつかんで、先端でいも虫をつついた。いも虫がゴソゴソ動く。

もう一度つつくと先ほどより激しく動き出し、あまりに気持悪さ

に弟が壁ぎわまで逃げた。
弟が見守る中、いも虫は動き続け、遂に床に落下した。そこで一旦動きを止めたが、ゴソゴソともがきくように動き続け、遂に背中、多分背中から変態した。残念ながら出てきたのは巨大蝶々ではなく、中年男性だったが。まぁ、本当に蝶々が出てきたら、いも虫以上に恐怖かもしれない。
弟が恐る恐る、近づいてきた。いも虫から変態した中年男性は乱れたスーツを整えている。抜け殻にあたる物が床に落ちているが、黄緑色の普通の毛布だった。つまり変態ではなく、カフカの『変身』でもなく、ただ男性が頭から毛布をかぶっていただけだったのである。
「……と…」
弟は驚いた表情で呟いた。
「父さん……」
このスーツを着た、いかにもサラリーマンといった体の中年男性が姉と弟の父親である。へー。
「もうちょい驚けよ…」
「天の声、初対面じゃないからわざわざ驚くふりをしなくてもいいだろうに…」
斎藤家の男性は皆ツッコミにならざるをえないようだ。ちなみに先が弟で後が父。
「あの母と姉の相手してたら自動的に……ちょっと待ってくれ。初対面じゃないの？てか、父さん、天の声の声聞こえてるのか？」
「なんだ、何も言ってないのか、天の声」
父よ、私が弟にわざわざ説明するとでも？
「いや、思ってない」
まぁ、今から説明してやるからよく聞いておけ。
私は父の時代、ちなみに結婚前から斎藤家についてナレーションをしているのである。もちろん当初から父には私の声が聞こえていた。だから初対面ではないし、父にも聞こえる。私がついているの

は斎藤家の運命である。
「お前、いったい何者…？」
ナレーションである。
「……聞いた俺が馬鹿だった…」
わかっているなら聞くな。
「相変わらずだな……」
父が呆れている。
「ところでいつの間に来たんだ？」
毛布を蹴飛ばして、弟がソファに腰かける。父も同じようにして座る。あー…やっぱり。
「なんだよ、天の声」
親子だから座っている姿がそっくりである。猫背なところが特に。
「…で、いつ来たの？」
「それはな…」
父が話そうとしたところで今回は終わりだ。
「いや、お前が止めてるんだろうが」
終わりなのである。
「そうですかー」
次回へ続く。
「やっぱりな…」

第３３話　人間サイズのいも虫は怖いよ…（後書き）

長らくお待たせいたしました。ようやく父登場です。父は普通です。普通すぎて物語がまともに見える…！！お姉様が出てきてないっていうのもあるんですけど。

第３４話　やっぱり貴方が犯人

「で、父さんはいつ来たんだ？」
「昨日の１２時すぎかな」
「それは俺完全に寝てた。よく入ってこれたな」
父が遠くを見た。疲れた雰囲気をまとっている。
「あぁ…。それはな…」

昨日、夜１２時すぎ。
父は玄関前で考えていた。ものすごく考えていた。もうみんな寝てるんじゃないかと。
こんなに遅くなるならホテルに泊まった方が良かったかな…。常識人な父がそう思い悩んでいた次の瞬間。背中を押される感覚。思いっきり、ドアに頭をぶつけた。背後には娘である紗弥加が。
「鍵開けるからどいて。邪魔」
冷たすぎる姉の物言いに、父は心を痛めつつ素直にどいた。ちなみに姉のこの態度は現在不機嫌というものも加わっているが、大体父に対してはこんな感じだ。弟に接する時と少し違うのはブラコンだからだ。
「…随分遅いんだな…」
中に入ってから父がそう言った。姉は鞄を自分の部屋にほうり込んでから、父の方を見る。目が据わっていた…。
「行きたくもない上司との飲み会」
不機嫌な理由が明らかにされた。
あまりにも姉が不機嫌すぎて父は逃げ腰。
「それは…大変だったな…」
「あー！！もう！！しゅーちゃんのご飯が食べたかったのにー！！」
そう言って頭を掻きむしる姉。これは大分イライラがたまってい

る。というかなかなかブラコン度合いが高い。
『俊介だろう』と心の中でツッコミをいれる。姉より弱いので心の中で。
「あー…どこで寝ればいい？」
話をそらそうと父がそう聞くと、姉は父を睨んでから自室に入っていった。怖すぎる…。
『もしかしてこのまま朝までここに立ってないといけないのか…？』
父が青くなっていると、まもなく姉は黄緑色の毛布を片手に出てきた。
「荷物はそこらへんに置いて」
姉の言う通りにする父。なんだか哀れだ…。
そして姉に毛布の一端を持たせられた。何がなんだか分からずに持っていると姉が父の周りをぐるぐるぐるぐる。しかも不気味に歌など歌っている。
「あかりをつけましょ、ぼんぼりにー」
「時期が違うぞ」
父の鋭いツッコミに姉がにこぉと笑った。黒すぎる…！！
「なーつーも近づく、八十八夜」
ぐるぐるぐるぐると周り続けて、父は毛布を巻かれて動けなくなった。
「待ってくれ！まだ風呂も入ってない…」
「だから？」
姉は容赦がない。今日は特に。
父はそのまま頭まで毛布にくるまれた。こうして父いも虫が誕生したのだ。姉はそれ（父）をソファに投げて自室に入っていった。
「おい！！お……紗弥加！！苦しい！！」
父の叫びは姉には届かなかった。父はそのまま気絶するように眠りについた。というかあまりの息苦しさに気絶した。
そして今朝のいも虫に繋がる。

「……」
弟が完全に無言になった。気持ちはよく分かる。
「父さん、とりあえず風呂入ってきたら…？」
「あぁ。そうさせてもらう」
家から持ってきた鞄を引きずって風呂場に消えた。弟はそのあとをしばらく見ていたが、すぐにキッチンに向かった。
「さてと…和食でいいか」
そんなことを言わずとも弟はいつも和食である。
「うるさい」
そう言いながらサクサクと朝食の用意を進める。昨日から用意していた煮物に味噌汁。普通の日本の朝食。
「…なんか文句あんのか？」
弟まで据わった目をしなくてもいいだろうが。用意が出来たのなら姉を起こした方がいいのでは？
「そうだな」
姉の部屋の前まで行って、ノックする。返事がない。
「姉貴ー。そろそろ起きないと会社遅刻するぞー」
「…しゅーちゃん、女装して私の代わりに行って…」
「不可能だ」
姉は起きているようなので、弟は朝食を並べたテーブルの前に座った。すぐに父がやってきた。風呂に入って、ひげも剃ってさっぱりしている。
「…さっき、そんなに見苦しかったのか？」
シワになったスーツが。
「……」
「お姉ちゃん登場！！」
いつもよりテンションの高い姉がやってきた。昨日の不機嫌を知っているから、テンションが高いだけなのに怖さを感じる。
「何よ。朝は爽やかに起きないと」

むしろテンション高すぎて弟と父が引いている。
早めに立ち直った弟が一人で、朝食を食べはじめた。続いて姉が。最後に姉の機嫌を伺いつつ父が食べはじめる。
「しゅーちゃんさすが！今日も煮物がおいし…」
「姉貴」
顔を上げた姉の目の前に弟が無言で時計を突き出した。弟が起きてから大分時間が経っている。
「7……8時！？」
姉が慌てて立ち上がり、鞄を掴んで玄関を飛び出していった。
「なんか落ちてるぞ」
さっきまで姉の鞄が置いてあったところに、小さな四角い物が落ちていた。父が拾い上げたそれは…姉の定期券だった。
「紗弥加…慌てすぎだ」
「大丈夫大丈夫。気づいたら取りにくるから」
「時間ないから飛び出して行ったんだろう？」
父の問いには答えずに弟は時計をいじりはじめた。時計の時間が7時３０分になっている。父が自分の腕時計を見たが、やはり時間は7時３０分だった。姉が出勤するには少し早すぎる。
「…俊介」
7時３０分を示した時計を元通りの場所に戻している弟に父が話かけた。肩に手を置いて、若干涙目。
「強かに生きろ」
父よ、弟は十分強かだ。

第３４話　やっぱり貴方が犯人（後書き）

姉が黒い。そしてかなりブラコンだった…。最初からブラコン入ってましたけど。

父、本当にまともだなぁ。

第３５話　対比するには丁度良すぎる

「ただいま」
音を立てて父が扉を開けた。中はしんと静まりかえっていて、父自身が立てた音だけが耳に届く。まだ誰も帰ってきていなかった。だからせめて私だけでも言ってやろう。お帰り、父。
「…前振りが長い。というか、父と呼ばれると違和感が…。２０年ちょっと前までは名前で呼ばれてたからなぁ」
父とか弟とか呼び方がなかったからである。
「そうか…」
ネクタイを外して父がどっかりとソファに座った。なんとなくテレビをつけるが、特に面白い番組はなくすぐに消してしまった。天井に目を向けて意味もなくため息をついた。
父よ、暇なら姉と弟の昔話をしていいだろうか？
「どうしてだ？」
読者サービスである。
「そうか…」

「パパぁ、このお人形買ってー」
子供らしい可愛い声がデパートのおもちゃ売り場から聞こえてくる。姉、５歳の時だ。
「買わないよ、紗弥加。この前もぬいぐるみ買っただろ？」
まだ若々しい父が父親らしく言った。ここまでは普通の家族でもある風景。
「パパぁ」
「紗弥加、買わないって言ったろ」
「パパー、もう一緒にお風呂入ってあげないよぉ」
「くっ……！！」

全国の幼い娘を持つ父親がもっとも悲しがる言葉を姉がスマイル全開で言った。父はこの攻撃に怯んだが、威厳を保って姉に言う。涙目で。

「もう紗弥加も5歳だもんな…。パパとなんか入りたくないよな…。もう入ってくれなくてもお人形は買わないからな」

姉が悲しそうな顔を一瞬見せたが、またすぐに笑顔になって言った。

「パパぁ、しゅんちゃんにこっそりおもちゃ買ったのママに言ってもいーい？」

この当時、弟1歳。父は初の息子を喜んで、頼まれてもいないのに息子のためにおもちゃを買っていた。母に内緒で。

「…どのお人形が欲しいんだ、紗弥加」

姉は小さい頃から姉だった。

パパと呼んでいた時代もあったんだな…。

「まだこの頃の方が可愛げがあったかな…」

いや、普通の5歳児の可愛げはない。

「そう…だな」

弟の話は？

「丁度いい話がある」

「お父さん、これ買って」

姉とは違う落ち着きのある声で弟が言った。当時、弟5歳。幼稚園でも大人しいと言われ続けている時代だ。

「今日はそんなにお金持ってないんだ」

「…じゃあ、こっち」

弟は妥協して、もっと安いおもちゃを指差した。この時すでに値段が読める辺りが現在の弟に通じるところがある。

「おもちゃは買ってやれないよ」
「これぐらいなら持ってるでしょ？さっき見たらお札何枚か見えたもん」
なんとちゃっかりした子供だろうか。
「俊介、そんなに欲しいならお母さんに聞いてごらん。お母さんがいいって言ったら買ってあげるから」
父が斎藤家最大級の呪文を言った。普通の人である父と弟だけに効く呪文だ。
「…じゃあいらない」
母はやっぱり怖かった。

弟は可愛げとかよりもちゃっかり度合いが…。本当に5歳児か確認したくなるな。
「あぁ。でもまだ紗弥加より扱い易い…」
「天の声ー！！」
怒号と共に弟が駆け込んできた。お帰り、弟。
「ただいま…って挨拶してる場合じゃない！！なんの話してるんだ！！なんの話を！！」
なんのと言われても、父と楽しく昔話を。
「ただの昔話してただけだぞ」
「昔の話なんか蒸し返すな！！ろくなことないんだ！！特に天の声が話すと始末が悪い！」
そうだろうか？
「そうだ！！」
怒り心頭の弟が鞄をほうり投げた。鞄は見事な弧をえがき…今まさに帰宅した姉の頭に直撃した。その場の温度が一気に下がる。
「…お帰り、姉貴」
姉がにっこりと微笑んだ。5歳の時のスマイル全開よりも危ない笑みだ。

「ただいま。俊介、私が何言いたいか分かる？」
「…いいえ、さっぱり」
少なくとも危険だということはこの場にいる誰もが分かるが。
「鞄は投げる物じゃないでしょう？」
「その通りです」
「じゃあ、悪いことしたってわかったるわよね？」
「…すいません。ごめんなさい。申し訳ございません。許して、姉貴」
弟が謝りまくったが、姉の表情から危険な笑みは消えない。
「俊介、お姉様とお呼び。それと、一回私が受けた痛みを味わってみるといい」
「マジでやめてください、お姉さ……あ」
姉が本気で投げた弟の鞄はコントロールを誤り、弟ではなく父の顔面に当たった。
「あ…間違えた…」
父がばたりと後ろに倒れる。今のはかなり痛そうだ。大丈夫か？
「…なんでこんな役目ばっかり」
宿命としか言えないのである。

第３５話　対比するには丁度良すぎる（後書き）

流れ弾に当たった父がなんとも哀れ…。
誤字脱字、感想をお送りください。疑問質問に関しては第２回談笑回で取り上げさせていただきますのでどしどし送ってください。

第３６話　貴方に美味しい朝食を

「おはよ」
おはよう、弟。今日はちゃんと目覚ましが鳴ったのか。
「…実は止めてたの天の声とか言わないよな」
はっはっは。まさか。
「……」
弟が疑うような表情をしたが無視しよう。
朝から美味しそうなご飯の匂いが漂っている。洋食なのかトーストの匂いだ。
「へー。……はい？」
ちなみに今は弟の自室。弟寝起き。つまり朝食を作っているのは弟ではない。
ばたっと大きな音を立ててリビングに続く扉を開く。トーストの匂いがより濃厚になった。
そういえば弟は和食派だったか。洋食は滅多に作らないな。
「父さん！？」
「あぁ、俊介おはよう」
フライパン片手に父が朝の挨拶をした。リビングとダイニングはつながっていて、さらにキッチンは対面式なので弟の部屋から顔を出しただけでも見える。
「おはよう…。なんで朝食準備中？」
言葉だけだと文句を言っているようにも見えるかもしれないが、決して文句を言っているわけではない。
「二日、今日で三日か、世話になったんだ。これぐらいはやるさ」
父よ…いつも家でやっているからのか？
「どうして」
手際の良さが弟並。
「……」

「そういえば母さんに朝食作ってもらったことほとんどないな」
まあやらないと落ち着かないんだろう。習慣というのは癖になるものだから仕方がないのである。
「…そうだよな。はっはっ」
「…そうそう。はっはっ」
乾いた笑いを浮かべながら父子が朝食をテーブルに並べる。
終わった頃に姉が部屋から出てきた。
「珍しい！！今日はパンなんだ！？」
嬉しそうに顔を綻ばせて姉が席に着く。それを見て父と弟も座る。
二人して目が泳いでいる。
「どうかした？」
「なんでもない」
「ならいいけど。それじゃあ、いただきます」
パンに手を伸ばしてかぶりつく。男二人が固唾を飲んでその様子を見守った。
スパニッシュオムレツにフォークを伸ばした時に二人ともまだ食べていないことに気がついた。
「食べないの？」
「食べるけど」
「じゃあ何？もしかして食事に毒を仕込みました、とか！？」
「「ないない」」
父と弟、二人の声がかぶる。
姉が疑うような目線を向けてきたので、弟も朝食に手をつける。
本日の朝食は焼きたてのトースト、特製スパニッシュオムレツ、ベーコン、レタスとキュウリのサラダ（オニオンドレッシング）、ブルーベリーヨーグルト、コーヒー。弟が作ったら絶対に出てこない組み合わせである。
「このトーストの焼き加減が絶妙よ、しゅーちゃん！！」
親指を立てて姉が感想を言うが、弟は姉を見ずに答えた。
「しゅーちゃんじゃねぇよ。それにトースト焼いたのは父さん」

「……」
「え？」
姉が父の方をちらっと見て、食べかけのトーストを皿に置く。今度はスパニッシュオムレツに手をつけて一言。
「美味しい！！」
「こっち向いて言うな。それも俺じゃなくて父さん」
「…わざとやってるのか…？紗弥加…」
父が完全に落ち込んだ。娘に嫌われた父親というのはこういう姿なのだろうか。まあ、娘に嫌われているわけではなく、娘がブラコンなだけだが。
「一言多いよ、天の声」
姉が笑みを浮かべている。一言多いかもしれないが事実である。
「しゅーちゃんは何も作ってないの！？」
今度は矛先を弟に変えた。
「作ってない。コーヒーいれたぐらいだ」
「じゃあコーヒーがおい…」
「インスタントだ。ついでに言うとまだ一口も飲んでないだろ」
「……しゅーちゃんの馬鹿！！揚げ足取り！！」
流れていない涙を拭いながら鞄を掴んで、姉が外に飛び出して行った。お腹がすいていたのか、食べかけのトーストと共に。
「しゅーちゃんて人はこの家にはいません」
のんびりサラダを食べながら弟がツッコミを入れた。…段々と弟のツッコミの入れ方が優雅になっている気がするのは気のせいだろうか？
「成長したんだよ。いつも全力でつっこんでたら疲れるから」
…そうなのか。
「真に受けるな、天の声」
父に言われずとも。
二人で優雅な朝食タイムとなった。もちろん私が食べられるはずがない。

「俊介、今日暇か？」
「まあ。講義もないし」
「じゃあ付き合え」
父の言葉に弟がキョトンとしている。父は面白そうに笑みを浮かべた。

第３６話　貴方に美味しい朝食を（後書き）

お久しぶりです！！
朝比奈蒼です！！
お久しぶりなのに次回はまた２ヶ月以上後になります。
父編はあと一話なのですが、遠いな…。

第37話　父子二人旅へ行く

目の前に広がる青い空、青い海。広いな大きいな。行ってみたいな他所の国。こんにちは今日は斎藤家の大黒柱と長男の逃避こ……二人旅をお届け。

ＢＧＭが今一番欲しい…。歌わないと今の言葉に歌が入ってるのが通じないから。

「海見えないし。旅してるわけでもないから、旅番組を作ろうとするな」

弟のツッコミが入った。

これは旅番組ではありません。父が上京している弟を連れて東京観光をしているだけなのです、はい。

「…ナレーションの仕事を放棄するのはやめないか、天の声」

父にまでつっこまれてしまった。

現在は東京観光と言えばここ！という観光名所東京タワーにいる。５０年だってめでたいね。

「天の声…」

弟の逆鱗に触れそうなのでここからは真面目に行こう。

東京タワーに来たいと言ったのはもちろん父。講義もなく暇だった弟は巻き込まれる形で父の観光に付き合っている。私服の用意はしていなかった父はスーツのまま東京の観光名所を回っていた。東京タワーで３ヶ所目だっただろうか。

「スーツと替えのワイシャツだけあれば出張なんて十分だろ？」

「まあそうだけど…父さん、そういえば今日は会社は？出張の最後の日だけ休暇なわけ？」

父が爽やかに笑った。一生忘れられない笑みだった。

「部下に全部押し付けてきた」

「あー……」

今弟と私の心の中は完全に一致した。

やっぱりこの人、姉の父親だ…。

安くてそれなりに美味い店で昼食を済ませ、二人は東京駅へと向かった。
「何時発の新幹線？」
「２時１５分だ」
「そんなに時間はないのか。じゃあこれからどうする？」
父は少し考えてから答えた。
「土産でも買うか。鈴に要求されてるからな」
兄弟の中で唯一実家にいる妹を思い出した。小学校高学年になろうという歳なのに人で東京まで来てしまうようなハチャメチャな妹である。
「そういえば鈴元気？」
「鈴は…」
父が遠い目をしている。こういう時に後に続く言葉と言えば元気すぎるとか、また家出しそうだとか…。
「病気なんだ」
「へぇ……えぇ！？」
うえぇ！？
「今入院しててな…」
「ちょっと待て！出張とかしてる場合じゃないだろ！！」
その前に兄弟に連絡があってもいいのでは？
「…というのは冗談だ。今日も学校に行ってる…はず」
サボってなければの話か…。
「冗談かよ！！驚かすなよ、父さん！心臓止まるかと思ったから！！」
「すまんすまん。冗談に付き合ってくれる人が普段家にいないからつい」
常識人のいない家＝斎藤家だからである。それにしても弟はシス

コンだな。
「妹を可愛がっちゃ悪いか」
開き直った…。
「うん……まあ…いいんじゃないか…」
父もちょっと困り顔だ。ちょっと遠い目で何を思い出しているのやら。
「お土産買うんじゃないのか？」
「そうだった。お土産屋とかどこにある？」
すぐそこ。父の目と鼻の先にあるのである。
「あぁそうか……あっ！」
父、弟に何も言わずに駆け出す。正確には早歩き。
「どうしたんだよ」
弟はすぐに追いついたが、父はその間にもうお土産を買っていた。東京土産代表のお菓子である。
「いや、お母さんはこれ好きだったから買って帰ろうと思ってだな」
「そんなに慌てなくても逃げないから、それ」
弟苦笑気味。母がそれを好きなのは知っているが父もちょっとはしゃぎすぎ。
「はしゃいでない」
ではそういうことにしておこう。
「鈴へはどうするんだ？」
「うーん…。あのネコのストラップとか…？」
「東京限定版？この前来た時買ってたよ」
妹はあの時しっかりお土産を買っていたのか。さすが弟の妹。
「なんか他に限定物系あったか？」
「…思いつかない」
父、父。新幹線の時間になる。
「え！？うお！！」
自分の腕時計を確認してあわを食っている。
「土産！！もういいか土産！！」

「お菓子が二人分のお土産ってことにしておけば？」
「そうするよ！」
荷物を抱えて父が走り出した。その背を追いながら、弟が大声を出す。
「夏休みには帰るから！」
「あぁ！うわぁ！！」
父、お菓子を落下させる。それをひっ掴んで階段を駆け上がって行った。
帰る時だけ嵐のようだ…。
弟が笑う。
「そこだけは鈴そっくりだろ？」

第３７話　父子二人旅へ行く（後書き）

お久しぶりです。
気がつけば、もう１００日以上更新してないとか…。サボってたわけではないのでゆるしてください。
父編はこれにて終了で、次回はまたゆるゆるとした一話完結のものを。

実はこの回から完全定期更新性にしようということにしました。週二回更新です。火曜日と金曜日に更新する予定ですので、お暇な方は毎回お付き合いいただけるとうれしいですね。
あ、それと、もし更新予定日の翌日になっても更新されていなかったら、次の更新予定日にならないと更新されません。されませんというか、多分書けていないからそんなにすぐに更新できません。更新されていなかったら温かく見守ってください。

第３８話　新学期を祝え

「祝え！祝うんだ！無事に3年に上がれたことを！」
「俺、お前ほどピンチじゃなかったから」
塚田の言葉に対して新年度早々冷めた態度をとっている弟。４月になり、大学生活も3年目を迎えた現在、何故か塚田がうかれている。
「べつに俺もそこまでピンチじゃなかったぞ。英語がスレスレだっただけで」
「心の広い教授で助かったな」
塚田が机に突っ伏し、泣いている真似をする。いや、実際に泣いているのかもしれない。もちろん弟が辛辣だから。
「優しさを求めることが間違ってる」
塚田が顔を上げた。頬が濡れていないので嘘泣きだったようだ。
「もう少し態度を軟化させてもいいだろ！？」
「これ、元からだから直らない」
「努力！！努力を見せて！！」
弟には無理なことを新年度早々塚田は願っている。年度が変わろうが、大学生活3年目に入ろうが、二人に成長は見られない。そう簡単に変わられても困るが。
「…成長って何だろうな、塚川」
「塚川って俺？」
「何言ってるんだ、塚林」
「成長って何だろうって言葉はそのまま返すよ、斎藤」
だからどっちもどっちである。

さて、いつも通りの会話の後、授業開始。塚田は弟の隣に座って真面目に授業を聞く、わけはない。聞き逃したところを弟のノート

を盗み見て写す。弟は言い争うのも面倒なのかほっといている。
「めくるなよ。まださっきのとこ書いてないんだから」
「授業妨害するな」
すべて小声の会話である。
「少しぐらい貢献してくれても…」
「そこ、うるさい」
塚田は教授に怒られた。単位がまた危うくなった。
「塚田、ファイト」
隣にも聴こえないぐらいの声で弟は呟いた。

「お前ってさ…得意なものとかないの？」
講義が終わった後、まるで塚田は人生すべて不得手であるかのように弟が聞いた。
「数学」
「へー」
自分から聞いておいてかなり気のない返事だ。
「…数学？」
「そうそう。１Ａ２Ｂ３Ｃ。微分積分とか何でもいける」
「数学？」
「二回も聞くなよ。こう見えても俺、この大学数学の評定で推薦で入ったから」
弟も初めて聞く話だった。どうりで英語ができなさすぎるわけだ。数学の評定だけなら英語はいらない。
「なんで経済学部？」
普通数学が得意なら理学部数学科あたりを狙うだろう。
「数学科とかで普通に受験したら一科目じゃないだろ」
「あぁ、なるほど。英語が…」
「そうなんだよ。英語がどうしても…って断定するな」
「でも英語だろ？」

「そうなんだけどさ！」
地団駄を踏む。弟が迷惑そうな顔をした。塚田が弟の顔をちらっと見て足を止める。
「なんだよその顔は！！」
「うるさいなぁと」
「表現はオブラートに包もう！！」
改めて隣の席に座って、体ごと弟の方を向く。
「じゃあ斎藤の得意なものって何？」
「文系三科目はそれなりに。まあ世界史はその中でも出来る方」
「違うだろう！」
そうだ違う。弟の得意なものと言えば家事。その中でも特に料理だろう。
「斎藤の得意なものは料理もあるけど、女装だろう！チャンピオン！」
「…ちょっと待て。どうしてお前が知ってるんだ…」
そういえば弟は塚田に優勝したことを報告していない。残念でしたという気持ちを込めての打ち上げをしたために完全にタイミングを逸していた。それなのに何故か塚田が知っている。
塚田が弟の肩を叩いて笑った。
「俺は推薦者だったからな！後日、実は…って大学祭進行から聞かされた」
「……」
「安心しろよ！！今年の前年優勝者紹介の時は俺ら全力でサポートするから！」
「俺ら？」
「もちろん！！この前のメンバーで！」
柿崎、葉賀、山村の女子三人組か…。
「もちろんあいつらにも声かけてあるからな」
「……」
誰も知らないと思っていたのは弟だけなのだった。

第３８話　新学期を祝え（後書き）

なんか…弟と塚田の大学生活詰め合わせみたいになってしまった…！！

第３９話　お姉様の優雅な一日

目覚まし時計のけたたましい音で姉こと斎藤紗弥加が目覚めた。アラームを消してからゆっくりと目線を動かし、カレンダーを確認して…。

「…すー……」

寝た。

念のため主張しておくが、今は朝である。朝４時とかではなく、普通に7時。そして姉はだいたいいつもこのぐらいの時間には起きている。寝坊は弟の専売特許だ。

そんな寝坊なんてそうそうしない姉が二度寝したのにはわけがある。しばらく前に休日出勤があったので振替で休暇を取るように上司に言われていたのだが、この姉真面目なのか休暇を取るのすら面倒だったのか、まったく休暇の届けを出さなかったため、痺れを切らした上司に勝手に休暇にされたのである。そのため今日は家で一人のんびりすることになった。弟は大学の講義が一日中あるので夕飯の時間まで帰ってこない。

「すー……」

なので姉は深い眠りの中から戻ってこないのである。しかし、いい加減ナレーションだけで物語りを進行するのも大変なので起きてほしい。

「……すー」

姉は完全に夢の世界に旅立っている。これではどうしようもない。今さっき出て行った弟がせっかく姉のリクエストにそって作ったイングリッシュブレックファーストが冷めてしまうが、本人が起きないのではそれも仕方がないことだ。

「……」

おもむろに起き上がった。鼻を動かして、香ばしいパンの匂いを嗅ぐとテキパキと部屋を出る。

さすがだ。

お姉様は優雅にクロワッサンを口に運んだ。左手には紅茶、もちろんティーバック。皿には食べかけのスクランブルエッグ、ハム、レタスなどなど。インスタントの紅茶以外姉は用意していない。弟は完全に尽くすタイプである。尽くさせられているとも言う。

「何？いいじゃない。美味しいご飯が作れれば苦労しないよ？」

姉は作らないだろうに。

それはさておき、今日の姉は本当に優雅だった。朝、テレビを見ながら弟の用意した朝食。食器はシンクに運ぶだけで洗わない。食器を割られるから弟が止めた。その後はずっとテレビ。

昼食は弟が作った親子丼が冷蔵庫に入れてある。親子丼と言ってもご飯とはばらばらの半生の状態で加熱を止め、ラップの上に温める時間まで書いてある一品だ。それをレンジで温めたご飯にのせるとまるで姉が作ったかのような錯覚に陥るらしい。

「さすが私。温め具合が絶妙で美味」

何度でも言うが、作ったのは弟。しかも温める時間まで弟が指定している。

食後は朝食の時と同じように食器をシンクに運ぶだけ。またごろごろとするのかと思ったら、洗濯物を取り込みだした。ばさばさ、ばさばさ。とりあえず洗濯ばさみから外せばいいやという感じすら姉から感じる。

そして床に洗濯物の山を作ってリビングに戻る。洗濯物にはノータッチ。なぜなら畳もうとしてもぐちゃぐちゃになるだけなので弟が怒るから。

「美味しいわー」

何してるのかと思ったら、冷蔵庫を漁っていた。食べてばかりなように思うのは私だけだろうか。

「食べてるところ以外ほとんど描写しないじゃない」

食べる以外していないからである。
ちなみに姉が食べているのはアイス。冷凍庫にちょっと高級なアイスが入っていたのだ。いつ買ったのか…。
「アイスは買ってないから知らなーい。私買うならバニラじゃなくてストロベリーとか買うもん」
それ食べていいのだろうか…。
「ただい…」
弟が帰ってきた。そして止まった。床の洗濯物を見てため息をつく。
「何もこんなところに置かなくても…」
そして姉に視線を移す。
「……姉貴、それ…」
「冷凍庫に入ってた」
アイスを食べながら姉が答える。
「……それ、俺の…」
「そうだったの？ごめんごめん。いつか買ってくるよ、いつか」
「……」
姉がアイスを買ってこないことを見越して弟は肩を落とした。

第４０話　おいしいチーズケーキの作り方

弟はリビングのソファテーブルの上をじっと見ていた。テーブルに穴が開きそうなほど見ていた。
「なんだ…これ」
Ａ５サイズ程度の本が置いてあった。厚さは１センチほど。それを弟がゆっくりと持ち上げる。
不思議そうに見ているところを見ると弟の物ではないようだ。
「俺のじゃない…けど……姉貴のか…？」
弟が確信を持てずにいるのも無理はない。表紙には可愛らしいイラストとともに本のタイトルが躍っている。『おいしいチーズケーキの作り方』と…。
「姉貴のじゃないでほしい！」
いや、姉のではなかったらこの家に弟の知らない人物が住んでいるというホラーのような展開になってしまう。
「むしろホラーの方がまだいい！」
まあまあ。中身は違うかもしれないのだから。
「だといいな…」
弟がその本の表紙をぺらっとめくった。またあのタイトルが躍っている。さらに１ページめくると…。
「クリームチーズ…２００グラム……砂糖…」
そんなに苦々しい表情をしながらチーズケーキのレシピを読み上げないでほしい。
じーっと一点を見つめているが、弟よ、そこに私はいない。そして睨まれても困る。
「困れ…。食べ物を食べられない人…のようなものなんか困っていればいいんだ」
ナレーションなのに食べ物を食べられたら、見ている弟が困惑すること請け合いだ。

それになにもお姉様が弟に食べさせると決まっているわけでは…。
「姉がいつの間にかお姉様になってるぞ」
……。もしかしたらいつの間にか恋人が出来てその人に食べさせるのかも！
「休みの日は家でゴロゴロしてるのに…？」
友人に持っていくとか…。
「姉貴は友達であっても貢ぐより貢がせる派」
……父…。
「ありえない」
父よ、弟から全否定されている…！
じゃあ弟が食べるしかないわけか。
「……」
弟がゆっくりと本を持ったまま立ち上がって、テレビ脇のごみ箱へ。怒られても私は知るものか。
弟がごみ箱の上に本を翳したところで止まった。
「怒るか…？」
それは怒るだろうな。例によって恐ろしい笑顔を浮かべて『しゅーちゃん、この部屋の家賃払ってるの誰だと思ってるの？』とでも言うに違いない。もしくは弟が作ったのに夕飯抜き宣言か。
「…久しぶりに家賃の話…」
弟は腕を引っ込めて供え物をするように本をリビングのソファテーブルに置いた。
「…なんとかチーズケーキを食べずに済む方法はないものか」
無理である。
「もうちょっと知恵を絞ってくれ」
知恵を絞ってなんとか食べない方向に持っていこうとしていると気づいてしまった瞬間に『この家の家賃』以外略の状態になるに１００万円。
「…そんな成り立たない賭けをしないでくれ…」
まあまあ。あの本は姉の物か直接聞いてみればいいじゃないか。

ちょうど帰ってきたから。
「しゅーちゃんただいまー」
お帰り、姉。
姉がかばんをソファに置いて、キッチンになにかお菓子がないか物色しだした。今食べたら夕飯が入らないのでは？
「かたいこと言わないの。あれ、しゅーちゃんどうしたの？」
弟が姉ににじり寄る。本を目の前に突き出した。
「これ、姉貴の？」
「ああ！ないと思ったら家に置いて行ったんだ！」
弟玉砕。
「何で玉砕？」
いやいやこちらの話なので姉が気にする必要はないのである。
「ふーん」
「姉貴…」
弟がゾンビのように復活した。執念だ。
「チーズケーキ作るのか…？」
姉が不思議そうな顔をしている。なんのことかと言いたげだ。
「この本…」
「ああこれね…」
姉が突然大声で笑い出した。今度は弟がキョトンとする番である。
「このタイトル見てチーズケーキのレシピ本かなにかかと思ったのかもしれないけど、残念でした。これはほら」
姉が本をパラパラと数ページめくった。縦書きの文字の羅列が出てくる。『その男は突然部屋の中に入ってくると、手を叩いて全員の視線を自分に集めた』と書いてある。なんのことはない。ただの小説だ。
「…しょ、小説！？」
「そう。ミステリー」
「ミステリー！？」
驚きのあまり弟の声がひっくり返る。

「主人公が友人の家に遊びに行ったら、その友人がリビングで死んでて、その死体の隣にチーズケーキが置いてあるっていう内容のミステリー」
「じゃあなんで最初のページにレシピが…」
「よくわかんない。よくわかんないけど…」
姉がそのレシピの部分を開いて呟いた。
「今度作ろうかなぁ」
その瞬間、弟と私の心の中は一致した。
「やーめーろー！」

第４１話　兄弟が増えました

「起きろー」
なんか低い声が聞こえた。そんなはずがあるか。この家にいるのは姉貴と俺だけだ。もし鈴が突撃訪問してきたとしても、低音なはずがない。いや、もしかすると…。
「塚田…？」
布団を被ったまま聞いてみた。即座に声が返ってくる。
「弟の友達の？弟、耳大丈夫か？」
「だよな。塚田がこんなにいい声してたらとっくの昔に絞めてる……って誰！？」
勢いでベッドから起き上がった。目の前にいるのは…見たことがない男だった。俺よりは年上。姉貴とタメか少し下。背は俺より高くて、顔がいい方に入るかは微妙。黒髪を短く刈っているので、スポーツマンに見えるかと思えば、そういうわけでもない。声がいい以外は全体的に平均値か？
「遅刻するぞ。今日、１限からあるんじゃなかったのか？」
「そう…だけどさ、誰？」
「何を寝ぼけているんだ、弟」
「弟って呼ばれても、俺、兄貴いないし…」
でもなんかそういえば、よく弟って呼ばれてた気が…。姉貴はそんな変な呼び方しないし…。塚田あたりがふざけて呼んだら殴る…。で、なんで俺が地の文なんか…。
「あぁぁ……お前もしかして天の声か！？どうりで地の文が俺の一人称のはずだ！」
「朦朧したのか？私が弟の兄の天の声以外の誰に見える」
誰にも見えないから困ってたんじゃないか。
「天の声なら最初から『である』って言ってくれよ」
「『である』なんて現実でしゃべっていたらただのエセ中国人だ。

あれは地の文限定の話し方なのだよ、弟くん。そして『天の声』ではなく、気軽に『天兄』と呼んでくれ」
「誰が呼ぶか」
これが天の声なら納得。妙に喋り方が堅苦しいし、ナレーションだから声がいい。
「なんで天の声が実体化？」
天の声が呆れている。というか、なんで朝から俺の部屋に出現するんだ。
「何を言う。私は生まれた時から身体があり、生まれた時から弟の兄だ。そして姉の弟だ」
「いやいや。うち3人兄弟だから。俺長男だから」
「頭でも打ったのか？まあいいが、朝食の準備…」
「お前もか！！」
どうして俺を起こす理由が朝食の準備しかないんだ！！

「なんでかなぁ…」
なんで俺が3人分も朝食の準備をしなきゃいけない。姉貴はいつもだからおいておくとしても、自称天の声の分までなんで俺が作らなきゃいけないんだ。
「しゅーちゃん、まだー？」
「姉、弟の名前は俊介だ」
「うん。まあいいじゃない、天ちゃん」
なんで姉貴は普通に天の声と喋ってるんだ。つっこめ。兄弟って言ってるわりにそこまで似てないところとかつっこんでやれ。てか、いつも天の声って呼んでるのになんで天ちゃん？てか、やつはなんでこの家に住んでるんだ？
「…つかぬ事お伺いしますが、仕事は何を」
「私に聞いているのか？何故敬語」
「気にしないでください、自称兄貴」

キッチンに立っている俺が見えるようにダイニングの椅子に座る。
天の声が移動しても姉貴は気にせずにソファでテレビを見てる。
「フリーター」
「地元でフリーターやれ」
天の声が微かに笑う。そういえば身体がないから笑ったところを見たことがない。
「わざわざ都会まで出てきたのは夢を追いかけているからだよ、弟」
「夢なんかあったんだな」
「…弟は私をひたすらけなしたいんだな」
天の声落ち込む。が、立ち直りはすごく早い。もうちょっと落ち込めって言いたくなるほど早い。
「フリーターになってでも夢を追いかけたかったんだ」
なんだろ。ちょっといい話をしようとしてるっぽい。
「ちなみに夢は…」
「ナレーター」
「……もう立派になってるよ」
聞くんじゃなかった。聞いて損した。
肩を落としていると、姉貴が怒りの声を上げる。
「しゅーちゃんご飯！！」
「今作ってる！！」
「間に合わなくなるよ！！」
「もうできるって！！」
「しゅーちゃん！！」

「しゅーちゃんいつまで寝てるの！！」
「もう起きてるだろ！！」
弟がガバッと起き上がった。周りを見回してキョトンとしている。
怒りの形相の姉が弟のパジャマの襟を掴んだ。

「俊介、今何時だと思ってるの？さっさと支度しなさい」
「……はい」
姉が出ていって、弟が支度をし始める。心なしかいつもより手際が悪い。
「…なあ、実体化とかしないよな」
私がか？ナレーションが実体化してどうする。そんなものは不必要である。
「やっぱり天の声だ」
なんだかよく分からないが、一人でニヤニヤ笑っていると不気味だ。
「…うるさい」

第４１話　兄弟が増えました（後書き）

やってみたくなっちゃったんだ、天の声実体化。そして天の声も兄弟設定。実体化するにあたり、天の声の設定を考えたんですが、わりと自然に姉の一つ年下の兄という位置に入りました。

心残りといえば、弟に『天兄』と呼ばせられなかったことですかね。

第４２話　多分中型、現在小型

「しゅーちゃん、ただいまー」
「しゅーちゃんじゃな……」
姉の帰宅にキッチンからフライパンを持ったまま弟が出てきた。そして視線を姉に向け、そのままの格好で固まる。
「しゅーちゃん…」
「ダメ。ぜっっったいダメ！」
「まだなんにも言ってない…」
弟の言葉に姉がしゅんとする。ついでに姉が抱き抱えているものも。
「姉貴には無理」
「だってこんなにかわいいのに…」
姉の腕の中には一匹の犬がいた。茶色のトイプードルだ。大きさからして生まれてまだ一ヶ月というところか。それを姉が撫でる。
「かわいいでしょ？」
犬を目の前に持ってこられて弟が唸る。犬は目をうるうるとされて弟を見つめる。
「う……」
弟の唸り声が大きくなった。
時を見計らって姉が畳み掛ける。
「かわいいでしょ？」
「…だからって飼っていいことにはなりません」
「私がちゃんと世話するから」
「それが一番信用できない」
姉が犬をゆっくり床に下ろした。犬は喜んでリビングを駆け回り、弟の足にじゃれつく。
「こら！フライパン落とすだろ！」
弟に怒られて犬の耳が下がる。というか、弟がフライパンを置い

てくればいいだけの話である。
「そうよー。私が世話出来なくなったらしゅーちゃんが見ればいいじゃない」
フライパンを置いてから弟が据わった目で姉を見た。
「世話できないと思ってるなら元あったところに捨ててこい」
正論である。
「捨てに行かないよ。だってこの子捨て犬じゃないもん」
姉の足にじゃれついていた犬をまた抱き抱える。かまって貰えると思って犬は大喜びで尻尾を振っている。
「買った…？」
「買ってないよ。ペットにお金はかけない主義です」
じゃあどうやって…。
「強奪？」
「お姉ちゃんに向かってなんてこと言うの！友達に貰ったの！」
貰い物、貰い犬か。捨て犬だと雑種が多いが、貰ったのならば種類も明白だ。
「飼えるか考えてから貰ってこないか？」
「飼えるでしょ。このマンション大型犬より小さいのは可なんだから」
「姉貴が世話できるかって話だよ」
「なんのためにしゅーちゃんがいるの」
弟が腕組みして堂々と答える。
「少なくとも姉貴が放棄したペットの世話のためにはいない。ついでに家事をするためにいるわけでもない」
主夫なのに。
「主夫じゃねぇよ。大学生だ」
「人生のモラトリアムならペットの世話ぐらいできるでしょ？」
姉が笑顔で犬を突き出す。犬は嬉しそうに弟を見て尻尾をパタパタ振る。弟が眉間にシワを寄せた。
「返してこい」

「えー。じゃあ一日だけ！一日世話して飼うか考えようよ！」
「いやだ」
そこまで頑なに拒否するということは、もしかして弟は犬がダメなのか…？
「え！？知らなかった！そうなの？」
「違うから。姉貴が世話出来なくなった犬の将来を考えて言ってんだ」
そうか…。ダメだったのか…。それは面白い…悪いことを聞いた。
「そうなの…。じゃあしょうがないわね」
「なんか違うけど、飼わないことにしたならいいか」
姉が悲しそうな表情をする。
「しゅーちゃんが犬大丈夫になるようにぜひ飼わないと」
「そうしろそうし…。今なんて言った？」
途中まで頷いていた弟だったが、予想していた台詞と違ったために聞き返す。
「ぜひ飼わなきゃって言った」
「は…？」
「耳悪くなったの？」
弟よ、受け入れ難いことでも時には受け入れなければならないのだ。
「この犬飼うのか…？」
「さっきからそう言ってるでしょ。よし、名前なにがいいかなぁ。雄だからカッコイイのがいいよね。フロイトとか」
なんで精神論者…？
「しゅーちゃん、どんなのにしたい？」
「……ピタゴラス」
なんでまた数学者の名前にするのか。

第４２話　多分中型、現在小型（後書き）

ということで犬の名前を募集します！！
雄ですから、それらしい名前を送ってください。姉弟のように学者の名前を使う必要はありません。
締め切りは４８話更新日までということで。決まったら談笑会でも発表しましょう。

第４３話　投げるならボール

「ごふっ！！」
最初から擬音で始まってしまったのでまだ状況が飲み込めていないだろう。しかし、それは声を出した弟も同じことなのである。
「……」
目を開けてまっ先に飛び込んできたのは、あの犬だった。犬は尻尾を振って遊んでのアピール。
「……」
全く状況が飲み込めていない弟と読者のために私が解説しよう。
まず、昨夜姉が犬を貰ってきたところまでは覚えていると思う。その後、夕飯の片付けをしていた弟の足元を犬が駆け回っていた。姉が呼んでも何故か弟のことが気に入ったようで、離れようとしない。そこで弟はさっさと入浴して部屋に閉じこもったのだ。犬は部屋の扉を引っかいていたが弟がいっこうに出てこようとしないので、諦めて姉のところに行った。弟も安心してぐっすり眠れたというわけだ。
「そこまでは分かるから」
犬の脇の下に手を入れて持ち上げながら弟が言った。まだ続きがあるのである。
しかし弟はぐっすり眠りすぎてしまった。朝ご飯を作る時間になっても起きてこないのだ。こういう時はいつも姉が起こしにくるのだが、姉は少し考えた。『たまには変わった起こし方をしてみよう』
「…それで？」
さてここからがクイズである。
「はぁ！？」
姉が一風変わった起こし方としてえらんだのはどれでしょうか。
1、妹、鈴のようにベッドにダイビング
2、扉を開けた

3、犬とすり変わった
さあどれ！！
「……2」
弟クン、残念！！
正解は4、扉を開けて犬をベッドに向かってほうり投げ、素早くリビングに戻って自分は何もしていないかのように装うでした。
「4なかっただろ！！」
いやいや、123をすべて混ぜると4になるのである。
「汚ぇ…」
そう思うのは自由だ。
で、いつまで犬を抱えているのだろうか。
「気が済むまで」
ご飯を作らないと怒られるのでは？
「たまには飯抜きで会社行けよ」
犬が弟がかまってくれていると思って嬉しそうに尻尾を振っている。弟は抱えたまま特になにもしない。
怒りに行かないのか？いつもの弟なら答えを聞いた瞬間に飛び出して行って文句を言うだろう。
「怒りに行く気力がない」
風邪でも引いたのか？
「え！？しゅーちゃん風邪引いたの！？」
姉が飛び込んできた。弟がなかなか出てこないからずっと様子を伺っていたらしい。
そんな姉の腕を素早く掴んだ。
「引いてねぇよ」
弟が怒りの形相になる。溜め込んだ物が爆発したようだ。
「え…？さっき怒る気力もないって…」
「正しくは怒りに行く気力もない、だ」
「え…？」
姉の顔色が変わる。ちょっと青ざめていく。

「いつもいつも、俺が怒りに行って丸め込まれるから、たまには怒られる側に来て頂こうと思いましてね、お姉様」
怒りのオーラを出したまま笑う弟。しかもわざとらしく敬語。
今日の弟は凄く機嫌が悪い。寝起きとか関係なく悪い。
「天の声、ナレーションマジックでこの状況をなんとかして」
そんなに都合よく働かないのがナレーションマジックである。それに姉の日頃の行いが悪かったからこうなっているのだ。
「……こういう時、天の声の口調がすごく腹立つわ」
「天の声としゃべってないで、少しは反省しろ」
絶対零度の弟の声に、思わず正座をした。その膝に前足をおいて犬が不思議そうに覗き込んでいる。
「起こすなら普通に起こせ。だいたい本当ならもう少しゆっくり寝てていいはずなのに、姉貴のために朝食作ってやってるんだ。そんな弟に向かって犬を投げるか？」
「投げません…」
弟、まず犬は投げる物じゃないというところから怒るべきではないのか？
「天の声は黙ってろ」

そして弟の説教は姉が出勤する時間ギリギリまで続いたのだった。

第４４話　雨が降ると歌いたくなる

「あーめあーめ降ーれ降ーれ、母さんがー、じゃのめーでおむかい、うれ……」
突然歌が止まった。決してオルゴールをかけていたわけではない。窓の外を見ながら歌っていた姉がピタッと動きを止めたのである。窓の外は歌の通り雨が降り続いていた。
「うれしいな？」
なぜ疑問形？
「……しゅーちゃーん」
「……」
「しゅーちゃん」
「……」
弟は部屋から出てこない。
「しゅーんー」
「何？」
俊介という名前が分かる程度までになってようやく弟が部屋から出てきた。
「お母さんが雨の日に迎えに来た記憶ある？」
「……ない」
「そもそもお母さんが雨の日外に出てるの見たことある？」
「それは…さすがにあるんじゃねぇかなぁ」
母は晴耕雨読の人なのか？それともただの雨嫌い？
「後者」
「甘いわね、しゅーちゃん。雨が嫌いとかそういう問題じゃなくて出不精よ」
「あぁ、出不精…でもそんなに家事やってない気が…」
専業主婦じゃないのか？
「専業…専業？」

「専業で主婦してたっけ？」
「そもそも主婦だったか？」
父が主夫なのか？
「専業主夫…うん。そのほうがしっくりくる気がする」
「ちょっと待て姉貴。父さん仕事してるから専業じゃない。この前出張で来ただろ？」
姉がかすかに笑った。視線は弟からテレビに向かう。
「そうだっけ？」
父が来たことは忘却の彼方に追いやられている…！！
「あ、そうだ」
弟が何か思い出したようだ。
「雨の日はほとんど父さんが迎えに来た」
「そうだった。幼稚園が閉まる時間ギリギリに迎えに来たのよ」
では、その当時の父を振り返ってみよう。

「斎藤、今日飲みに行かないか？」
同僚が父を誘う。父は困ったように笑って、手を振った。
「悪いけど今日は…」
「あぁそうか。子供の迎えだったな。誘って悪かった」
同僚が笑いをかみ殺す。
「お前も子煩悩だな」
「…あぁ」
父は誤解されていた。同僚からの父の印象は、子煩悩で愛妻家だった。決して妻や子供を愛していないわけではないから否定はしなかったが、父は同僚に本当のことを言えなかった。『雨の日は子供を迎えに行くように妻に言われている』ということを。
「じゃあちゃんとまっすぐ迎えに行ってやれよ。子供待ってるだろ？」
「そうするよ」

こうして同僚から見送られながら父は幼稚園に行った。幼稚園で待っている可愛い娘を迎えに。だんだん母に似てきたために可愛さよりも狡猾さなどが育ちつつあるように彼自身も感じていたがまだ一応可愛い娘である。

「すみません」

幼稚園の玄関で父が声を出すと、間もなく先生が現れた。よく迎えに来るためにこの先生に父は覚えられている。

「今日はお父様が迎えにいらしたんですね。ちょっと待っててください。紗弥加ちゃん奥で遊んでますから呼んできますね」

「よろしくおねがします」

物腰が柔らかく、口調も丁寧で驕ったところのない父は幼稚園で『父親の模範』と呼ばれていたが、それは本人の知らないところである。ちなみに父は妻と会う以前から、この性格だったので妻の重圧からこうなったわけではない。

「パパー」

先生の腕を引いて紗弥加こと姉が現れた。父を見てうれしそうにしている。この頃の姉はまだ父に懐いていた。

「紗弥加、幼稚園ではいい子にしてた？」

「いい子だったよー。ねぇー、先生」

「うん。そうね、紗弥加ちゃん」

姉にそう答えて先生は父の方を見た。父が見返すと、苦笑しながら一枚の画用紙を父の手にしっかりと握らせた。

「がんばってくださいね！！」

父が不思議そうに見返しても先生はただうなずくだけだった。質問しようにも、姉が腕を引いて帰ろうと促すので、さっさと暇を告げて幼稚園を後にした。

「その画用紙の中身は？」

さあ。そこまでは私も知らないのである。姉ならば知っているの

では？画用紙なのだから姉が描いたものだろう。
「姉貴、中身は？」
「そんな幼稚園の頃の落書きなんか覚えてないよ」
まあ、少なくとも幼稚園の先生に父が励まされるような内容だったに違いない。
「だろうな」

第４４話　雨が降ると歌いたくなる（後書き）

タイムリー！！今日雨降ってるのでこんな内容にしてみました。
ところで犬はどこに行ったのでしょうか？犬の描写までするのが面倒だったので犬が出てこない状態に。
ちなみに姉が歌っている『あめふり』という童謡にはちゃんと続きがあるんですよ。一番までしか知りませんでしたけど。気になる人はネットで検索してください。

第４５話　塚田孝司物語

塚田孝司、九州は熊本の生まれ。九州男児という言葉が最も似合わない男。モテないという理由で訛りは決して出さない。
弟の姉、斎藤紗弥加に毎度毎度名前を間違えられる。弟こと斎藤俊介も時々わざと間違える。
軽いノリのキャラクターなのに、何故登場当時七三眼鏡だったのか謎。
その他、無駄とも言える設定が主人公たちよりも多い。
これは「お姉様と弟クン」の脇役、塚田孝司の生き様を描いた物語である。……多分。

「さ・い・と・う」
弟の苗字を一音ずつ区切って言いながら、塚田が肩に手を置いた。
「なんだよ」
「なあ、今日暇？暇だよな？暇だろ？」
畳み掛けるように塚田が言った。ほぼ暇だと断定している。
「なんか用か？」
講義のノートとにらめっこしながら塚田の方は見ずに聞く。
「今日の講義終わった後なんだけど…」
「無理」
「まだなにも言って…」
「無理なもんは無理」
肩に置いてある手を払い落とした。
「せめて用件ぐらいは聞いてくれ…」
「じゃあ言えよ」

なんでこんなに上から目線なのかと思いつつ、塚田が口を開いた。
「今日、合コンなんだけど、一人足りないから来ないか…？」
「無理。今日は姉貴が早く帰ってくるらしいから、余計なことされる前に帰りたい」
「…うん。もう答えは分かってた…」
哀れ塚田。いつものように塚田は弟にフラれた。
力なく席に着いて、寝そべる。授業を聞く気はなかった。寝そべっているうちに頭がぼーっとしてきて、自然にまぶたが下がる。
「…だ」
「……」
「…かだ、塚田」
「…ん？」
重いまぶたを持ち上げる。目の前に弟がいた。塚田の前の席に座っているのだから不自然なことではない。ただ、弟が満面の笑みなのには不自然さを感じた。
「ど、どうしたんだ！？」
「なにが？」
口調はいつも通りだが、まだ笑みを浮かべている。
「お前、ホントに斎藤！？偽者じゃないのか！？」
「偽者ってなんだよ」
不満げな口調でも、笑みを浮かべている弟はかなり上機嫌にすら見える。こんなに上機嫌の弟は見たことがない。
「……じゃあ、なんで笑顔なんだ？」
「別に笑ってないだろ」
これほど説得力のない言葉があるだろうか。
「自覚ないなら、まあ…いいか。で、なんか用？」
弟が笑みを深めた。
「お前よく寝てたな」
「そうか？」
塚田からすればほとんど寝た気はしていなかった。眠りに落ちて

まもなく弟に起こされた。
「そうか？」
首を傾げて塚田がもう一度聞く。
「寝てた寝てた。俺が何回塚田って言ったことか」
「３回」
「クイズじゃないから数えてねぇよ」
弟が笑った。あの弟が笑ったのだ。
「お前、今何時か知ってる？」
「２時ぐらい…」
そう言いながら携帯電話で時間を見る。１５という数字が目に飛び込んできた。
「３時半…？」
「正解」
「…これから授業じゃ…」
「これから４限だからもう今日の授業は終わったんじゃないのか？」
弟がニッコリと笑う。塚田にもようやく弟がどうしてこんなに上機嫌なのかが理解できてきただろう。
「えー……３限は？」
「もう終わった」
「…よく寝てたって……」
弟がさっきまでやっていた英語の教科書を振る。
「授業始まったから何回も呼んだのに起きないんだもんな、塚田くんは」
「……英語だったっけ？」
「そうですよ。塚田くんの大好きな英語です。あぁ、そうそうこれ」
弟が塚田に一枚のメモ用紙を差し出した。
「Ｐ１２からＰ４５…何これ」
「先生が見かねて出した、塚田への課題。ちなみに来週まで」
「…これはページ数？」
「Ｙｅｓ，ｉｔ ｉｓ．教科書の１２から４５ページまで全文訳だ

ってさ。がんばれ塚田」
塚田の手からメモ用紙がひらひらと落ちていく。弟が意地悪く笑った。
「先生から伝言で『これだけやれば英語もできるようになるでしょう、さすがに』って」
椅子にピッタリと背中をつけて上を向く。
「…夢、これはきっと夢なんだ。だから起きなきゃいけない」
残念ながら夢ではないので、今日の合コンもキャンセルして塚田は英和辞典と戦うのであった。

第46話　暑い日ってやる気なくなるよね

「あーつーいー」

5月、普通なら風が僅かな熱を持って、薄着でも過ごしやすいという季節である。あくまでも普通の場合であって、『僅かな熱』ではなく『かなりの熱』を持った今日という日は普通の5月とは言えない。今日の気候は例えるなら梅雨も去り、気温が一気に高くなった7月だろう。

「あー…つー…」

弟は完全にだれていた。今日は特に授業もないため、一日中家にいる予定である。しかし、やることがないと人間はダラダラしてしまうものだ。ダラダラしていると、この5月らしからぬ気温が気になってくる。

「あーつー…いー」

ソファからゴロッと落ちて床にベタッと張り付いた。木製の床の方が布製のソファよりも冷たいので弟は張り付いたまま動かない。

「冷……」

「わんっ」

床に落ちている弟の背中に犬がのしかかる。ソファよりもむしろ暑くなった。

「わんっわんっ」

「…暑い」

そんなに暑がるならクーラーを使えばいいだろう。

「電気代がもったいない」

…主夫。

「主夫じゃない。それに今からクーラーなんか入れてたらどうやって夏を過ごすんだ」

「わんっ」

「ほら、犬も同意してるぞ」

犬はただ弟にかまってほしいだけである。
犬を撫でてやりながら弟は尚も床でごろごろしている。
「あー…もう昼だ…」
弟がちらっと時計をみた。針は１２時１０分前を指している。
「ひるー…ひーるー……昼寝」
そう言って犬からも手を離し、完全に目を閉じる。犬は不思議そうに弟を見つめた後、弟の横に並んで、仰向けで転がった。そして一人と一匹は深い眠りに落ちていった。

「ただい…」
姉が帰ってきた。リビングの床で野に倒れたように寝ている弟と犬を見て驚きの表情を浮かべる。
「犬じゃない…」
仰向けで熟睡する犬はあまりにも無防備すぎて、犬らしさにかけていた。
「犬としゅーちゃんが一緒に寝てるところなんて、そうそう見られないよね…。写真写真」
いそいそと鞄から携帯電話を取りだして、カメラを弟に向けた。
「…撮ってんじゃねぇよ」
むくりと弟が起き上がる。不機嫌な顔をして頭を掻いている。
「起きてたの？」
「今起きた」
姉は惜しいことをした。さっさと撮ればよかったのに。
「天の声…」
低い声で弟が静かな抗議をする。
「だってしゅーちゃん、この犬の眠り方は写真撮るしかないでしょ！？」
姉がケータイを持った方の手で指差す。犬は相変わらず仰向けのままのんきに寝ていた。もし人間だったらいびきまで聞こえてきそ

うである。
「…珍しい眠り方だけど、俺まで撮ろうとするな」
「しゅーちゃんが床で寝てるなんて珍しいじゃない！」
「…しゅーちゃんて誰だよ…」
色々言いたいことを胸にしまって、静かにつっこんだ。
「しゅーちゃんはしゅーちゃん以外の何者でもないでしょ」
姉がやっと携帯電話をしまって、当然と言わんばかりに答えた。
「いや、俺俊介だから」
「いいじゃない、しゅーちゃんで」
姉と弟の不毛な闘いが続く。
二人の声でやっと犬が起き上がって、自分の小屋に帰っていった。小屋でまた眠るのだろう。
夫婦喧嘩は犬も食わないと言うが、不毛な姉弟喧嘩も食わないようだ。
「ちょっと待て。まだ終わってないんだから、まとめようとするな」
弟から抗議の声が上がった。
そんなことを言われても、今のところでしめるのがちょうどいいと思ったのである。
「お前はなんでこの世界の全権を掌握してるんだよ」
「全権を、しょ、しょうあく？」
「姉貴、大丈夫か？日本語だぞ」
なんでも何もナレーションの特権である。
「ずるい。私にもその特権分けてよ」
「…もう持ってるから」
どんなに弟が頑張っても姉には勝てないのである。

第４６話　暑い日ってやる気なくなるよね（後書き）

次回に続きます（たぶん）

第47話　もちろん竹より団子が優先ですよ

「あかりをつけましょぼんぼりに～♪」
「それ違う」
「えー。じゃあ何？」
「……なんだっけ？」
ツッコミをいれた弟も忘れていた。
今日7月7日は七夕。お空のどっかで遠距離恋愛カップルが一年に一度会うと言われているような気がする日。
「ロマンのかけらもない言い方するなよ…」
だったら弟がもっとロマンチックに解説すればいいのである。
「仕事放棄するなー」
「で、七夕って何食べる日？」
姉が無理矢理話題を変えた。
ちなみに只今リビングでごろごろしながら夕飯のメニューなどを考えていた。テレビの七夕特集で今日が七夕だとやっと気づいたのだが。
「そうめん」
「そっかぁ。七夕はそうめんを食べる日……ってそんなわけないでしょ！」
姉はノリツッコミを会得した。
「いいだろ。うまいよそうめん。何より夏の手抜き料理代表」
絶対に後半の理由でそうめんを勧めている気がしてならない。
「よしっ！じゃあ行ってくるね！」
姉が突然立ち上がった。その勢いでソファの座面が跳ね上がり、ぼーっとしていた弟が横向きに倒れ込む。そんなことは気にもせず、姉はそろそろ炎天下という言葉が似合ってきた外へ出て行った。
ソファに転がったままの弟がつぶやく。
「どこに？」

「ただいまー」
弟がテキパキとそうめんの用意をしていたところに姉が帰ってきた。ただのそうめんだと色々文句を言われそうなので具を乗せた、冷し中華風そうめんである。具は普通の冷し中華を作った時の残りなので、今風に言えばエコ、昔風に言えばもったいない精神の塊で作ってある。
「おかえ……」
弟がキッチンから顔を出したままの格好で固まった。
そんな弟には気づかずに姉がガサガサと入ったきた。そうガサガサと。
「……」
「すごいでしょ、これ」
「……」
「しゅ、しゅーちゃん？」
「……」
「もしもーし。聞こえてますかー？」
「しゅーちゃんじゃねぇよ…」
ツッコミのキレがすっかりなくなっている。それもそのはず、帰ってきた姉は手に、というか肩にかけて持っていたのだから……竹を。
「ご感想は？」
「…パンダにでもなる気か」
姉が笑った。竹を持ったままだったので竹も一緒にガサガサ鳴る。
「パンダは熊笹だよ。それに別に竹を食べる気はないからね」
笹であっても普通の日本人は食べない。
「ほら、七夕なんでしょ？だったら雰囲気だけでもと思って笹…じゃなかった、竹を貰ってきたの」
「誰に？」

「そこらへんの気のいいおじさん」
「よく都合よくそんな人いたなぁ」
「この世は情報戦よ！」
竹の？
「まあそんなことはいいから早速飾り付けよう」
「……そうめん伸びるけど」
竹をさっとリビングの片隅に置いて、ダイニングテーブルに座る。
「ご飯優先で」
「だろうと思った」

冷し中華風そうめんを食べ終わってようやく姉弟は竹の前にやってきた。竹と言ってもマンションの部屋に入る程度の小さめの枝である。
「さてと飾り付けと言えば…」
姉がちょっと高いお菓子を買うとよく貰うような直方体の箱を持ってきた。中には折り紙と短冊になりそうな色画用紙が入っている。
「よくそんなの持ってたな」
「うん。ちょっと仕事で使った残り」
「…仕事で？」
「細かいことは気にしなーい」
パタパタと折り紙を折り始める姉。それを固唾をのんで見守る弟。やがて姉の手から鶴が作り出された。
「鶴なんか作れたんだな」
「鶴ぐらい折れるに決まってるよ。幼稚園の時に習ったもん」
「…鶴、飾りにしなくないか？」
「……」
まあまあ。どうせ誰も見ないんだから。
「…どうして姉弟でこんなことしてるんだろ」
「やりたかったんだからいいじゃない」

「姉貴、彦星見つけて、二人でやれよ」
「だったらしゅーちゃんも織り姫探してきなさいよ」
「…あと二年は無理」
姉の方を見ながら弟が言った。
姉は弟の視線など無視して竹をみている。
「じゃあ、あとはしゅーちゃんが飾り作って、私が何枚か短冊書けば完成かな」
「俺に短冊一枚も書かせない気か」
「かたいこと言わないの」
「かたいことじゃないから」
文句を言いつつ弟は飾りを適当に作り始める。その横で姉は短冊を書き始めた。
『しゅーちゃんにかわいい彼女ができますように』
そこまで書いて満足げに笑ってさらに続ける。
『って書こうと思ったけど、夕飯がそうめんだったから来年はもっと豪勢なものが食べられますように』
「ちょっと待て!!何書いてるんだ、何を!!」
今日も賑やかに夜はふけていく。

第４７話　もちろん竹より団子が優先ですよ（後書き）

今日気がついて今日書きました。間に合ったのは奇跡！！

第４８話　運命の判断基準は自分

「つ、塚田？」
「……」
「おーい」
「……」
珍しく弟から塚田にからんでいる。が、このとおり塚田は無反応で、眼はあさっての方を向いている。
ためしに軽く小突いてみたが、塚田はぼーっとしていてこちらを見ない。いい音がする程度まで強く叩いてみた。
「塚田ー」
「……」
「七三眼鏡」
「……」
「…姉貴が手料理食べ」
「マジで！？」
弟が最後まで言い終わる前に塚田は答えた。さきほどとは違い、目を輝かせている。
途端に弟は視線を逸らした。あの手料理を食べたがるやつの気が知れないと、態度で言っている。
「で、そんなにぼーっとしてなんかあったのか？また英語がピンチとか」
「英語ピンチなのはいつもだからたいしたことじゃないだろ」
たいしたことだろう、それは。
「じゃあどうしたんだよ。そんなにぼーっとして」
「運命かも…」
「は？」
「この出会いは運命に違いない！！」
そう言って塚田が弟の両手を掴んだ。弟が可能なかぎり離れてい

く。
「信じろ、斎藤！！」
「その前にお前は周りの状況をよく見ろ！」
弟に促されて塚田が周りを見回す。
さきほどまでは普通に談笑していた周りの人々は、二人から離れてコソコソと何か言い合っている。簡単に言えば二人の関係について。
ようやく事態に気がついて手を放した。その瞬間に弟は椅子一個分離れる。
「…斎藤、そんなに離れなくても」
「不可抗力だ。で、何が運命だって？」
「そうそう！あれは俺が大嫌いな英語の授業に向かう途中のことだった…」

心底嫌そうな顔をしながら塚田は教室へと向かう。サボりたいが、サボると確実に単位を落とすので嫌々行かざるをえないのだ。
ふらふら、ふらふら、ただ足を動かしてる。
教室どこだっけ…？
あまりにもぼーっとしすぎていたために教室を通り過ぎてしまったようだ。
あーあ…。まあまだ時間あるし…。
「貴方なにしてるの！？」
「へ？」
鋭い叱責の声が背中越しに聞こえた。声の高さや口調から女だとは思ったが、振り返るとそこには塚田好みの美人が立っていた。
うわぁ何これ運命の出会い！？神様ありがとう！！
「貴方ここで何してるの！？」
塚田が答えないから焦れたのか、美人さんがもう一度言った。
「何って何も…」

「ここから先は研究室よ。部外者は立ち去りなさい！」
「え！？す、すみません」
それにしても随分上から目線だ。
そう思っていると、美人さんは塚田などまるでいなかったかのようにすたすたと研究室へと消えて行った。
研究室に入っていったということは研究室の関係者だろう。院生かとも思ったが、それにしても上から目線すぎる。３０歳前後に見えたが、あれでも教授なのかもしれない。そういえばネームタグを首から提げていた気もする。助手という線も捨てきれないが。
それにしても美人だなぁ。
塚田はしばらくその場で呆けていた。もちろんそれも何気なく時計に目をやるまでだ。

「という運命の出会いがあったんだよ！！まさかこの学校に俺の好みにピッタリ当て嵌まる人がいたとは！！」
「あー、そう。でも塚田の言う運命の出会いの後に、姉貴の飯に釣られるって随分気が多くないか、築地くん」
「築地って、もう原形留めてねぇよ…。まあ、お前のお姉さんは別格だから。分類が違うわけよ、俺の恋愛中枢の」
「それを気が多いって言うんじゃないのか…？で、その教授らしき人どんな人？」
「おっ！気になってるな！！」
塚田がニヤニヤとした笑いを隠そうともせずに弟の方に乗り出す。
弟は自然に一歩ひいた。
「塚田が今度はどんな一癖ある人物に惚れたのか、がな」
「そんなに癖ある人に惚れてる気はないけど…。そうだな…すらっと背が高くてモデル体型。うなじのところで長い髪を一つにまとめて、歩くと同時に左右に揺れるわけよ。唇の左下にほくろがあったな…」

「あー…それピシッとベージュ系のパンツスーツ着てた…？」
塚田が目をまるくして、頭が痛そうに額を押さえている弟を見る。
「よくわかったな。もしかして知ってんの！？」
「知ってるっていうかその人の授業取ってる…」
「何お前！抜け駆け！？教えろよ、親友だろ！！」
「親友じゃねぇし、抜け駆けでもねぇし。世界情勢の先生だよ。お前取る気ゼロだっただろ。とりあえず言っとくよ。あの人はやめておけ」
珍しい弟の忠告。いつもなら塚田のことなどほって置くだろうに、どういう風の吹きまわしなのか。
「とばっちりがきそうな予感がするんだ」
「とばっちりの予感で友達の恋心を踏み潰さないでー」
「むしろもうちょっと見る目を持て。性格キツイの好きも大概にしろ」
「えー。……性格キツイのか？」
弟が欧米人のように肩をすくめてみせた。
「遅刻したら教室に入れないのは当たり前。レポートも出来が悪いと書き直し。しかも毎時間レポート一枚が課題。すぐ怒るしめちゃめちゃうるさい」
「厳しいと性格キツイは違うんじゃねぇの？」
「紙一重だろ。あ、それとあの人たしか准教授だから」
塚田は目を閉じた。腕まで組んで何やら考え込んでいる。
弟はやけに真剣に教科書をめくっている。そういえばもうすぐ試験があったはずだ。
「……准教授…いいかも…」
塚田の口からのぼせ上がったセリフが出ても弟は集中していて聞いていなかった。

第４８話　運命の判断基準は自分（後書き）

お久しぶりすぎてすいません。久しぶりな上にいつもより長いです。塚田にそんな字数を割く気はなかったんですけど、なんか弟が余計なことばっかり喋ったのでこの状態に…。おかげで天の声のセリフが…。てかむしろあとがきが長いですねすいません。

ちょっと私が書くスピードが時間の流れに追いつけないので小説内は時間をずらしました。現在7月下旬です。次回あたりから夏休み突入します。実際はもう秋ですけどね。真冬に夏休み書いてても許してください。

第４９話　本日は趣向変え

ほとんど街灯のない暗い道を女性が一人歩いていた。
彼女とて本当ならばこんな道は通りたくないが、この道が駅から自宅のあるマンションまでの一番の近道だった。もっと人通りの多い道を歩くと１０分近く違ってしまうのだから仕方ない。
いつもはもう少し早い時間に帰るのだが、今日は終業直前に面倒な仕事が回ってきて、こんな時間になってしまった。周りの家はちらほら明かりが消えているところもある。
出来るだけ足早に自宅を目指して歩き続ける。
ひたひたひた。
足音が聞こえた。彼女が足をさらに早める。
ひたひたひた。
その音はピッタリと彼女についてきた。
怖くなって彼女は振り返る。
しかし後ろには何もいない。途中で曲がったのかもしれないと思い、彼女は後ろを見たまま歩きだした。すると…
ひたひたひた。
人はいないのに足音だけがついてくる。
鞄をしっかりと抱えて彼女は逃げる。
しかし、足音はなおも聞こえる。しかも彼女の真後ろから。
早歩きだったのがいつの間にか全速力で走り出していた。
それでも足音が止むことはない。
彼女が鞄を抱え直そうとした時、何かに足を捕まれた。勢いで彼女は倒れ込む。
立ち上がろうとして自分の足を見た時、彼女はストッキングにしっかりと赤い手形がついているのを見てしまった。さきほどまで聞こえていた足音も消えている。
ポンと肩を叩かれて彼女が振り向いた――――。

「ただいまー」
「きゃあぁぁ！！」
帰ってきて早々弟は犬を抱いてカーテンに包まっている姉を見つけた。
「何やってんの…？」
「ちょっ！！驚かさないでよ！！」
弟とわかって姉が恥ずかしそうにカーテンから出てきた。
「別にいつも通りに入ってきただけだろ」
「タイミングが悪すぎ！！」
「意図的にやったわけじゃないし」
「じゃ、じゃあ帰ってくる直前にメールぐらいしてくれれば…」
「なんでだよ」
いつもやらないのにと文句を言って弟がテレビの前のソファに座る。テレビをつけようとしたら姉が止めにかかった。
「だめ！！このテレビは呪われてるのよ！！」
「はあ？」
「だからつけちゃだめ！今日の7時まではだめ！」
リモコンは姉の手の中、本体の前には姉が立ちはだかっていてとても弟にはつけられない。
「……」
弟が何か思いついたようにニヤリと笑った。
「…さて姉貴、ここでクイズです」
「何？」
「俺が手も足も使わずにそのテレビをつけるにはどうしたらいいでしょう」
「そんなことできるの？」
不思議がる姉を勝ち誇ったように弟が見ている。犬はなんだか楽しいことが起きそうだとしっぽを振っている。
「じゃあ実験してみようか」

「え…。今…？」
当たり前だろと言いたげな表情を姉に向けた。
「つけろ、天の声」
はいはい。
パッとテレビがついた。姉がさっきまで見ていた番組が映る。
「あーあーあーあー！！」
自分の耳を塞いでテレビの音が入らないように声を出す。
そんな姉をどかして弟がテレビを見た。
「なんだ。怖い話特集か。姉貴が止めるからもっと別のものかと思った」
「だって怖いじゃない！！というか天の声使うなんて卑怯！」
「どこが怖いんだよ、こんなの」
「ちょっと後半無視しないでよ！！」
弟がテレビを消して、姉の腕から犬を奪った。悠々とソファに座って犬を撫で回す。
「そんなに平然としてないでよ！」
「じゃあどこが怖いのか上げてみろよ」
「…後ろから足音だけ聞こえるとか」
「常日頃、それ以上の超常現象にあってんのにそれぐらいでうろたえないし」
「え！？しゅーちゃん実は幽霊とか見えちゃう…」
「姉貴もあってるだろうが」
「私も！？」
頷いて弟がおもむろに手をパタパタ振りはじめた。何をしているのだろうか。
「ほらこれこれ」
「どれ？」
「身体ないのに声だけ聞こえる。身体ないのにテレビつけたり、鍵開けたりできる不思議生物」
「あー、天の声？」

というか不思議生物って……。
「現実にいる分、へたな怪談より上いってるだろ」
「なるほどー」
納得しないで欲しい。
「じゃあ怪談も全部天の声の仕業だと思えば…」
「うん。無理だろ」
身体がないので、手形は残せないのである。
「せっかく人が忘れようとしてたのにー！！」

第４９話　本日は趣向変え（後書き）

さてさて、物語は7月終わりなので怪談にしてみました。これのネタは随分前からあったんですけどね。

タイトルが『趣向変え』なのは最初の怪談の女性がお姉様だと誰か誤解してくれるんじゃないかと狙ったからです。『怪談』と入れたらバレバレなので。誰か引っ掛かってくれました？

次回はいよいよ『談笑会』です。質問送って頂いた方々、ホントお待たせしました。

第５０話　第２回談笑会

「さて始まりました。第２回談笑会。司会進行役、姉こと斎藤紗弥加です。そしてこっちがしゅーちゃん」
「しゅーちゃんじゃねぇよ。俊介だ。姉貴、いい加減まともに名前呼んでくれても…」
　そうそう。まともに名前を呼んでもらったことのない塚なんとかの名前を一回ぐらい呼んでもいいのではないか。
「それは無理な注文よ！」
「どこがだよ」
「話の流れ的に間違えなきゃ！」
「そんな空気読むな」
　弟の言う通りである。
「天の声だってこう言って……天の声？」
　ナレーションは天の声がお送りします。
「いや…うん……前回が随分前だったけど、談笑会だけ地の文、作者じゃなかったか…？」
　作者はストライキである。
「ストライキするほど仕事してねぇだろ」
　もしくは仕事放棄。
「なんでよ！」
　いい質問だな姉。現在作者は絶賛迷走中である。迷走しすぎて、キャラクターの口調も忘れかけたため、思い出すためにも私がここに来ているというわけだ。
「……ようは、天の声の喋り方を忘れかけてるのか…」
　そのようだ。
「ならもっと頻繁に書けばいいじゃない」
　いいツッコミだが、『クリスマスは重要すぎる！』とのことだ。
まあこれを書いている時点で余裕があるということなのか現実逃避

と見るかは自由である。
「クリスマスってあれか。作者一人で気合い入りすぎてて閲覧者が置いて行かれそうな企画…」
「クリスマス関係なくなりそうな…」
あまり言わない方がいいだろう。容赦のない制裁が来そうな気がしないでもない。弟に。
「しゅーちゃんにね」
「なんか理不尽！」
さて、そろそろ本題に入ろうか。
「はいはい。まずは突然飼いはじめた犬の名前募集ね」
「あー、いたな犬」
忘れるとは酷いな。
「まあそんなこともあるだろ」
「えー、ピタゴラス、フロイト、ヴング、ユント、ワトソン、スピノザ、ユーフラテス、コロンブス。どれがいい？」
「いや、聞くなよ。作者が決めてんだろ？」
あー…弟。
「なんだ？」
非常に言いにくいが…『決めるの忘れてた☆ｂｙ作者』とのことである。
「え……」
「え……」
その反応も最もであるが、候補からして決めようがなかったらしい…。
「まあ、コロンブス以外全部学者だしね…」
「決めることすら放棄したのか、あの作者」
まあそういうことである。私は名前が決まっても犬と呼ぶからどうでもいいのだが。
「お前はな…」
「じゃあしゅーちゃん。ユントとかどう？一番短くて言いやすいよ」

「姉貴は切り替え早いな」
「それが私のいいところよ！」
「そうか…」
まあユントということでいくか。
「決定か…」
決定である。
「さあじゃあ次行きましょう！えー…お便りです。しゅーちゃん読んで」
「ペンネーム『お姉様のファン』さんから……意外と多いよな、姉貴のファン」
感想も姉のファンが大半のようである。
「ありがとうございます！」
「えーっと…『第1回の談笑会で俊介の学部が明かされていましたが、紗弥加さんはどういったことをする仕事場で働いているのでしょうか』だそうだ。姉貴答えて」
「貴方の心の中で働いています」
まるで私のようだな。
「……真面目に答えてくれよ。天の声ものるな」
「一度ボケておかないとね！」
ボケられたらのらなくては！
「…ボケの使命みたいなこと言うなよ。で、答えは？」
「一言でいえば広告代理店。そこの開発事業部という名のよくわからない職場よ！」
「働いてる本人がよくわからないって…」
とりあえず仕事内容を簡単に教えてくれ、姉。
「そうねー。会議して広告の企画ねって会議して上司に突っ掛かって会議して企画を営業に持っていって会議するような仕事です」
「……そうか。次行くぞ」
弟は流すという技術を覚えた。
「さて次はペンネーム『家政婦に弟が欲しいリターンズ』さんから」

「リターンしなくていい」
まあまあそう言わずに。いじけることはないだろう弟よ。
「『父は母の何処に惚れたんですか？
弟は誰から料理を習ったんですか。やっぱり父……？』だそうです」
「とりあえず二番目の質問の答えは独学。たまに父さんに電話できいたけど、後は本屋で料理本立ち読みとかだよ。姉と暮らし初めて、これは自炊しなきゃ死ぬと思ったからな」
「なんですって…？」
「なんでもありません。一番目の質問は父さんじゃなきゃわからないだろ」
そう言うと思ってお呼びしました！さあ登場していただきましょう！斎藤家父です！
「な、なんだここ！？天の声が呼ぶから来たが…」
「あれ？来たんだ？来なくてもよかったのに。私が話を捏造するから」
姉、ブラック面が隠しきれてないぞ。
「ますます母さんに似て……」
泣くな父よ。
「あーはいはい！父さん質問来たんだけど、答えてくれよ」
「ん？母さんのどこに惚れたのか？あー……うん……出会ったあの頃の母さんは大学のアイドルだった……はず……」
ようは顔。
「天の声の要約が酷いな！」
まあ一目惚れってやつだったな父よ。
「……」
「話が進まないのでサクサク行くよ！次は三兄弟の命名理由」
そういえばそんなものもあったな…。
「どうせ来てるならお父さん答えていって」
「三人の名前の由来は…母さんが付けたんじゃなかったか？どうも

全員さ行にしたかったようだが」
「紗弥加、俊介、鈴。ああたしかに。ならもう一人出来てたらせから始まる名前だったのか」
「せはもういい…」
ピンポーン。
「残念ながらお時間となってしまいました。司会進行は私、紗弥加と」
「弟の俊介。ゲストは父さんでした」
「え？え？」
ナレーションはいつも通り天の声。
「それではまたー！！次回があったら会いましょう！！」
「質問が来たら第３回談笑会をやるらしいぞ」
まあ作者もテキトーだからな。
「え、あ…の、終わるのいきなりすぎないか？」
「気にしなーい」

第５０話　第２回談笑会（後書き）

終わるのいきなりすぎる以前に話変えるのいきなりすぎる…。
どうも！ストライキした作者です！おかげで天の声の口調は思い出したような気がします。
次の談笑会は未定になってますが…まあ、質問とかネタとかないと書けないしね…。
次から弟の夏休み編です。でもきっと書く時期は冬休み…。

第５１話　みかんの汁は目薬ではありません

ゴトン。

大きな音を立ててテーブルの上にビニール袋が置かれた。何の変哲もない袋だが、中身の重さのせいか、手提げの部分が憐れなほど伸びきっている。袋自体もでこぼこと、原型を留めていない。

その袋は弟の手を離れた瞬間、重力に従って横に倒れた。中身がごろごろと転がる。

しかし、それはテーブルから落ちる直前で弟の手で止められた。

その様子を姉こと斎藤紗弥加と、最近になってようやくユントと名前を付けられた犬が興味深そうに見ている。

「…食っていいぞ」

転がり出たそれに、あまりにも熱い視線を感じたため、弟はそう言った。

「その前に、これどうしたの？」

テーブルの上に転がっていたそれ、大きな夏みかんを手に取り姉が問い掛けた。犬はそのみかんが気になるのか前足を伸ばして振っている。

弟は夏みかんの表面を触って食べ頃か見ているようだ。

「どっかの熊本出身者がもうすぐ里帰りするっていうのに大量に送られてきた夏みかんを抱えて困ってたから貰ってきた」

実際には「夏みかん好きか？好きだよな？そんな斎藤のためにどっさり持ってきてやったぞ！！」「そんなに食えねぇよ」「大丈夫だ！お前のとこはお姉さんと二人暮らしだろ！俺は一人暮らしだけど斎藤にやる分の倍はあるんだ！！」と涙ながらに押し付けてくるのを渋々貰ってきたのである。

「…まあ食えよ。いっぱいあるから」

家に持って帰ってくるだけで弟は疲れきっていた。

「えー。だって夏みかんて皮厚いじゃん」

それはそうだ。夏みかんを全部手で剥こうなど思うことが間違っているのである。
「……」
弟が大きくため息をついた。自分が持っていた物と、姉が持っている物を残してすべてビニール袋にしまって、その口を結んだ。
次にシンクの下から小さめの包丁を取り出した。それで自分の持っていた夏みかんのへたの反対側に十字の切り込みを入れる。そのまま手でバリバリと皮を剥きはじめた。
飛び散る汁を嫌がるように犬がリビングの方に逃げて行った。
弟に皮を剥かれた夏みかんは、白い柔らかな皮に包まれている。それをさらに力技で半分に割ると片方を姉の目の前に突き出した。
「これでいいか？」
ここまでやってやったんだから感謝して食えと言わんばかりの態度だった。
その半分に割られたみかんを姉はじーっと見ている。
「しゅーちゃん」
「なんだよ」
最早何もかもが面倒なのかいつものツッコミすら入れない。視線すでに手元のみかんにあって、丁寧に分厚い薄皮を剥いているところだった。
「…なんならツッコミ入れてやろうか？」
弟の目が据わっているので遠慮願う。
「……」
「でさー、しゅーちゃんこれなんだけど」
「なんだよ」
「剥いて」
「……」
薄皮を剥いてやっと夏みかんを取り出した弟が一瞬固まる。そのすきに姉はそのみかんを掠め取って口に入れた。美味しそ…ではなく、実に満足げである。

それを見て弟は素早く復活する。
「食うなよ！せっかく剥いたんだから！」
「いいじゃん。さあ剥いた剥いた」
「俺は姉貴の召使じゃない！」
「知ってる！目に入れたら流石に痛いけど、可愛い可愛い弟よ！」
「そうか…ならもっと痛いの目に入れてやるよ」
ガタッと椅子を蹴倒して、立ち上がった弟が持っているのはみかんだった。正確には剥いたみかんの皮。
それを姉に向かって構える。こうなったらやることは一つだろう。

「ちょっと待って！待って！その攻撃は小学生しかやらないわ！」
たしかに二十歳越えた姉弟がやることではない。だが、まあこの姉弟なら読者もきっと納得する。
「ちょっと…天の声も止めなさいよ！みかんの汁は目に入れるものじゃないって！」
「……珍しい」
姉がツッコミになった。
「そこ二人！私だって自分がピンチの時ぐらいツッコミ入れるからね！だからとりあえずみかんの皮は放して、椅子に座りなさいしゅーちゃん！」
「俊介なんで聞けませんね、お姉様」
お姉様と言いながら、全くみかんの皮は放さない。むしろ今にも皮を潰しそうである。
姉が慌てて目をガードした。
「わかった自分で剥く！剥くからやめてね俊介」
そう言われてようやく弟がみかんの皮を捨てた。ついでに蹴飛ばした椅子も、ちゃんともとの位置に戻して座る。
何事もなかったかのようにみかんを剥いて、口に運ぶ。姉はそれを未練がましく見ていたが、深く息を吐き出して、自分の分を剥く。

「そういえば姉貴」
「何ー？」
姉は少しばかり不機嫌になっていた。睨まれても私にはどうしようもないのである。
「明日から実家帰るからよろしく」
離婚秒読み夫婦の『実家に帰らせていただきます』！？
「私はしゅーちゃんがいないと生きていけないのに！？」
「お前ら大袈裟すぎ！！まず天の声！帰省の方だからな！そして姉貴！割と最近まで一人で暮らしてただろうが！」
うん、これでこそ弟だ。
「…何としてもツッコミ入れさせたかったのか…」
「で、なんでまた突然帰省？私とユントのご飯は？」
「ご飯の心配かよ！ユントはドッグフードあるだろ。姉貴は…外食してろよ」
「えー。しゅーちゃんのご飯ー」
足をばたつかせて姉が抗議する。弟はそんな姉を見て深くため息をついた。どちらが年上だっただろうか…。
「あー…姉貴だよ、一応」
ピタリと足を止めて、突然手を打った。
「そうだ！じゃあ休みに入り次第、私もユント連れて帰るから！それまで実家で大人しく待っててしゅーちゃん！」
「姉貴こそ、俺が帰ってきた時にまっ先に掃除しなきゃいけないような状況にしないで、大人しくしてろよ」
「えー。無理」
「無理じゃねぇよ。やれよ人間なら」
「人間である前にしゅーちゃんの姉なので！」
「俺の姉である前に人間だろ！！」
姉弟が喧嘩をしている間に、今日も日が暮れていく。

第５１話　みかんの汁は目薬ではありません（後書き）

久しぶりに書いたら加減が分からずダラダラと長くなってしまった…。

しかも最終の予定と展開違うし…。

次回から舞台が実家になりますよ！次回はいつ更新されるんだろうね！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7079c/

お姉様と弟クン

2010年10月8日13時17分発行